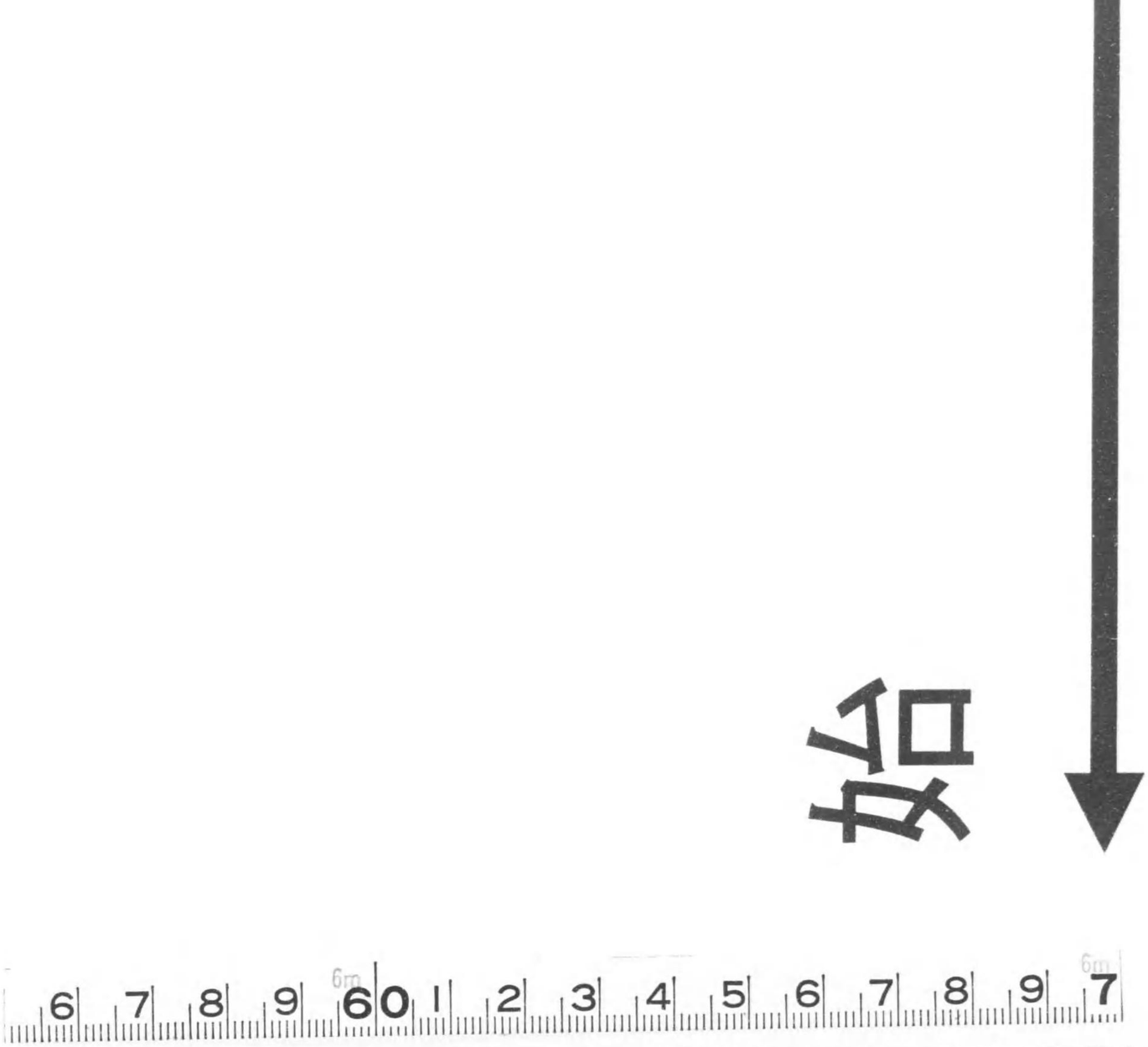
背

538-144

戰爭と平和

第二卷

第四編

一

千八百六年の始め、ニコライ・ロストフは休暇を得て歸國した。ヂェニーソフも矢張りヴォロネージュへ歸鄉する事になつたので、ロストフは一緒に莫斯科まで同行して、自分の家へ逗留するやうに勸めた。莫斯科の一つ手前の驛で、或る友人に出合つたヂェニーソフは、此の男を對手に酒を三本倒した。そして乘繼ぎ橇の底に長くなつて、道の凸凹(でこぼこ)の烈しいのも平氣で、一向眼を醒さうとしなかつた。傍に坐つて居るロストフは莫斯科が近づくにつれて、段々じり〳〵して來た。

「もうすぐかな？もうすぐかな？あゝ、こんな往來や、店や、その店に並んで居る麵麭や、街燈や、辻馬車や、實に忌々しいな！」とロストフは考へた。彼等はもう町の關門で、自分達が休暇で歸つた事を記入して、莫斯科へ入つた。

『ヂェニーソフ、着いたぞ！えゝ、まだ寢てるんだな！』彼は全身を前へ乘り出しながらかう言つた。丁度此の身構へでもつて、橇の速力を早めようとするかのやうに。

ヂェニーソフは答へなかつた。

『あゝ、此處は馬車屋のザハールが辻待して居る四つ角だ。ほら、此處に居るのがザハールだ。そして馬も元と同じだ。あゝ、あれはよく薑餅を買つた事のある店だ。もうすぐかな？おい！』

『どの家ですね？』と馭者が訊いた。

『そらあの一番端にある大きな家だ。一體貴樣あれが見えないのか！あれが俺の家なんだ。』とロストフは言つた。『あれが俺の家なんだ！ヂェニーソフ！ヂェニーソフ！もうすぐ着くぜ！』

ヂェニーソフは頭を上げて咳拂ひをしたが、何とも答へなかつた。

『ドミートリイ、』とロストフは馭者臺に坐つて居る從僕に聲を掛けた。『あれは家の灯りだらう？』

『さやうでございます。そしてお父樣のお書齋も明るいやうでございます。』

『まだ寢ないでゐるだらうか？うん？貴樣どう思ふ――いゝか、忘れちやいかんぞ、すぐ新らしい上衣を出すんだぞ。』新しい髭を捻りながら、ロストフはかう言ひ足した。『さあ、早くやらんか、』と彼は馭者を怒鳴り付けた。『おい、起きろよ、ヴーシャ。』と彼は又もや首を垂れたヂェニーソフの方へ向いた。『さあこら、急がんか、酒代に三留呉れてやる、早く！』もう橇が車寄せから三軒手前まで來てゐるのに、ロストフはかう叫んだ。

彼は何だか馬が動かないやうな氣がした。遂に橇は車寄せ指して右手へ曲つた。ロストフは自分の頭上に、漆喰の剝げた見覺えのある蛇腹や、入口の階段や、歩道の柱などを見た。彼はまだ止り切らぬうちに、橇を飛び下りて玄關へ駈け込んだ。大きな家は誰が自分の中へ入つて來ようと、我不關焉と言つたやうに、依然として不愛想らしくじつと立つて居た。玄關には誰も居なかつた。

「どうしたんだらう！みんな無事なのか知ら？」と考へて、ロストフは心臟の凍るやうな氣持で一寸立ち止つたが、又すぐに見馴れた歪んだ階段を上つて、玄關の奥の方へ駈け出した。いつも伯爵夫人が汚い〳〵と言つて怒つて居た、戸口の把手が矢張り弱々しく開いた。控室には蠟燭がたつた一本燃えて居た。

ミハイロ老人は箱の上で眠つて居た。お供廻りのプロコーフィは(箱馬車の後ろを持つて吊り上げる程の力持であつた)、じつと坐つて布の織り端で靴を編んで居たが、何氣なく戸の開いた方を見やつた時、その氣の無さゝうな睡だけな表情は、不意に歡喜と驚愕の色に變つた。

『まあ、坊つちやま！若旦那樣！』彼は主人だと氣が付いてかう叫んだ。『これはまあ何と云ふこつた？坊つちやまがお歸りなされた！』プロコーフィは昂奮のあまり身を慄はせながら、一同に知らせる爲めであらう、客間の戸口を指して駈け出したが、又思ひ直したらしく引つ返して、若

主人の肩に身を投げた。

『みんな達者かね？』ロストフは自分の手を拐ぎ離しつゝかう訊いた。

『はい、お蔭様で！御蔭様ですつかり――只今夜食をお上りになつたばかりでございます。若旦那様、よくお顔を見せて下さりませ！』

『みんな本當に變りはないかい？』

『お蔭でお變りございませぬ！』

ロストフはヂェニーソフの事をすつかり忘れて了つて、誰にも自分の事を知らせずに、毛皮外套を脱ぎ棄てると、暗い大きな廣間をさして爪先立ちで飛び出した。同じ歌留多机、同じ蔽ひ布の被さつた枝燭臺、何もかも以前の儘である。併しもう誰か若主人を見付けたので、彼が客間まで駈け着かない中に、横手の戸口から何やら驀地に嵐のやうに駈け出して、いきなり彼に抱き付いて接吻し始めた。それから第二第三と同じやうな者が、第二第三の戸口から飛び出した。續いてまた抱擁、また接吻、また驚嘆歡喜の涙が彼を取り圍んだ。彼はどこに誰が居るのか、誰が父か、誰がナターシャか、誰がペーチャか見分けが付かなかつた。一同の者が一時に叫び、語り、接吻するのであつた。只その中に母が居なかつた――それだけは彼も覺えて居た。

『わしはまるで思ひ掛けなかつたよ……ニコールシカ……よく歸つてくれた！』

『あらまあ……珍しい……コーリャが……すつかり見變つて了つたわ！――蠟燭がない！お茶を早く。』

『ねえ、わたしをキスして頂戴！』

『兄さん……わたしも。』

ソーニャ、ナターシャ、ペーチャ、アンナ・ドルベツカーヤ、ゼーラ、老伯爵などが彼を抱きしめた。召使や小間使達も部屋へ一杯になつて、口々に話し合ひながら感嘆の聲を上げて居た。

ペーチャは彼の足にぶら下つて、

『僕にも！』と叫んだ。

ナターシャは兄を自分の方へ屈ませて、軍服の裾に摑まりながら、顔中一面に接吻をした後で、彼の傍を飛び退いた。そして牝山羊のやうに同じ處で踊りながら、黄色い聲で喚き立てるのであつた。

どちらを向いても喜びの涙に輝く愛の眼があつた。どちらを向いても接吻を求める脣があつた。

ソーニャは緋羅紗のやうに赤い顔をしながら、同じく彼の手に取りすがつて、待ち焦れてゐた人の眼に視線を注ぎつゝ、はれやかな顔を仕合せらしく輝かして居た。ソーニャはもう滿十六を過ぎて、非常に美しくなつて居たが、併し此の幸福な歡喜に充ちた昂奮の瞬間、殊にあでやかに見え

た。彼女は微笑を含んで息を殺しながら、眼を放さずに彼を眺めてゐた。彼は感謝するやうにちらと彼女を瞥見した。けれど矢張りまだ誰か待ち受けるやうに探し求めて居た。老伯爵夫人が出て來なかつたのである。やがて戸口に足音が聞えた。が、此の足音は母と思はれぬ程早かつた。

併しそれは矢張り彼女であつた。彼女はロストフの出征中に縫つた、見覺えのない新らしい着物を身に纏つて居た、一同は彼の傍を離れた、と彼は母の方へ駈け出した。二人が兩方から出合つた時、夫人は慟哭しながら彼の胸に倒れかゝつた。彼女は顔を上げる事が出來ないで、只我子の軍服の冷たい紐にひしと押し付けるばかりであつた。誰も氣の付かないうちに、部屋へ入つて來たヂェニーソフは、其處に突つ立つた儘、人々の樣子を眺めて涙を拭いて居た。

『ワシーリイ・ヂェニーソフ、御子息の友達です。』不審さうに自分を眺める伯爵に向つて、彼はかう名を名乘つた。

『おゝ、それはようこそ！知つて居ます、知つて居ます。』ヂェニーソフを抱いて接吻しながら、伯爵はかう答へた。『ニコールシカが手紙で知らせました・・・ナターシャ、エーラ、此の方がヂェニーソフさんだよ。』

同じく仕合せらしく歡喜に充ちた澤山の顔が飛んで來て、ヂェニーソフの髭むくぢやらな姿を取り卷いた。

『あらまあ、ヂェニーソフさん！』とナターシャは黃色い聲を上げて叫んだ。そして歡喜の餘り我を忘れて飛び上り、彼を抱き締めながら接吻した。一同は此のナターシャの振舞に極りの悪い思ひをした。ヂェニーソフも同じく顔を赤めたが、微笑を浮べながら彼女の手を取つて接吻した。

ヂェニーソフは豫(あらかじ)め用意された部屋へ案内せられた。ロストフ家の人々は長椅子部屋に集つて、ニコールシカを取り卷いた。

老伯爵夫人は少しも彼の手を離さないで、一分毎に接吻しながら、我子と並んで坐つて居た。其の餘の人々は二人の周りに群れ集つて、彼の一言一行一瞥をも逃すまいと努めながら、歡喜に充ちた、惚れ〴〵したやうな目を離さなかつた。弟妹らは兄に近い席を、互に爭ひながら奪ひ合つた。そして兄の爲めに茶や、手巾や、煙管(パイプ)などを運んで來る役目で喧嘩を始めた。

ロストフは人々の示して呉れる愛に非常な幸福を感じたが、併し再會の最初の一瞬間が、何とも言へぬほど嬉しかつたので、今の幸福がもの足りなく思はれた。で、彼は何時迄ももつと、もつと、もつと何やら待ち設けて居た。

翌朝二人は旅の疲れで九時過ぎまで寢た。

次の間には軍刀、バッグ、佩嚢、開け放した鞄、汚い長靴などがごろ〴〵してゐた。磨(ふき)き上げられた拍車付の二足の靴は、たつた今壁の傍へ寄せ掛けられた。下男達は洗面器や髭剃の湯や、

埃を拂つた服を運んで來た。邊りには煙草と男の匂ひがしてゐた。

『おい、グリーシュカ、パイプをよこせ！』とワシカ・ヂェニーソフのしや嗄れた聲が叫んだ。『ロストフ、起きないか！』

ロストフは澁い眼を擦りながら、くしや〳〵になつた頭を熱した枕から持ち上げた。

『何うした、遲いのか？』

『遲いわ。九時過ぎてよ。』とナターシャの聲が答へた。そして次の間で糊をした着物の摺れる音と、少女たちの囁いたり笑つたりする聲が聞えた。心持開いた戸の隙間には何か空色したものや、リボンや、黑い髪や、樂しげな顏がちら〳〵して居た。それは兄達が起きたか何うかとナターシャとソーニャとペーチャが、見に來たのである。

『ニコーレンカ、お起きなさいよ！』再び戸の傍でナターシャの聲が聞えた。

『今直ぐだ！』

此の時ペーチャは隣の部屋で軍刀を見付けて、いきなり手に取つた。そして軍人の兄を見た小さな男の子が、何時も感ずるやうな歡喜の情を覺えながら、姉達に取つて半裸體の男を見るのは不躾だと云ふ事を忘れて、いきなり戸を開けた。

『これ兄さんのサーベル？』と彼は叫んだ。

少女達は思はず飛び退いた。ヂェニーソフは慴えたやうな眼附をして、助を求めるやうに友を振り返りながら、自分の毛むくぢやらな足を毛布の中へ隱した。戸はペーチャを入れると又閉つた。戸の向うでは笑聲が聞えた。

『ニコーレンカ、部屋着の儘で出ていらつしやい。』とナターシャの聲が言つた。

『これ兄さんのサーベル？』とペーチャが訊いた。『でなければ、あなたのですか？』熱情的な尊敬をもつて彼は髭だらけな、色の黑いヂェニーソフの方へ向いた。

ロストフは急いで靴を履き、部屋着を纏つて室を出た。ナターシャは拍車の付いた長靴を片足に履いて、今一方の足にも履き掛けて居た。ソーニャはきり〳〵舞ひをしながら、今にも服の裾を擴げて、べつたり床へ坐らうとした處へ、ひよつこりロストフが出て來たのである。二人とも同じ新しい空色の服を着けて、生き〳〵と樂しさうな薔薇色の顏をして居た。ソーニャはいきなり逃げ出したが、ナターシャは兄の手を取つて、長椅子部屋へ引つ張つて行つた。やがて二人の間に話が始つた。二人は外の者には何の興味もない、無數の瑣末な事柄に就て、互に訊ね合つたり答へ合つたりして、幾ら話しても話し盡せないやうな氣がした。ナターシャは兄の言葉や自分自身の言葉に、一々笑ひ聲を上げた。それは何も話が可笑しいからではなく、彼女の氣分が浮き〳〵して居たからである。彼女は笑ひとなつて現れる喜びを、抑へる事が出來なかつた。

『まあ本當にいゝわねえ！』彼女は何でもかう附け足した。

ロストフは熱い愛の光線の作用で、一年半後に始めて心の中にも顏の上にも、家を出て以來一度も淫べた事のない、子供らしい微笑が擴るのを感じた。

『ちよいと、お聞きなさいな、』と彼女は言つた。『兄さんはもうすつかり大人になつたの？わたしね、あなたがわたしの兄さんだと思ふと本當に嬉しいわ。』彼女は彼の髭に觸つて見た。『わたしは兄さん達男つてものが、何んなものだか知りたいわ。わたし達と同じやう？違つて？』

『何故ソーニャは逃げ出したんだい？』とロストフは訊いた。

『えゝ、あれには色々譯があるのよ！兄さんはソーニャとどんな風に話をして？お前と仰しやるの、あなたと仰しやるの？』

『出たとこ勝負さ。』とロストフが言つた。

『あなたと言つて頂戴、後生だから、わたし後で譯を話すわ。いゝわ、今言つて了つてよ。兄さんも知つてるでせう、ソーニャはわたしの友達なの、それもあの人の爲めには手まで燒く程の友達なの。ほら、御覽なさい。』

彼女は紗の袖を捲つて、長い瘠せた華奢な手を出した。その肩の下――肘よりずつと上の邊(それは舞踏服でも隱れるやうな處であつた)にある赤い傷あとを見せた。

『これはわたしがね、ソーニャに愛を證明する爲めに燒いたの。なんでもないのよ、卦算を火で燒いて、それを押し附けたの。』

自分の元の勉强室で、肘掛に枕を載せた長椅子に腰を掛け、此のナターシャの無上に元氣附いた眼を眺めて居るうちに、ロストフは又家庭的な子供らしい世界に入つた。それは外の誰に取つても無意味なものであつたが、併し彼に取つては、人生に於ける最も悅ばしい快樂の一つであつた。それ故、愛を證明する爲めに卦算で手を燒いたと云ふ話も、あながち無益とは思はれなかつた。彼は其の心持を了解したので、別に驚きもしなかつた。

『それで何うしたの？それだけかい？』と彼は訊いた。

『まあ、それ位仲がいゝのよ！なあに、そんな事は何でもないの、馬鹿なことなのよ、卦算で烙くなんて。けれどもわたし達は何時迄も親友なの。ソーニャは一旦誰かを愛したら、永久に變らないわ。でも、わたしには其の心持が分らなくつてよ、わたしすぐ忘れて了ふの。』

『さう、で何うしたの？』

『ねえ、あの人はわたしとそして兄さんを愛してるのよ。』

ナターシャは不意に赤くなつた。

『ねえ、兄さん覺えてるでせう、出立の前に……ね、あの人の言ふには、あの事は兄さんにす

つかり忘れて貰ひたいつて……あの人はかう言ふの、わたしは一生あの人を愛するけれど、あの人は自由であつて欲しいつて。ねえ、さうぢやなくつて、立派な言ひ分でせう、潔白な考へでせう！――ね、ね？ほんとうに潔白でせう？ね？』とナターシャは昂奮した眞面目な調子で訊ねた。其の樣子から察すると、今彼女の言つた事は、以前も二人で涙ながらに話した事があるらしい。

ロストフは考へ込んだ。

『僕は何んな事だらうと、一旦言ひ出した事を取り消したりなんかしない。』と彼は言つた。『それにソーニャは全く可愛い子なんだもの、さういふ幸福を棒に振るやうな馬鹿はありやしない。』

『いゝえ、いゝえ、』とナターシャは叫んだ。『わたし其の事はもうソーニャとよく話したわ。兄さんがきつとさう言ふに違ひないと、わたし達も思つてたの。だけどそれは駄目よ。何故つてさうぢやなくつて、もし兄さんがそんな事を仰しやると――自分の言葉に束縛されたやうな考へでるらつしやると、まるであの人がわざとさう言つたやうになつて了ふわ。さうすれば兄さんが仕方なしに、あの人と結婚するやうな工合になつて了ふわ。さうすればまるつきり妙な風になるぢやありませんか。』

ロストフはこれら總ての事が二人の少女によつて、よく考慮されてゐるのを見て取つた。ソーニャは昨夜も其の美を以て彼を驚かしたが、今朝ちらと見た時にはなほ美しいやうに思はれた。彼

女は滿腔の熱情を持つて彼を愛してゐる、（彼はこれに少しも疑を差し挾まなかつた）美しい十六の少女であつた。「今俺があの娘を愛して結婚するのが、いけないと云ふ理由はない。」とロストフは考へた。「併し今はまだ〳〵外に樂しみや事業がある！さうだ、實際二人とも立派な考を出して呉れた。まだ暫く自由の身で居なくちやならない。」

『いや、結構だ。』と彼は言つた。『又後で話さう。あゝ、本當に僕はお前が好きだよ！』と彼は附け足した。

『處でお前は何うだい、ボリースに心變りしなかつたかい？』兄はかう訊ねた。

『あら、あんな馬鹿な事を！』と笑ひながらナターシャは叫んだ。『あの人の事も誰の事も、わたし考へてやしないわ、知りたくもないわ。』

『おや〳〵！で、お前何うなの？』

『わたし？』とナターシャは訊き返した、と幸福げな微笑が其の顏を照した。『兄さんヂュボールを見て？』

『いや。』

『有名な踊手のヂュボールを見ないの？まあ、それぢや兄さんには分らなくつてよ。わたしはね、かうなのよ。』

ナターシャは兩手で輪を描きながら裳裾を抓んで、踊子のやうに二三歩飛び退つてくるりと向きを換へ、輕跳舞をして足と足とをうち合した。そして爪先を立て、二三歩進んだ。

『ほら立つてるでせう？ほうらね。』と彼女は言つたが、すぐ爪先立ちは持ち切れなくなつた。

『ね、わたしかうなのよ！誰の處へもお嫁入しないで踊子になるわ。だけど誰にも言はないで頂載。』

ロストフは、次の間に居たヂェニーソフが羨しくなる程、大きな聲で愉快さうに笑ひだした。ナターシャは怺え切れないで一緒に笑ひ出した。

『ねえ、いゝでせう？』と彼女は絶えず言ひ續けた。

『いゝね、でボリースの處へはお嫁に行きたくないの？』

ナターシャはぱつと赤くなつた。

『わたしは誰にもお嫁入りしたくないの。わたしあの人にもさう言つてやるわ、今度逢つた時。』

『おや〳〵！』とロストフは言つた。

『まあいゝわ、そんな事みんなつまらない事なのよ。』とナターシャは喋り續けた。『兄さん、あのヂェニーソフさんていゝ人？』と彼女は訊いた。

『いゝ人さ。』

『さう、ではさよなら。着がへをなさいな。あの人は恐い人、ヂェニーソフさん？』

『なぜ恐いんだい？』とニコライは訊いた。『どうして、ワシカは立派な男だよ。』

『兄さんはあの人をワシカつて呼ぶの？可怪しいわねえ。それで何うなの、あの人は本當にいい人？』

『本當にいゝ人だよ。』

『ぢや早く茶を飲みにいらつしやい。みんな一緒にね。』

かう言つてナターシャは爪先で立ち上り、踊子のするやうな風附きで部屋を出た。併し其の微笑は、幸福に充ちた十五位の女の子にしか出來ないやうな微笑であつた。客間でソーニャに出逢つた時、ロストフは顔を赤めた。彼はソーニャに何んな態度を取つていゝか分らなかつた。昨夜再會の第一瞬には、歡喜に紛れて接吻したが、今日はそれをする譯に行かないのを二人共感じた。ロストフは母や妹を始め、一同の者が疑はしげに彼を眺めながら、ソーニャに對して何んな態度を取るか見てやらうと、待ち設けてゐるのを直覺した。彼はソーニャの手を接吻して、『あなた——ソーニャさん。』と呼んだ。併し二人の眼が出逢つた時、其の眼は隔てのない口を利いて、優しく接吻し合つたのである。彼女は自分の眼附でもつて、大膽にもナターシャを使ひにして、ニコライの舊約を仄めかした事を詫び、又彼の愛に對して感謝の意を表した。彼はまた自分の眼附でもつて、自由

を提供して貰つた禮を言つた。たとへ何うならうとも、自分は決して彼女に對する愛を變へぬ。何故と言つて、何うしても彼女を愛さないでは居られないから――とかう云ふやうであつた。

『だけど本當に變だわねえ。』とエーラが一座の沈默の瞬間を利用してかう言つた。『今ソーニャとニコーレンカが他人行儀に「あなた」言葉で挨拶するんですもの。』

エーラの言葉は何時ものやうに尤もであつたが、殆どすべての彼女の言葉と同樣に、一同に極りの惡い思ひをさした。單にソーニャやニコライやナターシャばかりでなく、老伯爵夫人までが(夫人は我子から立派な配偶を奪ふ危險のある、ソーニャとニコライの戀を恐れて居た)同じく小娘のやうに赤くなつた。しかしロストフが驚いたのは、ヂェニーソフが新しい軍服を着け、頭を油で光らせ、香水の匂ひをぷん〳〵させながら、戰場でよく見掛けたと同じ洒落た樣子で客間へ入つて來て、婦人達に對して恐しく愛想のいゝ騎士(ナイト)に成り濟した事である。これはロストフの夢にも期待し得ないことであつた。

二

軍隊から莫斯科へ歸つて來たニコライ・ロストフは、家の人達からは大切な息子、英雄、愛す可きニコールシカとして、親戚の者からは可愛くて氣持のいゝ、慇懃な青年として、知人からは美しい輕騎兵中尉、巧妙な踊手、莫斯科に於ける立派な花婚候補者として歡迎された。

ロストフ家の交際は莫斯科全部が對手であつた。今年ロストフ家の領地が二番抵當に入れられたので、金は老伯爵の手元にうんとあつた。でニコールシカは自身專用の乘馬や、未だ莫斯科では誰も穿いて居ない、風變りな最新流行の乘馬袴や、思ひ切つて爪先の細い、小さな銀の拍車の附いた、最新流行の長靴を購めて、至極愉快に時を過した。

歸宅後、もとの生活狀態に馴れるまで幾らかの時日を經てから、ロストフは次第に快い感じを味ひ始めた。彼は自分が非常に成人して、すつかり大人に成り切つたやうな氣がした。神の掟(日本に於ける修身課の如きもの)の試驗に落第して悲觀した事、ガヴリーラから辻馬車賃を借りた事、ソーニャと祕密に接吻した事――かういふ事は今から計り知れぬ程遠い、少年時代の戲れか何ぞのやうに追想された。彼は今銀色燦爛たる軍服に、ゲオルギイ勳章を着けた輕騎兵中尉として、人から尊敬されて居る相當な年輩の、有名な銃獵家達と一緒に、自分の乘馬で馳(か)けの練習をしたり、又並木街(ナルワール)に住む知合の婦人の所へ毎晩出掛けて行つたり、又アルハーロフ家の舞踏會でマズールカの(舞踏の一種)指揮をしたり、カメンスキイ元帥と戰爭の話をしたり、英吉利倶樂部へ出入したり、それからヂェニーソフの紹介して呉れた四十格好の大佐と、『君僕』で話したりした。

皇帝に對する狂熱的な愛は、莫斯科へ歸つて幾分冷めて來た。併し此處では皇帝を見た事もな

ければ、見る機會もなかつたので、彼は屢々皇帝の事や、皇帝に對する自分の愛を語つたけれど、それでも自分はすべてを語つたのではない、まだ〳〵他人の理解出來ないやうなものが、自分の皇帝に對する感情の中に隱れて居る、と悟らせるやうに話を向けた。彼ば當時莫斯科全市が『肉體を有する天使』の名稱をもつて表白して居る、アレクサンドル・パーヴロヴィッチ陛下に對する尊崇の念に、心の底から同感して居た。

軍隊へ去る迄の莫斯科に於ける此の短い滯在中、ロストフはソーニャと接近するどころか、反つて遠々しくなつて了つた。彼女が非常に美しく可憐で、而も熱烈に彼を戀して居る事は明らかであつた。併し彼は丁度今ある一つの時期に遭遇してゐた。此の時期に於けるすべての若い人達は、そんな事に關つて居る暇のない程、澤山の仕事を抱へて居るやうな氣がして、無用な關係を結ぶ事を恐れ、いろ〳〵の事に必要な自己の自由を尊重しなくてはならぬ――とこんな事を考へるものである。莫斯科滯在中、ソーニャの事に思ひ及ぶ度に、彼はかう獨言ちた。

「えゝ！まだ〳〵あんな女は澤山あるさ。何處か外にも俺の知らない女が、まだ〳〵幾らでもゐるに相違ない。愛や戀は、したいと思へば何時だつて出來る。が、今はそんな暇はない。」其の上に女との交際は、男の品格を落すやうにも思はれた。彼は氣の進まぬやうな振をして、舞踏會や婦人達の會へ出掛けた。競走や、英吉利倶樂部や、ヂェニーソフと一緒の遊蕩や、例の處へ出か

ける事などは、又別問題であつた。それは若い輕騎兵として法に適つた事である。

三月初旬、老伯爵イリヤー・ロストフは、バグラチオン公爵歡迎の爲め、英吉利倶樂部で催される晩餐會の準備に忙殺されて居た。

部屋着を着た伯爵は廣間を歩き廻りつゝ、英吉利倶樂部の料理番頭を勸めて居る、有名なフェオクチストと倶樂部の庶務員に、バグラチオン公爵の歡迎會に使ふ石刀柏や、新らしい胡瓜や、苺や、犢や、魚などの指圖をして居た。伯爵は創立の日から倶樂部の會員で幹事長で、バグラチオン歡迎會の準備を倶樂部から一任された。それはかうした大掛りな歡迎會の準備を見事にし了せる人が、外に無いからでもあつたが、重な理由は準備に特別な金が入る時、平氣で身錢を費ふ人が滅多にないからであつた。料理番と庶務員は愉快さうな顏をして伯爵の命令を聞いた。何故と言つて、此の人の指揮の下で、何千留と掛るやうな晩餐會の準備する時ほど、懷の暖る事はないからである。

『ではいゝか、帆立貝をな、帆立貝を龜汁に入れるんだぞ、いゝか。』

『さうしますと、冷たいのを三つで御座いますね？……』と料理番が尋ねた。

伯爵は一寸考へ込んだ。

『それより少くする譯に行くまい、三つだ……そしてマヨネーズが一つ……』と彼は指を折り

乍ら言つた。

『それで蝶鮫は大きいのをお取り寄せになりますか！』と庶務員が訊いた。

『負けないと云ふならどうも仕方が無いさ、取り寄せるがい、。あつ、さうだつた、危く忘れる處だつた。それからもう一つ開食品を出さなくちやならない。あ、、大變だ！』と彼は兩手で頭を摑んだ。『一體誰が花を取つて來て呉れるんだらう？ミーチェンカ！おいミーチェンカ！一つお前下莫斯科へ大急ぎで行つて呉れないか。』聲に應じて入つて來る支配人に向つて、彼はかう言つた。『お前一つ下莫斯科へ大急ぎで行つて、植木屋のマクシームカに吩咐けて、一つ百姓共を奉公働きに呼び集めて呉れ、有りたけの溫室の花を毛氈に包んで、此處へ持つて來るやうに云ふんだぞ。それから金曜日迄に植木鉢を二百揃へて置くやうにな。』

それからまた樣々な命令を與へた後、彼は夫人の處へ休息に行かうとした。併しまた一つ大切な事を思ひ出して、わざ〳〵自分で引つ返した。そして料理番と庶務員を呼び返して、再び何か言ひ附け始めた。と、戸口に輕い男の足音と拍車の響きが聞えて、平穩な莫斯科生活で疲れを休めた爲めらしく、小さつぱりと垢拔けのした、美しい、血色の良い、薄い髭のぽつと黑い若伯爵が入つて來た。

『あ、お前か！まるで眼がまはりさうだ。』老伯爵は何やら恥ぢるやうな風で、我子に笑み懸け

乍らかう言つた。『せめてお前でも手傳つて呉れるといゝんだがなあ！さうだ、未だ唱歌手が要るんだつけ。音樂隊は家にあるが、何うだ、一つジプシイでも呼ばうか？お前達軍人仲間は皆あれを好くからな。』

『何です、お父さん、バグラチオン公爵がシェングラベン役の準備をした時だつて、今のお父さん程狼狽てやしなかつたでせうよ。』と息子は微笑し乍ら言つた。

老伯爵はわざと怒つたやうな振をして見せた。

『何だ、お前、そんな講釋を云はないで、自分でやつて見るがい、。』

と伯爵は料理番の方を向いた。此方は恭しい悧口さうな顏をして、じつと觀察するやうな、しかも愛想のい、眼附きで親子を見較べて居た。

『若い者つて仕樣のない奴だなあ、フェオクチスト！』と彼は言つた。『我々老人を愚弄して居るんだ。』

『仕方が御座いませんよ、御前、若い方はたゞ十分に召し上つたらそれで良いので、色んな物を集めたり飾つたりするのは、若い方の役目ぢや御座いませんからね。』

『さうだ、さうだ。』と伯爵は叫んで、愉快さうに息子の兩手を摑んだ。『あ、さうだ、お前は惡い處へ來合せたよ！お前直ぐ二頭立の橇に乘つて、ベスーホフ伯爵の處へ行つてな、イリヤー・ア

ンドレイッチ伯爵の使だが、お宅から苺と新らしい鳳梨(パイナップル)を分けて載き度い、と、こんな風に云つて呉れ。他では決して手に入らないからなあ。當の伯爵がご不在だつたら、從妹の令孃方の處へ行つて頼むがいゝ、その足で直ぐラズグリャイへ行つて――馭者のイバートカが知つてるさ――そしてイリューシュカ(ジプシイの名)を見附けて呉れ、そら、あのオルロフ伯爵家で白い哥薩克外套を着て踊つた男だ、覺えて居るだらう。彼奴を此處へ、俺の處へ引つ張つて來い。』

『ジプシイ女も一緒に此處へ連れて來ませうか!』とニコライは笑ひ乍ら訊いた。『ね、ね!……』

この時ドルベツカーヤ夫人が事務的な忙しない、同時にいつも彼女の顔を去らぬ基督信者らしい、謙抑な表情を浮べつゝ、殆ど聞えない位の足取りで、室(へや)の中へ入つて來た、ドルベツカーヤ夫人には毎日のやうに、自分の部屋着姿を見られてゐるにも拘らず、伯爵はその度にきまり惡さうな風をして、自分の服裝(みたり)を詫びるのであつた。

『いえ、伯爵、何う致しまして。』彼女はつゝましやかに眼を塞ぎ乍らかう言つた。『あのベズーホフ伯爵の處へはわたくしが參ります。』と彼女が言つた。『ピエールさんが此方へお出でになりましたから、もう今度はあの家(うち)の溫室から、何でも手に入れる事が出來ます。わたくしもあの方にお目に懸らなければなりません、あの方がボリースの手紙を屆けて下さいましたの。お蔭樣で、

ボーリャは今度參謀附に成りました。』

伯爵はドルベツカーヤ夫人が仕事の一部を分擔して呉れたのを非常に喜んで、彼女の爲めに小さい方の馬車に馬を附けるべく命じた。

『あなたベズーホフさんに是非ともお出でを願つて下さい。わたしはあの方の名前も書き入れて置くから。何うです、あの方と奥さんの間は?』と彼は訊いた。

ドルベツカーヤ夫人は眼を上へ向けた。と、彼女の顔には深い哀傷の色が浮んだ。

『あゝ、伯爵、ピエールさんは大變お不仕合せなんですよ。』と彼女は言づた。『わたくしの聞いた噂が本當だとすれば、實に恐しい事でございます。あの當時、ピエールさんの幸福を皆で喜び合つた頃は、そんな事など思ひも寄りませんでしたのにねえ!あのベズーホフの若伯爵は全く立派な、天使のやうな心を持つてゐらつしやるんですがねえ!えゝ、わたくしは心底(しんそこ)からあの方がお氣の毒で、出來るだけ慰めて上げ度いと存じますの。』

『いつたい何うしたんですか?』とロストフ親子が訊ねた。

ドルベツカーヤ夫人は深い溜息を洩した。

『ドーロホフ――マリヤ・イワーノヴナの息子さんね。』と彼女は内緒らしく聲を潜めた。『あの人がエレーナさんをすつかり丸め込んで了つたさうですよ。ピエールさんは其の男を誘つて、彼

得堡の家へお留めになつたのですが、丁度・・・エレーナさんが此方へお出でになつたので、あの暴れ者も後から追つ掛けて來たさうでございます。』ドルベツカーヤ夫人はかう言つて、ピエールに對する同情を現さうとしたが、つひ自然と出て來る言葉の調子や薄笑ひは、彼女が暴れ者と呼んだドーロホフに對する同情を示すのであつた。『何でもピエールさんは心配の餘り、死人のやうになつてゐらつしやると言ふ話ですの。』

『ははあ、併し何にしても倶樂部へ來るやうに言つて下さい――すつかり氣分が紛れて了ひますよ、素張らしい大酒宴ですからね。』

翌三月三日午後一時過ぎ、二百五十人の英吉利倶樂部の會員と五十人の來賓が、今日の貴賓で且つ墺太利戰爭の英雄たる、バグラチオン公爵の來着を待ち受けて居た。

アウステルリッツ役の報知を受け取つてから、最初暫くの間莫斯科は疑惑の雲に鎖されてゐた。當時露西亞は餘り勝利に馴れて居たので、此の敗北の報知を受け取つた時、ある者は頭から信じなかつたし、ある者はかうした奇怪な出來事の說明を、何か異常な原因に求めた。正確な知識と重みを備へて居る、莫斯科中の名士が悉く寄り集る英吉利倶樂部でも、報知の來始めた十二月の月には、まるで一同が沈默の約束でもしたやうに、戰爭の事も今度の敗北の事もまるで話をしなかつた。ラストープチン伯爵、ユーリイ・ドルゴルーキイ公爵、ワルーエフ、マルコフ伯爵、ギャ

ーゼムスキイ公爵など、輿論の方向を定める人々は倶樂部へ顏出しをしないで、ごく親密な人々と共に自宅へ寄り集つて居た。他人の口眞似をして話す莫斯科の人達は（イリヤー・ロストフも其の仲間であつた）、暫くの間指導者がないので、戰爭に關して一定の意見を持たないで居た。何か善くない事がある、併し此の不吉な報知を批判するのは至難の業だから、いつそ沈默を守つた方がいゝ、とかう莫斯科の人々は直覺したのである。併し暫く經つてから、丁度陪席判事が合議室から出て來るやうに、倶樂部內の意見を確定する名士が現はれて、一同は始めて明瞭に確固たる調子で話し始めた。露西亞軍の敗北と云ふ此の信じ難い、曾て聞いた事もない、有り得べからざる出來事の原因が發見されたのである。何もかも明瞭になつた。そして莫斯科の隅から隅まで同じ事を話し始めた。其の原因と云ふのは――墺太利軍の背反、粗惡な糧食、波蘭人ブルジェブィシェーフスキイ及び佛蘭西人ランジェロンの裏切り、クトゥゾフの無能、それから（これは大きな聲で言へない事だが）、惡いつまらぬ人間を信任した皇帝の未熟と無經驗などであつた。

併し一同の口を揃へて言ふ處に依れば、露西亞軍の働きは實に非凡なもので、奇蹟的な勇氣を示した。兵士、將校、將軍達は悉く英雄であつた。しかし英雄中での英雄はバグラチオン公爵であつた。彼はシェングラベン役、及びアウステルリッツの退却に依つて有名になつたのである。此の退却の際、彼は一絲亂さず自分の軍隊を引率して、終日二倍の强敵を擊退し續けた。莫斯科で

バグラチオンが國民的英雄に選まれたのは、彼が莫斯科に何等の關係もない、赤の他人だと云ふ事が一因をなして居た。彼は何の係累も陰謀もない、單純で磊落な、露西亞軍人の代表者――而も伊太利遠征の記憶によつて、スヴーロフの名と結び付けられた人として、敬意を表せられたのである。其の上彼に此のやうな尊敬を捧げると言ふ事は、クトゥゾフに對する一般の反感と侮蔑とを、最も直截に表明して居た。

『もしバグラチオン公爵が居なかつたら、il faudrait l'inventer（是非發明しなくてはならない處でしたよ）』と諧謔家のシンシンはヴルテールの言葉をもぢつてかう言つた。クトゥゾフの事は誰も何とも言はなかつた。只一部の者は彼を宮廷附の古狸だの、老耄（おいぼれ）の皮肉屋だのと罵つた。

『何遍も仕損じなくちやものにならぬ。』過去の勝利の記憶を以つて、僅に今度の敗北を慰めるドルゴルーコフ公爵の言葉が、莫斯科全市到る處に繰り返された。と同時に『佛蘭西兵を戰場に向つて蹶起せしめるには、悲憤慷慨的語句を以てすべく、獨兵に對しては、退却は前進よりも危險だと云ふ事を、論理的に證明するを可とするが、露西亞兵にはたゞ出來るだけ力を抑制さして、もつとゆつくり！もつとゆつくり！と賴まなくてはならない』と云ふラストープチンの言も繰り返された。アウステルリッツ役で我軍の兵士將校が發揮した勇氣の、箇々の實例に關する新しい物語が、後から後からと到る處で傳へられた。或る者は軍旗を奪還し、或る者は五人の佛蘭西

兵を叩き斬り、或る者は一人で五門の大砲を裝塡した。又知らない人はベルグに就ても語り合つた。卽ちベルグが右手に負傷しながら、左手に軍刀を持つて前進を續けたといふのである。ボルコンスキィの事は何とも話が無かつた。只近しい知人のみは、彼が身重な妻を變人の父親の許に殘して、若死したのを氣の毒がつた。

三

三月三日、英吉利倶樂部の部屋々々は、語り合ふ人々のどよめきで充されて居た。そして倶樂部員や來賓は春野を飛びめぐる蜜蜂の如く、あなたこなたと行き違つたり、腰掛けたり、立つたり、集つたり、別れたりして居た。大抵の人は軍服やフロックを着て居たが、中には髪粉（プードル）を付け露西亞式外套（カフタン）を着込んで居る人もあつた。髪粉（プードル）を付けて、長靴下に短靴を履いた、お四季施の從僕等は戸口々々に立つて、何か御用を勤める事は無いかと、來賓や倶樂部員の一擧一動をも見落さないやうに、一生懸命氣を配つて居る。

出席者の多數は世間から尊敬を受けて居る老人連で、其の自信ありげな顏は巾廣で、指は太く、擧動も音聲もしつかりして居た。此の種の人達はいつも決りの席に着いて、いつも決りの組（サークル）を作つて居た。殘りの少數は一時的な偶然の客――主として若い人達であつた。其の中にヂェニーソ

フもロストフも、またセミョーノフ聯隊附の將校となつたドーロホフも交つて居た。青年組、と言つても特に若い軍人連の顔には、老人組に對する侮蔑的な尊敬の表情が浮んで居た。それはまるで舊時代の人に向つて、わたし達は悅んであなた方を尊敬しますが、併し何と言つても未來はわたし達のものですよ、それを覺えて居て下さい、とでも云ふやうであつた。

ネスギーツキイは古い倶樂部員として此の場へ來合せて居た。ピエールは妻の好みによつて髮を垂らし眼鏡を脫して、流行の服裝をして居たが、もの憂げな沈んだ顏附をして、廣間を歩き廻つて居た。彼はいつもの如く、富に跪拜する人々の雰圍氣に取り卷かれたが、もう癖になつて居る上から見下すやうな態度で、面倒臭さうな輕蔑の色を浮べながら、これ等の人々をあしらつて居た。

年から言へば、彼は若い人達の中に混らなければならないのだが、富と門閥に依つて、年取つた名士達の仲間に入つて居た。それ故彼は絕えず次から次へと、樣々な組を渡り歩くのであつた。老人連の中でも一番高名な人々は、かうした組の中心となつてゐた。で、知らぬ人までが名士の意見を聞く爲めに、恭しく傍へ寄つて來るのであつた。中でも一番大きい組はラストープチン伯爵、ヴルーエフ及びナルイシュキンの周圍に形作られた。ラストープチンは、露西亞軍が墺太利の遁走兵に列を亂されたので、止むなく銃劍を以つて、遁走兵の間に進路を切り開かねばならなく

なつた、と云ふ話をしてゐた。

ヴルーエフは、ウヴーロフが彼得堡から派遣されたのは、アウステルリッツ役に關する莫斯科市民の意見を探る爲めだと、祕密めかしく語つた。

第三の組ではナルイシュキンが、墺太利軍事會議の出來事を話した。それはスヴーロフが此の會議で墺太利將軍達の愚問に對して、雄雞の啼き眞似をしたと云ふのであつた。其處に立つて居たシンシンは一寸洒落て見たくなつたので、クトゥゾフは此の簡單な技術——卽ち雄雞のやうに叫ぶ事すら、スヴーロフから學び得なかつたと言つた。併し老人達は、今日此處でクトゥゾフの事を口にするのは、甚だ非禮であると悟らせるやうに、嚴つい顏をして此の諧謔家を眺めた。

イリヤー・ロストフ伯爵は柔い靴を履いて食堂から客間へと、氣遣はしげな忙しさうな樣子をして歩き廻つた。そしてすべて自分の知つて居る人々——名士にも非名士にも、全然同じ調子で早口に挨拶して、時々眼でもつて息子の凜々しい姿を探した。其の姿が見附かると、悅しさうに視線をその上に落して、頻りに眼交ぜをして見せた。ニコライはドーロホフと窓の傍に立つて居た。彼等はつひ近頃知合ひになつたばかりだが、ニコライは此の知己を疎かならず思つてゐた。老伯爵は二人の方へ近寄つてドーロホフの手を握つた。

『わたしの所へもお出でを願ひます。さうですか、君は家の悴と知合なんですか……戰地では

一緒に居たんですね。一緒に勳功を建てられたんですな……あ、！ヴシーリイ・イグナーチッチ：：御機嫌よう、お爺さん。』と彼は通り合せた小柄な老人に聲を掛けたが、皆まで言ひ了らぬうちに、突然邊りがざわ〳〵と動き始めた。一人の從僕が駈けて來て、慴えたやうな顏をしながら、『お見えになりました！』と知らした。

幾つかのベルがけたゝましく響き渡つた。幹事連は前へ駈け出した。方々の部屋に散らばつて居た來賓は、箕の上で篩はれた裸麥のやうに一塊りに群集して、廣間へ通ずる大きな客間の戸口に立ち止つた。

控室の戸口に帽子も劍もないバグラチオンが現れた。二つとも倶樂部の習慣に從つて玄關番に預けたのである。彼はアウステルリッツ役の前夜ロストフが見受けたやうに、灰色の羊皮の帽子を被つて長い鞭を肩にしては居なかつた。身幅の狹い新しい軍服の上に內外の勳章を掛け連ね、其の上ゲォールギィ星章を左の胸に着けて居た。見受けた處、彼はたつた今晩餐會の用意に、頭や頰髭を刈り込んで來たらしいが、それが彼の容貌に不利な變化を與へたのである。彼の顏には何だか子供らしく呑氣さうな處が出來て、それが持前のしつかりした男らしい輪廓と對照して、幾分喜劇的な表情すら與へるのであつた。彼と共に當地へ着いたベクレショーフとウヴーロフは、正客たるバグラチオンを自分達より先へ通さうとして、戸口の處で立ち止つた。バグラチオンは彼

等の好意を平然と利用したくないらしく、暫くためらつたので、戸口の處で一寸ごた〳〵したが、到頭矢張りバグラチオンが先に立つて進んだ。彼は手の遣り場に困りながら、遠慮らしく武骨な足取で、客間の寄木細工の床を歩いて行つた。かつてシェングラベン村で、クールスク聯隊の先頭に立つて進んだ時のやうに、彈丸の下や耕地の上を歩く方が、彼に取つてはずつと樂なのであつた。

幹事等は第一の戸口で彼を迎へて、かうした貴賓に接し得る喜を二言三言述べた後、對手の答も待たないで、まるで自分達のものにして了つたかのやうに、彼を取り卷いて客間の方へ導いた。客間の戸口はとても通れさうにもなかつた。それは倶樂部員や來賓が群集して、互に押し合ひへしあひしながら、珍しい獸か何ぞのやうにバグラチオン公爵を、人々の肩越に眺めようとして居るからであつた。イリヤー・ロストフ伯爵は誰よりも一番元氣よく笑ひながら、『通して呉れ給へ、モン・シェル、通して呉れ給へ、通して呉れ給へ。』と言ひつゝ、群集を押し分けて、貴賓を客間へ通すと、眞中の長椅子に坐らせた。倶樂部の名譽會員とも云ふ可き大頭株は、新たに着いた人々を取り卷いた。イリヤー・ロストフ伯爵は再び群集を押し分けて客間を出たが、やがてすぐ今一人の幹事と共に歸つて來た。そして大きな銀の皿を持つて、バグラチオン公爵に近寄つた。皿の上にはわざ〳〵作らせて印刷した、此の英雄に對する讃美の詩が載つて居た。バグラチオンは皿を見

ると、助けを求めるやうに吃驚した顔附で邊りを見廻した。併しすべての人の眼の中に、降參おしなさいと云ふ要求が見えて居た。今自分は此の人達の掌中にあるのだと悟つて、バグラチオンは斷然兩手で皿を摑み、それを運んで來た伯爵を詰責するやうな、腹立たしげな眼附でじつと見据ゑた。誰やらが親切にバグラチオンの手から皿を引き取つた（でなければ、彼は皿を晩までも支へて居て、其の儘食卓へ着く積りではないかとさへ思はれた）。そして彼の注意を詩の方へ向けさした。「では、讀んで見よう。」と云ふかの如く、バグラチオンは疲れた視線を紙に注いで、眞面目な一生懸命らしい樣子をして讀み始めた。すると、作者が自分で詩を取つて朗讀した。バグラチオン公爵は首を傾げて聞いてゐた。

『かくて歴山の御代を永久に榮あらしめ
我がタイタスの玉座を護れ
猛將善士の德を一身に兼ね備へ
祖國にありてはリフェイたり
戰場にてはシイザーたれ
あゝ幸運なるかなナポレオン
將軍バグラチオンの力量を

我が經驗に依り知りたるか
最早露國のアルキードを
敢て煩はさんともせずなりぬ……』

併し未だ彼が此の詩を讀み終らぬ中に、侍僕長が雷霆の如き聲で、『食卓の準備が整ひましてございます！』と披露した。やがて扉が開かれた、食堂からはポロネーズの舞踏曲が響いて來た。『勝利の雷轟けよ、猛き露西亞よ戲れ遊べ。』イリヤー伯爵は、何時迄も詩の朗讀を續けてゐる作者の方を、腹立たしげに一瞥して、バグラチオンに一揖した。一同は詩よりも食事の方が大切だと感じたので、直ぐ席を立つた。再びバグラチオンが先頭に立つて食堂に向つた。陛下の御名に關係ある兩アレキサンドル（卽ちベクレショフとナルイシュキン）に挾まれた一番の上席に、バグラチオンは招じ入れられた。三百人の客は官等と地位に依つてそれ〴〵席を定めた。身分の重い人ほど主賓に近かつた。それは丁度水が低い土地に深く溢れるのと同樣、極めて自然に行はれた。

食事の一寸前に、イリヤー伯爵は息子を公爵に引き合した。バグラチオンはニコライの顏を想ひ出して、二こと三こと言葉を掛けたが、それは此の日彼が發したすべての言葉とひとしく、何となく辻褄が合はないで間が拔けて居た。バグラチオンが自分の息子と言葉を交へてゐる時、イリヤー伯爵はさも嬉しさうな誇らしげな樣で一同を見廻した。

ニコライはヂェニーソフの他、新たに知合になつたドーロホフと共に、殆ど卓の中央に座を占めた。彼等の向う側には、ピエールとネスギーツキイとが竝んで坐つてゐた。イリヤー伯爵は其の他の幹事連と一緒に、バグラチオンの眞向ひに席を取つて、莫斯科市の歡迎の熱意を一人で代表したやうに、公爵を歓待してゐた。

彼の努力は徒勞に終らなかつた。彼の準備した食卓は、精進料理も魚肉料理も大成功であつた。が、彼は矢張り終ひまで落ち付いて居る事が出來なかつた。食堂番に目くばせしたり、給仕等に耳打したりして、ちやんと知り拔いてゐる一つ〳〵の料理を、幾分胸をどきつかせ乍ら待ち設けるのであつた。何もかも見事な出來であつた。大きな鰒のついた二番目の皿と共に（この鰒を見るとイリヤー伯爵は、喜悅と謙遜の爲めに顏を赤くした）、給仕等はもう木栓をぽん〳〵鳴らして、三鞭酒を注ぎにかゝつた。若干の感動を人々に與へた此の魚の後で、イリヤー伯爵は他の幹事達と顏を見合した。『祝杯がどつさりあるのですから、もう始めていゝ頃合でせう！』と彼は囁いて、杯を手にし乍ら立ち上つた。一同は鳴を潜めて、彼が何を言ひ出すかと待ち構へてゐた。

『天皇陛下萬歳！』と叫んだ。其の瞬間彼の人の好さゝうな目は、興奮と歡喜の涙に沾つた。と同時に樂隊は、『勝利の雷轟けよ』を奏し始めた。一同は各々席を立つて『ウラー』と叫んだ。バグラチオンも曾てシェングラベンの野で叫んだと同じ聲で、『ウラー』と叫んだ。若いロストフの有

頂天になつた聲は三百人の聲を壓して響いた。彼は殆ど泣かぬばかりであつた。『天皇陛下萬歳——ウラー！』と叫んで、杯を一息に呑み乾すと、いきなり彼は床へ叩きつけた。多くの者も其の例に倣つた。かうして高い叫び聲が長く續いた。やがて、漸く聲が靜まりかけた時、給仕等は碎けた杯を拾ひ始めた。人々は腰を下しながら、自分で自分の叫び聲に笑ひ興じつゝ、互に言葉を交し始めるのであつた。イリヤー伯爵は再び立ち上り、自分の皿の傍にある紙片をちらと覗いて、最近の戰役に於ける勇者バグラチオン公爵の健康の爲めにと呼ばつた。すると再び伯爵の空色の目が涙で霑つて來た。『ウラー！』三百の來賓の聲は再びかう叫んだ。そして今度は樂隊の代りに唱歌手の一隊が、バーゼル・イヴーノヴィッチ・クトゥゾフの作歌をうたふ聲が響いて來た。

『たとへ如何なる障害も
露西亞の軍に效なし
勇こそ勝利の基なれ
われにはバグラチオンあり
いくその敵は悉く
わが足もとにひれふさむ云々。』

唱歌が終るや否や、それに續いて後から後からと新しい乾杯があつた。そして其の度毎にイリ

ヤー伯爵は益々涙つぽくなつた。そして益々多くの杯が碎かれ、益々聲高に人々は叫んだ。ベクレショフ、ナルイシュキン、ウヴーロフ、ドルゴルーコフ、アブラークシン、ヴルーエフなどの健康の爲めに、幹事連の健康の爲めに、會長の健康の爲めに、倶樂部員一同の健康の爲めに、來賓一同の健康の爲めに、そして最後に此の宴會の世話人たる、イリヤー伯爵の健康の爲めに、人々は特に杯を乾した。此の乾杯の時、伯爵は手巾を引き出して顏を蔽ひ乍ら、もう手放しで泣き出して了つた。

四

ピエールはドーロホフとニコライ・ロストフの向う側に坐つてゐた。彼はいつもの如く多く食ひ多く飲んだ。併し親しく彼を知つてゐる人達は、此の日何か大きな變動が彼の心内に生じたのを見て取つた。彼は食事の間ぢう默り込んで、目を細め額を皺め乍ら、自分の周圍を眺め廻したり、じつと目を一所に据ゑて、まるつきり茫として了つたやうな風付で、指で鼻をほじつたりしてゐた。彼の顏は物憂げに曇つてゐた。彼は見受けた所、邊りに生じてゐる事をまるで見も聞きもしないで、何かしら解決のつかぬ重苦しい、只一つのことばかり考へ詰めてゐるらしかつた。

彼を苦めてゐる此の未解決の問題は外でもない――莫斯科で從妹の公爵令孃から聞かされた、

ドーロホフが彼の妻に接近してゐるといふ當てこすりと、今朝受け取つた無名の手紙であつた。其の手紙には、すべての無名の手紙に附き物の卑劣な巫山戲た調子で、お前は眼鏡をかけてゐる癖に、自分の周圍がろくに見えないでゐる、お前の妻君とドーロホフの關係は、只お前一人のみの祕密に過ぎない、などと書いてあつた。ピエールは令孃の當てこすりにも手紙にも、決して信を措かなかつた。けれど今かうして自分の前に坐つてゐる、ドーロホフの顏を見るのが恐しかつた。ふと視線がドーロホフの美しい傲慢な目と出合ふ度に、何か恐しい醜い物が心中に湧き上るやうな感じがして、彼は急いで顏を反けた。我れともなしに自分の妻の過去の振舞や、妻とドーロホフとの關係を詳しく思ひ浮べたとき、無名の手紙に書いてあつた事は本當かも知れない、若しこれが自分の妻でなかつたなら、少くとも本當らしく見えるかも知れない、といふ事をピエールは明らかに感じた。戰爭後すべての物――名譽も位官も回復したドーロホフが、彼得堡へ歸つて來た時の事を、ピエールは何時しか回想してゐるのであつた。亂行時代の友誼を利用して、ドーロホフは直接ピエールの家へやつて來た。ピエールは彼を逗留さして金を貸したりなどした。ピエールは又こんな事も想ひ出した――エレンは微笑を浮べ乍ら、ドーロホフが自分達の家に寢起するのが厭だと言つた事もあるし、又ドーロホフが皮肉な調子でピエールに向つて、君の細君は美しいと讃めた事もある。かうして彼は莫斯科へ來る迄、一寸の間も夫婦の傍を離れた事がな

かつた。

「さうだ、あの男は全く美しい。」とピエールは考へた。「俺はあの男の氣性をよく承知してる。あの男に取つては俺の名を傷つけ、俺を馬鹿にするのが格別愉快なのだ。つまり俺があの男の爲めにいろ〳〵奔走して、あの男を助けてやつたからだ。あゝ、俺にはちやんと分つてる、かう云ふ事實はあの男の背信行爲に、どれだけ痛快な味をつけるか分らない、もしあの手紙が本當だとすれば……あゝ、若しこれが本當だつたら……併し俺は信じない、信じる權利もなければ、信じる事も出來ない。」彼はドーロホフが慘忍な心持に襲はれた時の表情を想ひ起した。彼が巡査を熊に縛りつけて水に放した時、何の原因もなく人に決鬪を申し込んだ時、或ひは馬車馬を拳銃(ピストル)で射ち殺したとき――さういふ時見せるのと同じ表情が、ピエールを眺めるドーロホフの顏に屢々浮ぶのであつた。「さうだ、あの男は暴れ者だ、」とピエールは考へた。「あの男に取つて人を殺す位、朝飯前の仕事だ。あの男はみんなが自分を恐れてるやうな氣がして、それが愉快なのに相違ない。そして俺もあの男を恐れてゐると思つてる。いや、本當に俺はあの男を恐れてゐるのだ。」かう考へた時、又もや例の恐しい醜い或る物が、彼の心中に湧き上るのであつた。

ドーロホフ、ヂェニーソフ、ロストフは今ピエールの向うに陣取つて、恐しく愉快さうな風であつた。ロストフは愉快げに二人の友達――二人の中一人は勇敢な輕騎兵で、今一人は有名な暴れ

者である――と話し合つてゐた。そして今日の宴會でたつた一人思ひ惱んだやうな、ぼんやりした巨大な姿を目立たしてゐるピエールを、時々嘲るやうに見遣るのであつた。ロストフはピエールを不愉快な目で眺めてゐた。といふ譯は、第一にピエールが文官の金持で、美人を妻としてゐて、つまり一口に言へば長袖者流だからである、第二にピエールが欝してぼんやりした氣分の爲めに、ロストフに氣が付かないで、其の會釋に答へなかつたからである。皇帝陛下の萬歲を祝して乾杯を始めた時、ぼんやり考へ込んでゐたピエールは、立つて杯を取らなかつた。

『あなた何うしたんですか？』ロストフは興奮した毒々しい目付で、彼を見詰め乍らかう叫んだ。『一體あなたには聞えないんですか、皇帝陛下萬歲ですよ！』

ピエールは嘆息して從順しく立ち上り、杯を飲み乾した。そして一同が着座するのを待つて、持前の人の好い微笑を浮べつゝロストフに向つて、

『どうもついあなたをお見外(みそ)れしまして。』と言つた。併しロストフはそれ所ではなかつた。彼は一生懸命に『ウラー』を叫んでゐるのであつた。

『何うして君は舊交を溫めようとしないんだね？』とドーロホフはロストフに言つた。

『あんな奴勝手にするがいゝ、馬鹿野郎！』とロストフは言つた。

『だつて、美しい細君を持つた男は可愛がつてやる必要があるよ。』とヂェニーソフは言つた。

ピエールは彼等の言ふ事が聞えなかつた。が、自分の噂をしてゐる事だけは分つたので、赤い顔をして他方を向いた。

『さあ、今度は美しい女の健康を祝すんだ。』とドーロホフは言つて、眞面目な表情ではあるけれど、口の兩隅に微笑を浮べつゝ、杯を持つてピエールの方へ向いた。

『美しい女の健康を祝すんだぜ、ペトルーシャ、そして其の情夫の健康もね。』

ピエールは伏目になつて、ドーロホフを見ないで返事もなしに、ぐつと自分の杯を飲み乾した。クトゥゾフの作歌を配つてゐた給仕人は、上位の客として先づピエールの前へ紙片を置いた。彼がそれを取らうとすると、ドーロホフは屈み込んで彼の手から紙片を奪ひ、そ知らぬ顔で讀み始めた。ピエールは一寸ドーロホフを見遣つた。と、彼の瞳はまた下つた。食事の間ぢう彼を苦しめてゐた、恐しい醜い或る物が急に湧き上つて、彼の全幅を領して了つた。彼は肥えた全身を卓越しに屈めて、

『失禮な事をなさるな！』と叫んだ。

此の叫び聲を聞き付けて、それが誰に向つて發しられたかを知ると、ネスギーツキイと其の右隣に坐つてゐた客とは、びつくりして忙しけにベズーホフの方へ向いた。

『お止しなさい、澤山ですよ、何うしたんです？』びつくりしたやうな人々の聲がかうさゝやいた。

ドーロホフは明るく樂しげな、而も慘忍な目付をしてピエールを見据ゑた。その顔には例の、「さあかうなると面白いぞ。」といつたやうな微笑が浮んでゐた。

『返しませんよ。』彼はきつぱりかう言つた。

蒼白い顔をして下脣を慓はせつゝ、ピエールは紙片をひつたくつた。

『君は……君は……やくざ者だ！……僕は君に決闘を申し込む。』と言つて、彼は椅子を後ろへ退け乍ら卓を立つた。

ピエールがこれだけの事を言つたりしたりした瞬間に、此の一晝夜彼を苦め通した妻の貞操に關する疑問が、遂に疑ふ餘地もなく肯定せられたのを感じた。彼は妻を憎んだ。そして永久に彼女から離れて了つたのである。こんな事件に關り合ふなと云ふヂェニーソフの懇願にも拘らず、ロストフはドーロホフの介添人たる事を承諾し、食事の後ベズーホフの介添人たるネスギーツキイと、決闘の條件に就いて打合せをした。ピエールは直ぐ歸宅したが、ロストフはドーロホフやヂェニーソフと共に、ジプシイや唱歌手共の歌を聞き乍ら、夜遲く迄倶樂部に居殘つた。

『それぢや又明日ソコーリニキイでね。』ドーロホフは倶樂部の玄關で、ロストフに別れを告げ乍らかう言つた。

『一體君は平氣なのかい？』とロストフは訊いた。

ドーロホフは足を停めて、

『いゝかね、僕君に決闘の祕訣を手短かに傳授しよう。決闘に出掛けようといふ時に遺言狀を作つたり、兩親に宛てて甘つたるい手紙を書いたりして、ひよつとしたら殺されるかも知れない、てな事を考へたら最後、そいつは馬鹿なんだ、そんな奴は屹度やられるに相違ない。所がだね、若し、俺は何うしても對手の奴を殺さなければならぬ、出來るだけ迅速且つ正確に殺さなければならぬ、といふ固い決心を以て出掛けたら、そしたらもう大丈夫だ、これはコストローム縣の熊打ちが、僕に話して聞かした事なんだよ。其の男の言ふには、何と言つたつて熊だもの、恐くない筈はない。所が熊の姿を見附けるや否や、恐しいも何も消えて了つて、只何うかして逃さないやうにと、そればかり念じるとさ。ね、今の僕も其の通りなんだ。A demain, mon cher（ぢや又明日ね、失敬！）』

次の日の午前八時、ピエールはネスギーツキィと連れ立つて、ソコーリニキィの森へ到着した。其處にもうドーロホフ、ヂェニーソフ、ロストフが來て待つてゐた。ピエールは目前に控へてゐる事件には全然關係のない、何か別な想念に心を占められた人のやうな風付であつた。頰のこけた顏は黃色かつた。彼は昨夜一睡もしなかつたらしい。落ち着かぬけに邊りを見廻して、烈しい日光でも避けるやうに目を細めるのであつた。絕對に彼の心を占めてゐる想念は一つより無かつた。

それは妻一人が惡いので（此の事は昨夜一晩寢ないで考へた擧句、もう疑ふ餘地がなくなつた、）ドーロホフに何の罪もないといふ事であつた。實際ドーロホフは、自分に取つて緣もゆかりも無い他人の名譽を保護する義務なんか、少しも無いからである。「若し俺があの男の位置に立つたら、あれと同じ事をしたかも知れない。」とピエールは考へた。「いや、確かにあれと同じ事をしたに相違ない。一體此の決闘は何の爲めだらう、此の殺戮は何の爲めだらう？俺があの男を殺すか、でなければ、あの男の丸が俺の頭か、肘か、膝かに命中するのだ。此處を去らうか、逃げ出さうか、何處かへ隱れようか？」かういふ考がふと彼の腦裏に浮んだ。併しかういふ考が浮んだ瞬間、彼は却つて見る人に尊敬の念を起さすやうな、落ち着いたぼんやりとした樣子で、『もう直ぐですか、準備は出來ましたか？』と訊ねた。

すつかり準備が整つて、兩方から近寄るべき限界を示す佩刀（サーベル）が雪の中に突き刺され、拳銃（ピストル）が裝塡された時、ネスギーツキィはピエールに近附いた。

『わたしは此の重大な時、非常に重大な時に當つて、』と彼は臆病な聲で言ひ出した。『正直な所を打ち明けてお話しないのは、自分の義務を果さない事にもなるし、あなたがわたしを介添人に選んで下すつた、其の名譽ある御信賴を無にするものだと思ひます、伯爵。わたしの考へでは、此の決闘は理由が不十分です、從つて血を流すだけの價値がありません……あなたは正當でなか

つたです、全然正當といふ譯に行きません、あなたは餘り激昂されたのです…』

『えゝさうです、さうです、恐しく馬鹿げてゐます…』とピエールは言つた。

『では、何うかあなたの悔悟の意を、先方へ傳へさして下さい、屹度先方もあなたの謝辭を聞き入れるに相違ありません。』とネスギーツキィは言つた。(それはこんな場合誰でも試みるお決りの型であつたし、又事件が本當の決鬪にまで進行したとは、未だ信じることが出來なかつたからである)。『ねえ伯爵、自分の過失を認めるのは、取り返しの附かない事をして了ふよりか、遙かに立派ぢやありませんか。侮辱などは双方共少しも無かつたのですからね。何うぞわたしに行つて談じさせて下さい…』

『いゝえ、何も談じる事なんぞありやしません!』とピエールは言つた。『何方にしたつて同じ事です…ぢや、もう支度はいゝんですね?』と彼は言ひ足した。『唯何處へ行つて何方を射つのか、一つ教へて下さいませんか。』彼は不自然に愼ましやかな微笑を浮べ乍らかう訊いた。

彼は拳銃を手に取つて、引金の下し方などを色々訊き始めた。彼はこれまで拳銃を手に持つた事が無かつたが、それを白狀し度くなかつたのである。

『あゝ成程、さうですさうです、唯一寸忘れたものですから。』と彼は言つた。

『謝ることなんぞ少しもない、斷じて無い。』此方でも矢張り和解策を講じるヂェニーソフにかう

言ひ捨てゝ、ドーロホフは指定の場所へ近寄つた。

決鬪の場所は橇の置いてある道路から、八十歩ばかり隔つた松林の中なる、小さな草原の上に擇まれた。其處は此の二三日續いた暖氣の爲めに、溶けて柔かくなつた雪が積つて居た。二人の鬪手は互に四十歩の距離を置いて、草原の兩端に立つた。介添人は歩數を計り乍ら歩いたが、元彼等の立つて居た場所から、境界を示す爲めに十歩を隔てゝ雪の中に突き刺されてゐる、ネスギーツキィとヂェニーソフの劍の所まで、べと〳〵した深い雪の上に劃然と足跡が印せられた。雪解けと霧とは依然として續いて、四十歩の外は一物も見分けられなかつた。三分の間にすべての準備は整つた。が、それでも人々は開始をためらつて沈默してゐた。

五

『さあ、始めようぢやないか!』とドーロホフが言つた。

『宜からう。』矢張りほゝ笑み續け乍ら、ピエールはかう答へた。

なんとなく物凄くなつた。見受くる所、あゝ輕々しく始められた此の事件は、最早何物を以てしても制止する事が出來ないらしかつた。もう事件は人間の意志から獨立して、自然にぐん〳〵開展して、行く所まで行かなくては止みさうになかつた。ヂェニーソフは第一番に境界線へ進み出

て宣言した。

『今は双方共和解を拒みましたから、もう始めたら何うでせう。拳銃を取つて、「三」の合圖と同時に踏み出して接近するんですぞ。』

『一！二！三！……』と腹立たしげに怒鳴つて、ヂェニーソフは傍の方へ退いた。

二人の鬪手は霧を透して互の姿を見分け乍ら、足跡のついた徑に沿うて次第に近く寄つて來た。彼等は境界の傍へ近寄りながら、勝手に何時でも火蓋を切る權利を有つてゐた。ドーロホフは例の明るく輝く碧い目で自分の敵手を見据ゑ乍ら、拳銃を上げないで靜かに進んだ。彼の口はいつもの如く、微笑に似た表情を浮べてゐる。

『三』の合圖と共にピエールは早足に前へ進んだ、足跡のついた道を踏み外して、新しい雪の上を歩き乍ら。彼は自分の拳銃で自分を殺しはせぬかと恐れるやうに、右手を前へ突き出して拳銃を支へ、左手を一生懸命に後ろへ引くやうにしてゐたが、それは此の手で右手を支へたいけれど、さういふ譯に行かぬ事を知つてゐたからである。六歩ばかり進んだ時、道から外れて新しい雪の上へ出ると、ピエールは足許を見て、再びドーロホフを見遣り、教へられたやうに指を伸して切つて放した。こんな大きな音がしようとは思ひ設けなかつたので、ピエールは自分の銃聲に慄へ上つたが、やがて、自分の受けた印象に微笑し乍ら立ち止つた。霧の爲めに一際濃い煙は、最

初の一瞬間結果を見ることを妨げた。けれども、彼の期待してゐた第二の發射はこれに續かなかつた。唯ドーロホフの忙しげな足音が聞えて、やがて煙の陰から其の姿が現はれた。彼は片手で左の脇腹を抑へ、片手でだらりと下つた拳銃を握りしめようとしてゐた。其の顔は蒼白かつた。ロストフは駈け寄つて何やら彼に言つた。

『い……い……や、』ドーロホフは齒を食ひしばつてかう言つた。『いや、未だ勝負は附かない。』と彼は尙も抉るやうな、今にも倒れさうな足附で、佩刀の所まで辿りついた、が遂にそこの雪の中に倒れて了つた。左手がすつかり血みどろになつてゐた。彼はフロックで血を拭いて其の手で體を支へた。深く皺を寄せた彼の顔は蒼褪めて、ぴく〳〵と慄へて居た。

『おいで……』とドーロホフは言ひ掛けたが、直ぐには言葉が出なかつた。『おいでなさい。』やつとの事で言ひ終つた。

ピエールは辛うじて慟哭を抑へ乍ら、ドーロホフの傍へ駈け寄つた。そして危く二つの界線を分つ空間を越えようとした時、ドーロホフが『界線の側へ！』と叫んだ。でピエールは其の意味を悟つて、自分の佩刀の傍に立ち止つた。彼等兩人を分つものは僅か十歩の距離に過ぎなかつた。ドーロホフは頭を雪に着けて、貪るやうに雪を食つた。やがて再び頭を擡げると居住ひを正し、しつかりした重心を求め乍ら兩足を引つ込めて坐つた。彼は冷たい雪を咬み且つ吸つて居た。其の

脣は慄へてゐたけれど、目は矢張り微笑を帶びた儘、最後の力を奮ひ集めた毒々しい緊張に輝いてゐた。

『横を向いて、拳銃で體を防ぐやうになさい。』とネスギーツキイが言つた。

『體を隱すやうになさい。』敵方のヂェニーソフ迄が我慢し切れないでかう叫んだ。

ピエールはつゝましやかな悔悟と憐憫の微笑を浮べ乍ら、力無けに手足を擴げて、其の廣い胸を眞正面にドーロホフへ向けた儘立ちはだかつて、沈んだ顏附で對手を眺めてゐたのである。ヂェニーソフ、ロストフ、ネスギーツキイは苦々しけに眉を顰めた。と、其の瞬間彼等は發射の音と、ドーロホフの毒々しい叫び聲を聞いた。

『外れた！』ドーロホフはかう叫んで、力無けに顏を雪に埋め乍ら倒れた。

ピエールは兩手で頭を摑んで、くるりと後ろを振り向くと、その儘森の方へ歩き出した。そして道もない雪の中を滅茶々々に歩き廻りつゝ、大きな聲で譯の分らない言葉を口走るのであつた。

『馬鹿々々しい…馬鹿々々しい！死……虛僞……』彼は顏をしかめ乍らかう繰り返した。

ネスギーツキイが彼を引き止めて、家へ連れて歸つた。

ロストフとヂェニーソフは、傷ついたドーロホフを伴ひ去つた。

ドーロホフは目を閉ぢて、無言で橋に横たはつた儘、友の質問に對して一言も答へなかつた。

併し莫斯科の町へ入つた時、彼はふと我れに返つた。そして辛うじて頭を擡げると、自分の傍に坐つてゐるロストフの手を取つた。ドーロホフの急に打つて變つた顏と、優しい興奮の表情は、ロストフを驚かした。

『え、どうだい？どんな氣持だい？』ロストフは訊いて見た。

『厭だね！併しそんな事は問題でないんだよ、君、』とドーロホフは途切れ〳〵の聲で言つた。

『今何處？莫斯科へ來たんだね、分つた。僕なんぞ何うだつて構はないけれど、僕はあの人を殺したやうなもんだ……あの人はこれを平氣で忍ぶことは出來ないよ、到底出來ないよ……』

『誰だい？』とロストフは訊ねた。

『母なんだ。僕の母、天使のやうな、天使のやうに立派な母なんだ。』とドーロホフはロストフの手を握りしめ乍ら泣き出した。

や、落ち着いて來た時、彼はロストフに向つて、自分が母と一緒に暮してゐる事、若し母が自分の瀕死のさまを見たら、到底平氣で居られない事などを打ち明けた。そして先に母の所へ行つて、豫め暗示を與へて呉れるやうにロストフに賴んだ。

ロストフは其の依賴を果す可く一人先に出掛けた。そしてドーロホフが、あの暴れ者のドーロホフが、年取つた母親と傴僂の妹と一緒に莫斯科で暮してゐて、此の上なく優しい息子であり兄

である事を知つて、すつかり驚いて了つたのである。

六

ピエールは近頃妻と差し向ひで顔を合す事が滅多に無かつた。彼得堡でも莫斯科でも、家はいつも客で一杯だつたからである。決闘の翌晩、彼は此の頃よくするやうに寢室へ行かないで、父譲りの大きな書齋にじつとしてゐた。それは例のベズーホフ老伯爵が死んだ部屋である。

彼は長椅子の上で横になつて、自分の身に起つたすべての事を忘れる爲めに寢附かうとした。けれどさうする事が出來なかつた。感情と思想と追懐の恐しい旋風が彼の心に吹き起つて、單に寢附く事が出來ないばかりでなく、じつと一ところに坐つてゐることさへ出來なかつた。で彼は長椅子を蹶つて、早足に部屋中を歩き廻らねばならなかつた。ふと彼の腦裏に結婚當時の彼女ー露はな肩、疲れた情慾的な目附をした彼女の姿が現はれるかと思ふと、直ぐに今度は彼女と並んで、あの宴會の時に見た美しい、傲慢な、しつかりした、嘲笑的なドーロホフの顔が浮んで來る。それに續いて同じドーロホフの顔ではあるが、彼がくるりと身を轉じて雪の上に倒れた時の、蒼褪めてぴく〳〵慄へる、苦痛に充ちた顔が浮ぶのであつた。

「一體何うしたといふんだらう?」と彼は自分で自分に問ひ掛けた。「俺は間男を殺したんだ、

さうだ、自分の妻の情夫を殺したのだ。さうだ、さうだつたのだ。所でそれはどうした譯だ!どうして俺はそんな人間になつたのだらう?——外でもない、お前があんな女と結婚したからだ。」と心内の聲が答へた。

「併し俺の過失は如何なる點にあるのだ!」と彼は重ねて其の聲に向つて訊いた。「外でもない、お前が愛もないのに彼女と結婚したからだ。お前が自分をも亦彼女をも欺いたからだ。」と、かのJe vous aime（我は汝を愛す）といふ心にもない數語を發した、ヴシーリィ公爵邸に於ける晩餐後の一刹那が、彼の胸にまざまざと浮んで來た。何もかもみんなこれから起つたのだ。「俺はあの時にもさう感じたつけ。」と彼は考へた。「これは何だか違つてゐる、俺はこんな事をする權利を持つてゐないつて、あの時既に感じたのだ。果してその通りの結果になつた。」

彼は蜜月の事を回想して顔を赤くした。取分け一つの回想が殊に生々（なまなま）としてゐて、恥しくもあれば腹立たしくもあつた。或る時結婚後間も無く、朝の十一時過ぎに彼は絹のガウンをきて、寢室から書齋へやつて來た。すると書齋には總支配人がゐて、恭しく會釋した。そしてピエールの顔から部屋着を一瞥してにつと笑つた。それは此の微笑を以て主君の幸福に對する、敬虔な同情を表はさうとするかのやうであつた。

「あゝ俺は幾度彼女を以て自分の誇としたらう、彼女の神々しい美や、彼女の世馴れた交際振

を誇つたことであらう。」と彼は考へた。「そして彼女が彼得堡中の人を招待する、俺自身の家までも誇とした。又彼女の近寄り難い氣品と美貌とを誇とした。あゝこんな事が俺の誇だつたのだらうか？あの時分俺は彼女を理解しないと思つてゐた。俺は幾度か彼女の性格を考察して、其の度に俺が理解しないのが悪いのだと思つた。あの何時も落ち付き拂つて滿足し切つたやうな、何の望みも欲求も無さゝうな樣子は、到底俺に解せないと言つたものだ。所が一切の謎を解く鍵は、淫奔な女といふ一語にあつたのだ。俺は此の一語を自ら發して、すべての眞相を明瞭にしたのだ。

「アナトーリはよく彼女の所へ金を借りに來て、彼女の剝き出しの肩を接吻したものだ。彼女は金は貸さなかつたけれど、接吻は許してゐた。又父親が冗談に彼女の嫉妬心を挑發しようとした事もある。すると彼女は平然たる微笑を浮べて、わたしは燒もちをやくやうな馬鹿ではありませんと言つた。『勝手にし度い事をさせたら宜うございます、』と俺の事を言つたつけ。一度彼女に姙娠の兆候を感じないかと訊いた時、彼女は輕蔑したやうに高笑して、『わたしは子供を欲しいと思ふやうな馬鹿ではありません、わたしにあなたの子供は出來ません』と言つた。」

續いて彼は妻の思想の粗野で單明な事、上流の貴族社會で育つたに似ず、彼女特有の言葉使の下品な事などを憶ひ出した。『わたしそんな馬鹿ぢやないわ……まあ自分で試つて御覽なさいよ allez vous promener（彼方へらつしやつてば）』と言つた風な調子である。彼は屢々老若男女、あらゆる人々の

間に妻の評判がいゝのを見て、何うして自分は彼女を愛しないのか、合點の行かない事があつた。「さうだ、俺は決して彼女を愛したことがない。」とピエールは考へた。「つまり彼女が淫奔な女だつて事を知つたからだ。」かう彼は心の中で繰り返した。「併しそれを斷乎として認める勇氣がなかつたのだ——あゝ今頃ドーロホフは雪の上に坐つて、取つてつけたやうに微笑してゐるだらう。多分俺の後悔に對して、何かしら故意とらしい見得を以て答へ乍ら、斷末魔の苦みを怺えてゐるかも知れない！」

世間には表面上所謂弱い性格らしく見えても、自分の悲哀を打ち明ける友を求めようとしない人がある。ピエールは此の種に屬する人であつた。彼は只一人心の中で自分の悲哀を反覆研究した。

「彼女が何事も、何事も彼女が悪いのだ。」と彼は獨言ちた。「併しそれだから何うなるものか？なぜ俺は彼女とかゝり合つたのだらう、なぜ俺は彼女に Je vous aime などと言つたのだらう？あれは嘘だ、いや、嘘よりもつと悪い。俺が悪かつたのだ、だから忍ばねばならない……と言つて何を忍ぶのだ？家名の汚れ？生の不幸？えゝ、何もかも無意味だ。」と彼は考へた。「名の穢れも體面もみんな相對的だ、みんな俺の自由にならないことだ。」

路易十六世が刑せられたのは、人々が『彼は陋劣漢で犯罪者だ。』と言つた爲めである（ふとかう

いふ考がピエールの腦中に浮んだ)。そして彼等のいふ事は其の見地に立てば尤もである。が、又同樣に路易十六世の爲めに殉教者のやうな死に方をし、彼を聖者の一人として崇めた人々も尤もなのだ。其の後ロベスピエールが專制君主だと云つて刑せられた。一體誰が正當で、誰が間違つてゐるのだらう?誰も間違つて居ない。只生ある中は生きよだ。一時間前死にかけたと同樣に、明日も亦死ぬかも知れないではないか。一體こんな事に心を惱す價値があるか。人間に與へられた生活は永遠に比べると、ほんの一秒時にも當らないではないか?

併し彼がかういふ種類の推論に依つて、僅かに自ら慰め得たと思つた其の瞬間、不意に彼女の姿が浮んで來た。而もそれはピエールが最も劇烈に、自分の誠ならぬ愛を捧げた瞬間に於ける彼女の姿であつた。彼は血潮が心臟にどつと押し寄せて來るのを感じた。彼は又しても立ち上つて、部屋を歩き廻り乍ら、手當り次第に其の邊の物を毀したり、引き裂いたりしなければならなかつた。

「何故俺は彼女に Je vous aime と言つたのだらう?」彼はしつきり無しに自問した。十遍ばかり此の質問を繰り返した時、ふと彼の胸にかのモリエルの Mais que diable allait-il faire dans cette galère? (あの男は一體何うして欲しいのだらう?)といふ一句が浮んで來た。彼は自分で自分を嘲るやうに笑つた。

夜になつて彼は侍僕を呼んで、彼得堡へ出立するから荷造りするやうにと命じた。今となつて

彼女と口を利く事が出來ようなぞとは、想像にも及ばなかつた。遂に彼は明日出發の際置手紙をして、永久に彼女と別れるといふ、自分の決心を告げる事に定めた。

翌日侍僕が珈琲を持つて書齋へ入つた時、ピエールは圓榻の上に倒れて、開いた本を手にしたまゝ、眠つて居た。

彼はふと目を醒したが、暫くは自分がどこに居るのか分らないで、きよろ〳〵と邊りを見廻すのであつた。

『御前樣は御在宅でゐらつしやいますか、お尋ねして來るやうにと、奥樣の仰しやり付けでございますが。』と侍僕が言つた。

けれど、ピエールが何う返事しようかと決し兼ねて居る中に、伯爵夫人自ら鷹揚に靜々と部屋へ入つて來た。夫人は銀で繡ひとりした白い繻子の寬衣を着け、飾り氣の無い頭をしてゐたが、二つの大きな en diadème (冠のやうな)編み髮が、其の美しい頭を二卷き卷いてゐる。たゞ大理石のやうな、心持出加減の額に、憤怒の皺が小さく一筋刻まれてあつた。彼女は持前の何事も押し堪へるやうな沈着を示して、侍僕の前では口を切らうとしなかつた。彼女は決鬪の事を知つて、其の事に就いて話しに來たのである。彼女は從僕が珈琲を置いて出て行く迄、じつと待つてゐた。ピエールはおづ〳〵と眼鏡越しに妻を眺めた。丁度犬に取り卷かれた兎が耳を伏せ乍ら、敵を目の

前に置いていつ迄もじつと臥てゐるやうに、彼も默つて讀書を續けようと試みた。併しそれも畢竟無意味で不可能だと感じたので、また臆病ゆに彼女を見遣つた。夫人は腰も掛けないで、侍僕の出て行くのを待ち構へつゝ、侮蔑的なほゝ笑みを浮べて彼を眺めた。

『これは又一體何事ですの？あなたはまあ何をなすつたんですの、一つ何はうぢやありませんか。』と彼女は嚴つい調子で言つた。

『わたしかね？わたしが何うしたつて？』とピエールは言つた。

『本當に大變な勇士が見附かりましたこと！さあ、返事して頂戴、あれは一體何の爲めの決闘です？あなたはあれで何を證據立てようとお思ひなすつたの？え、何を？一つ何はうぢやありませんか。』

ピエールは重々しく長椅子の上で寢返り打つて口を開いたが、返事することが出來なかつた。

『あなたが御返事をなさらないなら、わたしが聞かして上げますわ。』とエレンは語り續けた。『あなたは人の言ふ事を何でも本當になさるんです。あなたは人から、』エレンは笑ひ出した、『ドーロホフがあたしの情夫だつて言はれたんです。』と彼女は佛蘭西語ではあるが、『情夫』といふ言葉を他のすべての言葉と同じやうに、はしたない程正確に發音した。『そしてあなたはそれを信じたのです。え、あなたはあれで以て何を證據立てました？あの決闘で何を證據立てたのですか？

他ぢやありません、あなたが馬鹿だつて事ですわ、que vous êtes un sot ——それはもう誰でも承知してますよ！而も其の結果が何うなるか御存じですの？つまりわたしが莫斯科ぢうの笑ひ草になるばかりですわ、そして皆がさう言ふだけですわ、あなたが醉つたまぎれに前後を忘れて、何の根もない嫉妬の爲めに決闘を申し込んだつて。』エレンは次第々々に勢づいて聲を高くした。『而もその人はすべての點から見て、あなたより立派な人ですよ…』

『うむ……うむ……』ピエールは妻の顏を見ず、手一本足一本も動かさないで、顏を顰め乍ら唸つて居た。

『それにあなたはどういふ譯で、ドーロホフがわたしの情夫だつて事を本當にしたのです？どういふ譯で？言ひませうか、わたしがあの人と好んで一緒にゐるからでせう？若しあなたがもつと賢くて氣持のいゝ人だつたら、わたし喜んであなたと始終ご一緒にゐるんですけどね。』

『わたしに物を言つて呉れるな……後生だ。』としや嗄れた聲でピエールは言つた。

『なぜわたしが物を言つてならないのです？わたし立派にかう言ふ事が出來ますわ——あなたのやうな人を良人に持つてゐて、des amants（情夫）を拵へない奥さんは稀しい人ですわ。所が、わたしそんな事をしませんでしたからね。』と彼女は言つた。

ピエールは何か言はうとして、不思議な目附で（其の日の表情はエレンに分らなかつた）妻を見

遣つたが、又再び横になつた。彼は此の時肉體的に苦んでゐたのである。胸が壓し附けられるやうで、息をする事も出來なかつた。此の苦みを止めるには何かしなければならない、といふ事は彼も知つてゐた。けれども彼がし度いと思ふことは餘りに恐しかつた。

『我々は別れた方がいゝのだ』彼は切れ切れな聲でかう言つた。

『別れるんですつて、何うぞ御勝手に、但しあなたがわたしに財産を下さるならですわ。』とエレンは言つた。『別れる、成程おどし道具を見附けましたね！』

ピエールは長椅子から跳り上つて、よろ〳〵し乍ら彼女に飛び掛つた。

『貴樣殺してくれる！』と叫んで、彼は卓から大理石の板を取り、自分にも未だ經驗した事のない力を以て、一歩妻の方へ踏み近づくやそれを振り上げた。

エレンの顏は物凄くなつた。彼女は悲鳴を上げて飛びすさつた。父の遺傳が今ピエールに現れた。彼は狂暴の魅力と快美とを感じた。板を拋り出して粉微塵にするや、兩手を擴げて彼女に近寄り、家中の者が愕然とする程の恐しい聲で、『出ろ!!』と怒鳴つた。若しエレンが室から逃げ出さなかつたら、ピエールはこの瞬間何を仕出來したか分らなかつたのである。

一週間の後ピエールは自分の財産の大半を成してゐる、大露西亞の領地全部の管理を妻に委任

して、一人彼得堡（ペテルブルグ）へ去つた。

七

アウステルリッツの戰鬪、並びにアンドレイ公爵戰歿に關する報知が、禿山（ルイシエ、ゴールイ）に到着してからも一ヶ月過ぎた。大使館を通じて幾通手紙を出しても、何んなに探索を試みても、彼の死體も發見されなければ、彼の名も捕虜名簿の中に入つてゐなかつた。身内の者に取つて何よりも惡い事には、それでも未だ矢張り公爵が戰場で土地の住民に救助されて、何處か見も知らぬ他人の中で只一人、自分の身の上を報知するだけの力もなく、死に垂（なんなん）んとして（或ひは段々と健康を回復し乍ら）病床に横たはつてゐるかも知れぬといふ、一縷の望みが殘つて居る事であつた。最初老公爵がアウステルリッツの敗戰を讀んだ新聞紙には、例の如く簡單で不明瞭な筆法で、露西亞軍は華々しき戰鬪の後、遂に退却の餘儀なきに至つた、そして其の退却は完全なる秩序を保つて行はれた、とかう記（しる）してあつた。老公爵は此の公報に依つて、我軍の全敗を曉（さと）つた。新聞がアウステルリッツの敗報を傳へてから一週間の後、クトゥゾフから手紙が着いた。彼は老公爵に其の一人息子の運命を次のやうに報じた。

『御令息は小官の面前にて、』とクトゥゾフは記（しる）した。『軍旗を手にして聯隊の先頭に立ち、嚴父

並に祖國の名を辱めざる天晴れの勇士として、遂に敵彈に斃れ申され候。小官のみならず全軍の遺憾とする所は、御子息に果して生ありやなしや、今以つて分明ならざるの一事に御座候。さはれ恐らく生あるべしとの希望を以て、小官は小官自ら並びに貴殿を慰むる事を欲するものに御座候。然らずんば戰場にて發見されたる戰死將校の中に、御令息も數へ入れらる可き筈に御座候。これ等戰死將校の名簿は軍使の手を經て、小官の手に交附致され居り候。』

此の報知を受け取つたのは、彼が夜遲く書齋に一人切り坐つてゐる時であつた。翌日彼はいつもの如く朝の散歩に出掛けた。併し事務員に對しても、植木屋に對しても、技師に對しても、むつつりとして、腹立たしさうな顔付をしたが、別に何も言はなかつた。

いつもの刻限に令孃マリヤが父の部屋へ入つた時、彼は轆轤に向つて何か削つてゐたが、いつもの通り娘の方を振り向いても見なかつた。

『あゝ！マリヤか。』と不意に彼は不自然な調子で言つて、鑿を投げ出した。(器械の輪は未だはずみでぐるぐる廻つてゐた。マリヤはそれに續いて受け取つた報知と、一つに溶け合つた此の絶えぐなる車輪の軋みを、長い間覺えてゐた)。

マリヤは父に一足近寄つて其の顔を眺めた、と同時に、彼女の心内の或る物がぐつと下へ沈んだやうな氣がした。目ははつきりと物を見る力を失つた。沈んでも悄氣てもゐないが、己れ自身

に對して不自然な抑制を加へてゐるやうな、毒々しい父の顔に依つて、彼女は今自分の頭上に恐しい不幸が落ち掛つて、あはや自分を壓しつぶさうとしてゐるのを悟つた。それは人生に於ける最惡な不幸、未だ彼女の經驗した事のない不幸、恢復する事も理解する事も出來ない不幸、即ち愛する人の死であつた。

『お父さま！兄さんが！』とマリヤは言つた。其の時この武骨な醜い令孃の顔には、言ひ現はし難い悲哀と自己忘却の美が浮んだ。父はその凝視を正視するに堪へないで、思はず歔欷の聲を上げ乍ら顔を反けた。

『知らせがあつた。捕虜の中にもゐない。戰死者の中にも居ない。クトゥゾフの手紙では、』と彼は突き刺すやうに叫んだ。恰も此の叫び聲で令孃を追つ拂はうとするかのやうに。『殺されたんだ！』

マリヤは卒倒もしなかつた、氣分が惡くもならなかつた。彼女はもう前から蒼褪めてゐたが、この言葉を聞くとひとしく其の顔の樣子が變つて、輝かしく美しい目に何やら燃え始めた。丁度喜び——此の世の喜びや悲しみを超越した高い喜びとも言ふべきものが、彼女の心内の深い悲愁の上から滿ち溢れたのである。彼女は父に對する恐怖を忘れて其の傍へ近附き、手を取つて自分の方へ引き寄せ乍ら、干からびた筋だらけの首を抱きしめた。

『お父さま、』と彼女は言つた。『そんなに向うをむかないで下さい、一緒に泣きませう。』

『悪黨、卑怯者奴！』娘から顔を反けつゝ老人は喚いた。『全軍を滅し、士卒を滅すとは！一體なんの爲めだ？行け、行つてリーザに聞かして遣れ。』

令孃は父の傍なる肘椅子に力なく身を投げて泣き出した。例のやさしい、と同時に倨傲な顔をして、彼女とリーザに別れを告げた兄の姿、それを今マリヤは目の前に見たのである。彼女は兄が優しい又同時に嘲るやうな態度で、聖像を首に掛けた時の姿をまざ〳〵と想ひ出した。「兄さんは信仰を得たらうか？自分の不信を悔悟したらうか？そして今あすこにゐるのかしら？あの永久の平安と幸福の棲家にゐるのかしら？」と彼女は考へた。

『お父様、何んな風だつたのでございます、聞かして下さいまし。』と彼女は涙の隙から訊ねた。

『行け、行け、露西亞の優れた人と露西亞の名譽とを、むざ〳〵殺す爲めに引つ張り出したあの戰爭でやられたのだ。いゝから行け、マリヤ。行つてリーザに知らしてやれ。わしも後から行く。』

マリヤが父の許から歸つて來た時、小柄な公爵夫人は仕事に向つて坐つてゐた。そして姙娠の女に特有な、内部へ向けられたやうな、幸福らしく落ち付いた目つきを以て、令孃マリヤを眺めた。見受くる所、彼女の目はマリヤを眺めたのではなくて、自分の奥の方——何かしら自分の内

部で完成されつゝある、幸福な、神祕的な或る物を見詰めてゐるらしかつた。

『Marie』と彼女は刺繍臺から離れて、體を後ろへ投げ乍らかう言つた。『一寸こゝへ手を當てゝご覽なさいな。』

彼女はマリヤの手を取つて自分の腹へ載せた。其の目は何か期待するやうにほゝ笑んで、薄い鬚のある上脣が擡つた。そして擡つた儘子供らしく幸福げにじつとしてゐた。

マリヤはリーザの前に跪づいて、嫂の着物の襞の中に顔を埋めた。

『ほら、ね——分るでせう？わたし本當に妙な氣持がしますの。ねえマーシャ、わたし一生懸命に此の子を可愛がつてやりますわ。』リーザは幸福に輝く目で義妹を見乍らかう言つた。

マリヤは顔を上げる事が出來なかつた。彼女は泣き出した。

『あなたどうしたの、マーシャ？』

『何でもありません……わたし何だか悲しくつて……兄さんの事が氣掛りなんですの。』嫂の膝で涙を拭き乍ら彼女は答へた。

朝の中マリヤは幾度か嫂に仄めかさうとしたが、その都度彼女は泣き出して了つた。小柄な公爵夫人が如何に呑氣だからと云つても、此の譯の分らぬ涙は彼女を不安にした。彼女はなんにも言はないで、何物か探し出さうとするやうに、心配らしく邊りを見廻すのであつた。晝食の前に

彼女の居間へ老公爵が入つて來た。リーザはいつも此の人を恐れてゐたが、今日は殊に落ち着きの無い意地悪さうな顔をして、一言も發しずに出て行つた。彼女はマリヤの顔を眺めた。そして例の姙婦にのみ見られる目付——注意を自分の内部へ集中してゐるやうな目付をして考へ込んだが、やがて不意に泣き出した。

『アンドレイから何か便が有りましたの？』と彼女は訊いた。

『いゝえ、未だ便りの來る筈が無いつて事は、あなたも御存じぢやありませんか。けれどモンペールが心配してゐらつしやるから、わたしも何だか恐しいんですの。』

『ぢや、何でもないんですね？』

『何でもありませんわ。』光りに充ちた目でしつかりと嫂を見詰め乍ら、マリヤはかう言つた。

彼女はもう嫂に聞かすまいと決心して、近日あるべき出産の時迄、この恐しい報知をリーザに隱すやうに、父公爵をも說き伏せた。マリヤと老公爵とは各々別樣に、自分の悲哀を忍び隱したのである。老公爵はもう一切未練を殘すまいとして、官吏を墺太利に派して、我子の行方を探らせたにも拘らず、アンドレイ公爵は殺されたものと決めて了つて、記念碑を莫斯科へ註文し、我家の庭に建てる事とした。皆の者にも息子は殺されたと吹聽した。彼は以前の生活狀態を些の變更なしに續けようと努めたが、力は彼の意志に背いた。歩く事も、食ふ事も、寢る事も以前より

少くなり、一日一日と弱くなつて行つた。マリヤは未だ希望をつないでゐた、彼女は生ある者として兄の爲めに祈禱し、兄の歸還の日を二六時中待ちつゞけた。

八

『Ma bonne amie（我が良き友よ）』三月十九日の朝飯後、小柄な公爵夫人はかう言つた。そして薄い鬚のある上脣は昔からの習慣でひよいと擡つた。併し此の邸の中に於けるすべての物——宮に微笑と云はず言葉の響から足取りに至る迄、かの恐しい報知を受け取つた日から、悲哀の影が印せられてゐたので、原因は知らない乍ら、全體の氣分に同化された小柄な公爵夫人のこの微笑も、どちらかと言へば、さうした全體の悲哀を想ひ起させるやうなものであつた。

『Ma bonne amie（我が良き友よ）、わたし今日の朝御飯（フルシュチック）——これは料理人のフォカがよく使ふ言葉ですの——の爲めに工合を惡くしたのぢやないでせうか、心配ですわ。』

『あなた何うなすつたの、姉さん？蒼い顏をして。まあ本當に蒼い顏ですこと。』持前の重々しい、併し柔か味のある足取りで嫂に近附きつゝ、マリヤはびつくりしたやうにかう言つた。

『奧樣、マリヤ・ボグダーノヴナの所へ、お使をやりましては如何でございませう？』と其處に居合せた小間使の一人が言つた。（マリヤ・ボグダーノヴナは町から呼ばれた產婆で、もう禿山（ルイシエゴール）

へ呼ばれてから二週間目になる)。

『あゝ本當にね。』とマリヤは相槌打つた。『ひよつとしたらさうかも知れませんよ。わたしが參りませう。Courage, mon ange(心配なさる事はありませんよ、姉さん)』と彼女はリーザを接吻して、室を出ようとした。

『あら、さうぢやありません、さうぢやありません!』蒼褪めた顔色や肉體の苦痛の他に、到底避く可からざる苦痛に對する恐怖が、小柄な公爵夫人の顔に現はれた。

『Non, c'est l'estomac(違ひます、これは胃ですわ)……ね、マリヤさん、胃だと言つて頂戴……ね、マリヤさん、さう言つて、さう言つて……』と公爵夫人は小さな兩手を捩ぢ乍ら、子供らしい苦悶の色を浮べて、氣まぐれな、幾分わざとらしく思はれる位な風付で泣き出した。

マリヤは產婆を呼びに室を駈け出した。

『Mon Dieu! Mon Dieu! Oh!(あゝ何うしよう!何うしよう!あゝ!)』といふ聲が彼女の後ろで聞えた。

肥えた小さな白い手をこすり乍ら、產婆は物々しく落ち着き拂つた顏付をして、もう彼女の方へ出會ひ頭にやつて來る所であつた。

『マリヤ・ボグダーノヴナ!どうやら始つたやうですわ。』びつくりしたやうに目を見張つて產婆を見詰めながら、マリヤはかう言ひ掛けた。

『えゝ、それで結構なのですよ、お孃さま。』とマリヤ・ボグダーノヴナは格別歩みを早めようとも せずにかう言つた(『あなた方のやうな娘さんは、かういふ事をお知りにならない方が宜しいのですよ。』

『けれど、どうして莫斯科から、お醫者樣がお見えにならないのでせうねえ?』とマリヤは言つた。(リーザとアンドレイの希望に依つて、充分間に合ふやうに莫斯科の產科醫者を迎へに遣つたので、その到着を今か今かと待ち兼ねてゐるのであつた)。

『大丈夫でございますよ、お孃さま、御心配なさいますな。お醫者樣はいらつしやらなくとも、巧く參りますから。』

五分の後マリヤは自分の居間に坐つて、大勢が何やら重い物を提げて行く物音を聞いた。覗いてみると、侍僕等がアンドレイ公爵の書齋にあつた革張りの長椅子を、何の爲めか寢室へ運んで行くのであつた。彼等の顏には何かしら物々しい、しんとしたやうな所があつた。

マリヤはたゞ一人居間に坐つて、邸內の物音に聞耳を立てゝゐた。そして誰か室の傍を通り過ぎる度に戸を細目に開けて、廊下の出來事を透して見るのであつた。女達が幾人も物靜かな足取りで、あちこち行つたり來たりしたが、マリヤの方を見ると直ぐ顏を反けて了つた。彼女は問ひ掛ける氣力も無く、戸を閉めて我れに返り、肘椅子に腰を落ち付けた。そして思ひ出したやうに祈禱書を擴げて見たり、聖龕の前に跪いたりした。併し祈禱も心の動亂を鎭める力のない事を感

じて、マリヤは自分で自分に驚きかつ悲しんだ。

不意に部屋の戸が靜かにあいて、布で頭を巻いた老女が閾の上に現れた。これは老公爵に嚴禁された爲め、殆ど一度もマリヤの部屋へ入つた事の無い、乳母のプラスコーヰヤ・サーヰシュナであつた。

『マーシェンカ、一寸お邪魔に來ましたよ。』と乳母が言つた。『そして若殿樣の婚禮の時のお蠟燭を、聖人樣へお供へしようと思つて、ほら此の通り持つて參りましたよ、お孃さま。』と彼女は溜息をつき乍ら言つた。（安產の兇—譯者註）

『あら乳母、わたし本當に嬉しいわ。』

『神樣はお慈悲深うござりますでな。』

乳母は金を卷いた蠟燭を聖龕の前に供へ、編みさしの靴下を持つて戸の傍に坐つた。マリヤは本を取つて讀み始めた。たゞ時々人の足音や話し聲が耳に入る度に、マリヤはびつくりして問ひ掛けるやうに、乳母はそれを宥めるやうに、互に顏を見合すのであつた。マリヤが居間に坐つて經驗したと同じ感情は、邸の隅々まで漲り渡つて、すべての人を支配してゐた。產婦の苦しみを知る人が少ければ少いだけ、其の苦しみも輕くなるといふ言ひ傳へがあるので、一同の者はそ知らぬ樣子をしようと努めた。そして誰一人その話をする者はなかつた。併し、いつも公爵家に行

き渡つてゐる莊重な、悲しい、上品な態度の他に、何かしら共通な心配と、心の和らげられたやうな表情と、この瞬間將に成就されんとしてゐる、理解し難い偉大な或る物に對する直覺が一同の顏に窺はれた。

大きな女部屋では笑ひ聲も聞えなかつた。侍僕部屋では一同が何か待ち受けるやうな氣持で、默つて坐つて居た。下廻りの男女も木葉（こつぱ）や蠟燭に火を點じて、床に就かうともしなかつた。老公爵は踵に力を入れて書齋をこと〳〵歩き廻つてゐたが、やがてチーホンをマリヤ・ボグダーノヴナの許へ遣つて、何んな風か訊ねさした。『公爵が何んな風か訊いて來いと仰しやつた、と只さう言へ。そしてあれが何と言ふか、來てわしに知らせろ。』

『殿樣にさう申し上げて下さい、お產が始まりましたつて。』意味ありげに使者を眺めつゝ、マリヤ・ボグダーノヴナはかう言つた。

チーホンは引つ返して老公爵にかくと報じた。

『よし。』老公爵は後ろ手に戸を閉め乍らかう言つたが、それ切りチーホンは書齋にことりといふ音も聞かなかつた。

少し經つてチーホンは蠟燭の火を直すやうな風をして、書齋へ入つて行つた。公爵が長椅子に臥（ね）てゐるのを見ると、チーホンは其の動亂したらしい顏をじつと眺めた後、一寸首を掉つて無言

の儘主人に近附き、その肩に接吻した。そして蠟燭も直さなければ、何の爲めに來たとも言はないで出て了つた。此の世に於ける最も莊重な神祕は、引き續いて完成されつゝあつた。夕も過ぎて夜となつた。理解を絕したものに對する、心の和げられたやうな感じと期待の念は、依然として衰へないで、却つて其の度を高めて行つた。誰一人眠る者はなかつた。

それは丁度冬が自分の領分を取り戻さうとして、滅茶々々に名殘りの雪や嵐を投げ散らしてゐるやうな、三月の一夜であつた。換馬まで送つて毎日々々待ち佗びてゐる、莫斯科の獨逸醫者を出迎へに、提灯を携へた數人の騎者が、本道と村道の分れ道まで出掛けて行つた。それは道の凹んだ所や、雪の下に水の溜つた所を無事に案内する爲めであつた。

マリヤは疾くに本を捨てゝ了つた。彼女は細かい一線一劃まで知り拔いた、皺の深い乳母の顏や、頭巾の下から食み出した一束の白髮や、腮の下にだぶ〳〵と下つてゐる皮の袋などに、輝かしい目を注ぎ乍ら、無言で坐つてゐた。

乳母のサーギシュナは片手に編物の靴下を持つて、自分で自分の言葉が聞えもせず分りもしない儘に、亡くなられた母夫人がキシニョーフで、取上げ婆の代りにモルダギヤ生れの百姓女に介抱せられ乍ら、マリヤを生んだ顚末を物語るのであつた。

『神樣はお慈悲深うござりますで、決してお醫者樣なぞいる事ではござりませぬ。』と彼女は言つた。

不意に一陣の風が取り外された窓枠の一つにどつと當つた。(老公爵の命によつて毎年雲雀の聲と同時に、部屋々々の二重枠を一つ宛取り外すのが例であつた)。そしてぞんざいに篏めてあつた金具を叩き落し乍ら、卷カーテンをはた〳〵と鳴りはためかし、寒氣と雪をさつと吹き込んで、蠟燭の火を消して了つた。マリヤはぞつと身顫ひした。乳母は靴下を措いて窓に近寄り、身を乘り出し乍ら、はね飛ばされた枠を押へに掛つた。寒い風は彼女の頭巾の端や、食み出した胡麻鹽の髮を慄はした。

『お孃さま、あれ、誰やら前の道路を此方へ參りますぞ!』と彼女は枠を握つた儘、篏めようともしないでかう言つた。『提灯を持つて……屹度お醫者さまでござりますよ。』

『あらまあ、い、鹽梅だつた事!』とマリヤは言つた。『ぢや、出迎ひに行かなくちやならない、あの方は露西亞語を御存じないのだから。』

マリヤはショールを引つ掛けて、客を出迎へに駈け出した。彼女が女關を通り拔けた時、馬車と提灯が車寄せに立つてゐるのが、窓越しに見透かされた。彼女は階段へ出た。手摺の柱に立てゝある蠟燭は、風の爲めに燃え盡きんとしてゐる。侍僕のフィリップは今一本の蠟燭を手に持つて、

びつくりしたやうな顔をし乍ら、下の方に――階段の最初の廣臺に立つて居る。其の又下の方の曲り角の陰に、階段を上つて來る毛皮靴の音が聞えた。何だか聞き覺えのあるやうな聲がしきりに話してゐる。

『結構だ！』と其の聲が言つた。『そしてお父さんは？』

『お休みになりました。』もう下に來てゐる執事のヂェミャーンの聲が答へた。

それから又聞き覺えのある聲が何やら訊いて、ヂェミャーンがそれに答へた。そして毛皮靴の音は上から見えぬ曲り角に沿うて、次第に早く近附き始めた。

「あれは兄さんだ？」とマリヤは考へた。「いや〳〵、そんな事が有らう筈はない、それは餘り突飛過ぎる。」

と此の瞬間、侍僕が蠟燭を持つて立つてゐる廣臺へ、襟一面雪だらけの毛皮外套を着た、アンドレイ公爵の姿と顔があらはれた。さうだ、矢張り彼であつた。たゞ顔が蒼褪めて瘠せ衰へ、すつかり見違へて、妙になよ〳〵してゐたが、それでも心配さうな表情をしてゐた。彼は階段へ上つて妹をひしと抱いた。

『お前はわたしの手紙を受け取らなかつたのかね？』と彼は訊ねたが、返事を待たないで（又その返事はどの道得られなかつたであらう、何故といつて、マリヤは口を利く事が出來なかつたか

らである）、彼は踵を回らして、後から來る産科醫と一緒になり（アンドレイは最後の驛遞で彼と落ち合つたのだ）、再び急ぎ足で上つて來て、再び妹を抱き緊めた。

『何といふ神樣の引き合はせだらう！』と彼は言つた。『ねえ、マーシャ！』と毛皮の外套と靴を脱ぎ捨てゝ、公爵夫人の居間へ赴いた。

九

小柄な公爵夫人は白い部屋帽子を被つて、枕に頭を埋めてゐた（苦痛は今やつと去つたばかりなのである）。黑い髪は火照つて汗ばんだ頰の邊に房々と渦卷いた。上脣に薄く毛の生へた、紅いあでやかな口は開いてゐた。彼女は嬉しげにほゝ笑んだ。アンドレイ公爵は部屋へ入ると、長椅子の上に臥つてゐる妻の脚の邊に立ち止つた。子供らしく慴えたやうな、興奮した視線を投げてゐるぎら〳〵した目は、表情を變へる事なしに彼の上に据わつた。「わたしはあなた方みんなを愛しました。そして誰にも惡い事をした覺えはありません。それだのに、何うしてわたしはこんな苦しい目に遭ふのでせう？ 助けて下さい。」と其の表情が語つてゐる。彼女は良人の顔を見たけれど、今良人が自分の前に現はれた意味が、はつきり分らなかつたのである。アンドレイ公爵は長椅子を迂回して、妻の額に接吻した。

『リーザ、懐しかつた。』嘗て妻に發した事のない言葉を、今彼は始めて口に出したのである。

『神様はお慈悲深い・・・・』

彼女は物問ひ度げな、子供らしく不平らしい目附で彼を見詰めた。

「わたしはあなたから助けを求めてゐました。けれどもまるで、まるで駄目でした・・・あなたも矢張り他の人と同じ事ですわ！」と彼女の目が言つてゐた。彼女は良人の歸來に少しも驚かなかつた。つまり良人が歸つたといふ事が、何のことか分らなかつたのである。良人の歸來も彼女の苦痛と其の輕減に、何の關係も無かつたのである。陣痛は又始つた。マリヤ・ボグダーノヴナは公爵に向つて、暫く部屋から出てゐるやうに勸めた。

産科醫が入つて來た。アンドレイ公爵は室を出た。そして妹のマリヤに行き會つたので、再び其の傍へ近寄つた。二人は小聲で話し始めたが、話は直ぐに途絶え勝ちであつた。二人とも期待の情に耳を澄した。

『Alles, mon ami (兄さん、行つて御覽なさい)。』とマリヤは言つた。

アンドレイ公爵は再び妻の産室を指して行つたが、隣室に腰を下して待つ事にした。誰やら一人の女が慴えたやうな顔をして産室から出て來たが、アンドレイ公爵を見るともじ〳〵した。公爵は兩手で顔を蔽つた。かうして幾分かの間じつと坐つてゐた。哀れな、獸のやうに力無げな呻

吟の聲は、依然として戸の陰から聞えて居た。アンドレイ公爵は立ち上り、戸に近寄つて開けようとした。けれど誰かゞ向うから戸を押へてゐた。

『いけません、いけません！』中からびつくりしたやうな聲でかう言つた。

彼は部屋の中を歩み始めた。呻吟の聲ははたと止んだ。それから又幾秒か過ぎた。と、不意に恐しい叫び聲——それはリーザの聲ではない、彼女にあんな聲は出ない——が隣室に響き渡つた。アンドレイ公爵は戸口へ駈け寄つた。叫び聲はそれ切り止んで、續いて赤坊の泣聲が聞えるのであつた。

「どうして彼處へ赤坊を連れて行つたのだ？」と最初の一瞬間アンドレイ公爵は考へた。「赤坊？一體何者だらう？・・・どうして彼處に赤坊なんかゐるんだらう？ それとも赤坊が生れたのかしら？」

此の時始めて彼はこの叫び聲の悦ばしい意味を悟つた。涙が息も出來ない程流れて來た。彼は窓仕切の上に兩肘をつき乍ら、子供のやうにしやくり上げて泣き始めた。

不意に戸があいた。上衣を脱いで襯衣の袖をたくし上げた醫者が、蒼い顔をして腮をがた〳〵慄はせ乍ら、産室から出て來た。アンドレイ公爵が彼の方へ向くと、醫者は氣抜けのしたやうな風付で一寸公爵を見遣つた切り、一言もいはずに傍を通り抜けて了つた。一人の女が部屋の中か

ら駈け出したが、アンドレイ公爵を見ると、閾の上でもじ〳〵し始めた。彼は妻の部屋へ入つた。妻は五分前に見たと同じ姿勢であるが、今は空しい屍となつて横たはつてゐた。目は動かず頰は蒼褪めてゐるけれど、先刻と變らぬ表情は上脣に薄い鬚の生へた、此の美しい子供々々した顔に殘つてゐた。

「わたしはあなた方をみんな愛して、何も悪い事なんかしないのに、あなた方はわたしを何といふ目に合したのです？」と此の美しく哀れな死顔が語るかのやうに見えた。

部屋の隅には何かしら小さな赤い物が、マリヤ・ボグダーノヴナの慄へる白い手の中でぐす〳〵鼻を鳴らしたり、甲高く泣いたりしてゐた。

それから二時間の後、アンドレイ公爵は靜かな足取りで父の書齋へ入つた。老人はもう一切の出來事を知つてゐた。彼は戸口の直ぐ傍に立つてゐて、戸が開くや否や、老人らしいごつ〳〵した搾木のやうな手で、無言のまゝ我子の頸を抱きしめた。そして子供のやうに歔欷きし始めたのである。

三日の後、小柄な公爵夫人の野邊送りが營まれた。アンドレイ公爵は告別の爲め、棺にしつらへてある階段を上つた。棺の中には目こそ閉ぢたれ同じ顔があつた。「あゝ、あなたがたはわたしを何といふ目に合したのです？」依然として此の顔はかう言つてゐる。アンドレイ公爵は心の中で何か引き拐られたやうな氣がした。そして自分は今となつて償ふ事も、忘れる事も出來ない罪悪を犯したのだと感じた。彼は泣く事も出來なかつた。老公爵も矢張り棺へ上つて來て、穩かに高々と組み合せてある、小さな蠟のやうな手を接吻した。彼女の顔は舅に向つて、「何だつてあなた方はわたしをこんな目にお合せなすつたのです？」と言ふやうに見えた。で、老人は此の顔を見ると、腹立たしげに顔を反けて了つた。

更に五日の後、若公爵ニコライ・アンドレイギッチの洗禮式が行はれた。僧が鷺鳥の羽を以て、皺のよつた赤い子供の掌や、足の裏に水をつけてゐる間、乳母は腮で纏布を押へてゐた。

教父になつた祖父は落しはしないかと心配し乍ら、でこぼこした葉鐵の洗禮盤の周りを、ぶるぶる慄へ乍ら幼兒を連れて歩いた。そして時々それを教母のマリヤに手渡しするのであつた。アンドレイ公爵は赤坊を溺らしはせぬかとひや〳〵し乍ら、次の間に控へて式の終るのを待つてゐた。漸く乳母が幼兒を連れて來たとき、彼はさも嬉しげに其の顔を眺めやつた。そして乳母が髪毛のついた蠟を洗禮盤へ入れて見たら、沈まないで盤の中をふわ〳〵浮いたと告げるのを聞いて、結

構々々といふやうに點頭いて見せた。

一〇

ロストフがドーロホフとベズーホフの決闘に關係した事は、老伯爵の骨折で揉み消されて了つた。そしてロストフは覺悟してゐた奪官の代りに、莫斯科總督の副官に任命された。この爲め彼は家族と共に田舎へ行く事が出來ないで、夏ぢう莫斯科で新しい職務に從事した。ドーロホフはすつかり健康を恢復した。此の恢復期間にロストフは特に彼と親密になつた。ドーロホフは中ずつと母の許に――狂熱的な優しい愛を捧げて呉れる母の許に臥つてゐた。母のマリヤ・イヴーノヴナは、フェーヂャに對する友情の爲めにロストフが氣に入つて、よく彼に息子の事を話して聞かせた。

『本當にねえ、伯爵、あの子は今の放埒な世の中を渡るには、餘り心が立派で潔白過ぎるのでございますよ。德行は誰も好きません、煙つたいものですからねえ。時に伯爵、遠慮の無い所を仰しやつて下さいませんか、あの事ではベズーホフさんが正當なのでせうか、潔白なのでせうか？フェーヂャはあゝした立派な心掛の子でございますから、今でもあの方を愛して、あの方の惡口なんか申した事がありません。彼得堡で巡査を捕まへて何か惡戲をしました時も、あの方が一緒だつた

ではありませんか。處が何うでございましたらう、ベズーホフさんは何の事も無くつて、フェーヂャばかり何もかも一人で背負つて了ひました？本當にあの子の受けた苦みはまあどんなでせう！それは復官されたにはされました。併し、復官されなくつて何と致しませう？あの子のやうな豪い勇士は、さう矢鱈には無いと存じますの。それが今度どうでせう――あの決闘ですものねえ！一體あの人達には、感情とか名譽とか云ふものが有るのでせうか！あの子が人の一人息子だといふ事を知り乍ら、決闘を申し込んで、而もあんなに無遠慮に射つなんて！有難い事に、神樣があの子を憫んで下すつたからいゝやうなものの……一體何の爲めでせう？それは今の世の中で腹に企みの無い人は有りません。あの人が恐しい燒もちやだと云ふなら、それでも宜しうございますが、それならそれでわたしに言はせれば、前以て一寸注意する事も出來た筈でございます。何にせ一年から續いた事なんですものね。それを何うでございませう、フェーヂャがあの人に借金があるから、大丈夫手向ひしないだらうと見越して、決闘なぞ申し込むではありませんか。何といふ卑怯な仕打でせう！何といふ醜い遣り口でせう！わたしはあなたがフェーヂャの心を理解して下さるのを知つてゐますから、それで心底からあなたを愛してゐるのでございますよ、伯爵。いえ、本當ですの。あの子の心が分る人は餘り有りませんからねえ。あれは全く高尚な、天使のやうな人間でございますの！』

ドーロホフ自身も恢復期の間しよつちうロストフに向つて、到底彼から期待の出來ないやうな事を語るのであつた。

『人が僕の事を惡者だといふのは、僕も知つてる。』と彼は言つた。『それも構はんさ。僕は自分の好きな人以外誰がどうならうと平氣だ。併し自分の好きな人なら、命を投げ出しても惜しくない程愛する。其の他の奴なんぞは、若し僕の行く手を邪魔でもしようものなら、みんな壓し潰して呉れる。僕にはあの尊敬して止まぬ大切な大切な母親と、二三の親友がある（君も其の一人さ）、其の他の奴等なんかは、有益なか有害なか、其の程度に應じて注意を拂ふに過ぎない。而も奴等は殆どすべて有害の部に屬する——殊に女がさうだ。全くね君、』と彼は語を次いだ。『男の方では、愛する心を持つた、潔白で崇高な人物にも出會つた事がある。所が女の方では——伯爵夫人だらうと下女だらうと同じ事だ——どいつも此奴もみんな賣女ばかりだよ。僕が女に求めて居る天使のやうな清らかな魂、眞から男に心を捧げるやうな態度、そんな物を未だ一度も見た事がない。若しそんな女を見付けたら、僕は其の女の爲めに命を捧げてもいゝんだがなあ。ふん、あんな奴等なんか！』と彼は輕蔑したやうな身振をして、『君は信じるか何うか知らないが、若し僕が未だ命を大切にして居るとすれば、それはたゞ僕を清淨にし、僕を向上させるやうな、潔白な女に出會ひはしないかと、そんな事を頼みにして居るからさ。併し君にはこんな事分らないだ

らうなあ。』

『いや、僕大いに分るよ。』此の新しい親友に魅了されてゐるロストフはかう答へた。

秋になるとロストフの一家は莫斯科へ歸つて來た。冬の始めヂェニーソフも歸つて來て、ロストフ家に滯在した。ニコライ・ロストフが莫斯科に過した、此の千八百六年の冬の始め頃は、彼と其の家族に取つて、最も幸福で愉快な時代の一つであつた。ニコライは兩親の家へ多くの若い人々を引き入れた。ゾーラは二十歳の美しい娘、ソーニャは今年十六歳、たつた今開いた花のやうな美しさに充ちた少女であつた。ナターシャは半ば令孃半ば子供で、何うかすると無邪氣に滑稽だが、又どうかすると娘らしい魅力を帶びて來るのであつた。

此の頃ロストフ家には、非常に美しく非常に若い娘達をもつた家によくあるやうな、一種特別ななまめいた空氣が釀されてゐた。これ等の若々しい、感受性に富んだ、何かに（多分自分自身の幸福であらう）ほほ笑み掛けてゐるやうな少女の顏や生き〳〵した騷ぎを見、取止めはないけれど誰に對しても愛嬌のある、何んな事でも仕出來しさうな、希望に溢れた若い女の囀りや、連絡もない唱歌や音樂の響を聞いてゐると、ロストフ家へ出入する若い人は誰でも一樣に、戀を待ち構へるやうな心持や、幸福の期待を覺えるのであつた。かうした感情は又ロストフ家の若い人々自

身も味つてゐた。

ニコライの引き入れた若い人達の中で、上の部に屬するものとしてドーロホフがあつた。彼はナターシャを除けて家族一同の氣に入つた。ナターシャはドーロホフの爲めに、危く兄と喧嘩しないばかりであつた。ドーロホフは惡者だ、決鬪事件では矢張りピエールの方が正しい、ドーロホフは不愉快で不自然だから惡い、などと彼女は主張して止まなかつた。

『え、、わたし何も合點する事なんかなくつてよ。』と頑固な我儘らしい調子でナターシャは叫んだ。『あの人は意地惡で情てものがないんだわ。だつて、わたしヂェニーソフさんは好きなのよ。あの人も隨分騷ぎなさるけれど、それでもわたしあの人が好きだわ。して見ると、わたしだつて譯は分つてゐるんでせう。何と言つたらい、か分らないけれど……あの人の言つたりする事は、みんな何か當あつてなんですもの、それがわたしは厭。ヂェニーソフさんは……』

『いや、ヂェニーソフは別さ。』ニコライは答へた、ドーロホフに比べてはヂェニーソフさへ何等の價値がない、といふ事を思ひ知らせようとし乍ら。『あのドーロホフがどんな優しい心を持つてゐるか、それを理解して遣らなくちや、あの男がお母さんに仕へる所を見て遣らなくつちやね、實際優しい心だよ！』

『そんな事はわたし知らなくつてよ。だけど、わたしあの人と一緒に居ると間が惡くなるわ。

それに兄さん知つて、？あの人はソーニャを戀してゐるのよ。』

『何てばかな……』

『本當よ、今に分るから。』

ナターシャの豫言は的中した。婦人と同席する事を好まなかつたドーロホフが、急にしけ〳〵此の家を訪れ始めた。誰の爲めに來るのか、といふ疑問は間もなく解決された（誰もそんな事を口に出したものは無いが）。彼はソーニャの爲めにお百度を踏むのであつた。ソーニャも決してそんな事を口に出し得るやうな性質ではなかつたが、ほゞ此の事を感附いて、ドーロホフの姿を見る度に緋羅紗のやうに赤くなつた。

ドーロホフはしよつちうロストフ家で食事を共にし、彼等の出掛ける芝居は一度も外さなかつた。そしていつもロストフ家の人達の出席する、ヨゲール（舞踊教師）の許に催される adolescentes（青年男女）の舞踏會へも出掛けた。彼は常にソーニャ一人だけに注視した。そして彼の視線に接すると、單にソーニャだけが泳へ切れないでさつと顏を染めるばかりでなく、伯爵夫人やナターシャ迄が赤くなつて了ふ程であつた。

見受けたところ、此の不思議な猛者も、他の男を戀する美しい黑髮の少女の、打ち克ち難い魅力に惱まされてゐるらしかつた。

ロストフはドーロホフとソーニャとの間に何か新しい或る物を認めた。併し此の新しい關係が果して何であるか、彼ははつきり決めることが出事なかつた。「あの連中は何だかみんな誰かに惚れてるんだ。」と彼はソーニャとナターシャの事を考へた。けれどもソーニャやドーロホフに對しては、以前のやうに工合よく行かないので、彼は段々家にゐる事が少くなつた。

千八百六年の秋から、再びボナパルトとの戰爭に關する噂が、一同の口に上り始めた。しかも今度は去年より一層熱を帶びてゐた。千人の中から十人の新兵と、尙その上に九人の國民兵募集が發表せられた。到る所ボナパルトを呪ふ叫びが聞えた。莫斯科では目前に迫つた戰爭の話で持ち切りであつた。ロストフ家に取つて此の開戰準備に對する興味の全部は、唯ニコールシカが何と言つても莫斯科へ居殘らないで、降誕祭が濟むと直ぐ、ヂェニーソフと一緒に聯隊へ戻る積りで、ヂェニーソフの賜暇が終るのを待ち兼ねてゐる、といふ一事にのみ懸つてゐた。目前に迫つた出發も、浮れ歩く彼の邪魔をしなかつたのみか、却つて一層焚きつける位であつた。彼は一日の大部分を晩餐會、舞踏會、夜會などと家の外で過したのである。

一一

降誕祭の三日目に、ニコライは自宅で食事をした。こんな事は最近彼として珍しいことであつ

た。それは彼が一月六日の主顯節が濟んだら、もうヂェニーソフと共に歸隊するので、正式の送別會を催したのである。會食者は二十人ばかりであつたが、其の中にはドーロホフもヂェニーソフも交つてゐた。

ロストフ家に於ける愛の空氣、戀の雰圍氣が此の祭の數日間程、はつきり感じられた事は嘗てなかつた。「幸福の刹那を捕へよ、自らを强ひて戀せしめよ、自ら戀に陷れよ！これこそ人生に於ける唯一の眞なるもので、ほかの物は悉く無意義だ。此の世に於ける我々の仕事は、唯これ一つしかないのだ。」と此の雰圍氣が語つてゐるかのやうであつた。

ニコライはいつもの如く四頭の馬をへと〳〵にしたが、それでも必要な所や呼ばれた家へすつかり廻り切れないで、晩餐會の間際にやつと歸宅した。入るや否や、彼は家の中の緊張した戀愛の雰圍氣を認め且つ感じた。が其の他に、彼は座中の或る人々を支配してゐる、不思議なばつの惡さに感附いた。中でも殊にソーニャとドーロホフと伯爵夫人が(そしてナターシャも幾分か)氣の立つてゐる風であつた。ニコライはソーニャとドーロホフの間に、食事の前何か起つたのだな——と悟つたので、食事の間ぢう此の二人に對して、彼獨特の敏感を以て非常に優しく、そして注意深く應對した。此の祭の三日目の晩には、ヨゲール門下の吉例の舞踏會がある筈だつた。ヨゲールはいつも祭日には、屹度弟子達の爲めにかうした會を催す事になつて居た。

『ニコーレンカ、ヨゲール先生の所へ行つて？いらつしやいな、よう。』とナターシャが話し掛けた。『先生が兄さんに是非來て貰ひ度いつて仰しやつてよ、チェニーソフさんもいらつしやるの。』

『お嬢さんの命令でしたら僕は何處へでも行きますよ。』ロストフ家で冗談半分に、ナターシャの騎士の役を勸めてゐるチェニーソフがかう答へた。『面紗舞踊でも踊りますよ。』

『若し間に合つたら、僕はアルハーロフさんの所へ行く約束したんだ、あすこで夜會があるのでね。』とニコライは言つて、

『君は？』とドーロホフに訊いた。かう訊いた瞬間、これは全然必要のない事だつたと氣が付いた。

『さうさね、若しかしたら…』ソーニャの顏をちらりと見遣つて、ドーロホフは腹立たしげに素氣なく答へた。そして顏をしかめ乍ら、丁度倶樂部の宴會でピエールを見たと同じやうな目付で、又してもニコライの顏をじろりと眺めた。

「何かあつたんだ。」とニコライは考へた。そしてドーロホフが食事の終ると共に匆々立ち去つたので、なほこの想像を確めた。彼はナターシャを呼び出して、何うしたものかと訊ねた。

『わたし兄さんを探してたのよ。』ナターシャは彼の方へ駈け出して來てかう言つた。『わたしがあれ程言ふのに、兄さん何うしても本當にしなかつたでせう。』と彼女は勝ち誇つたやうに言つ

た。『あの人ソーニャに結婚の申込をしてよ。』

此の日頃ニコライは餘りソーニャの事を心に留めなかつたとは言へ、これを聞いた時、彼の心中で何か引き拐られたやうな氣がした。持參金を持たぬ孤兒のソーニャに取つて、ドーロホフは適當な、又ある意味に於ては立派な配偶者だから、伯爵夫人や世間の人の目から見たら、決して拒絶などすべき道理がない。これを聞いた時ニコライの心に起つた最初の感情は、ソーニャに對する忌々しさであつた。彼は「結構だよ。勿論子供の時の約束なんか忘れて、申込に應じるのが當り前さ。」と言つて遣りたい位な氣持になつた。けれども彼がそれを言ひ出さぬ先に…

『所がどうでせう、兄さん、ソーニャは拒絶したのよ、きつぱり拒絶しちやつたのよ！』とナターシャが言つた。『他に愛する人があるからつて！』彼女は一寸言葉を休めた後かう言ひ足した。

「さうだとも、俺のソーニャはさうより他に言ふ筈がないのだ！」とニコライは考へた。

『お母さまがどんなに賴んでも、ソーニャは諾かなかつたのよ、わたし分つてるわ、あの人は一旦言つた事を決して變へないから…』

『お母さんが賴んだつて！』と咎めるやうにニコライは言つた。

『え、。でもねえニコーレンカ、怒つちやいやよ、だけどわたし分つてるわ、兄さんはソーニャと結婚しないでせう。分つて、よ、なぜだかそりや知らないけれど、兎に角兄さんは確かにあの人

と結婚しないわ。』

『そんな事はお前に分りつこないよ。』とニコライは言つた。『併し、僕ソーニャと話さなくちやならない事がある。本當に何て可愛い、子だらう、ソーニャは！』と微笑し乍ら附け足した。

『全く可愛い人よ。わたし兄さんの所へ寄越して上げるわ。』

かう言つてナターシャは、兄に接吻するといきなり駈け出した。

一分間ばかり經つてから、ソーニャは慴えたやうな、何か惡い事をしたやうな、へどもどした樣子をし乍ら入つて來た。ニコライは彼女に近附いて其の手を接吻した。これが今度の歸省中、二人差向ひで自分達の戀を語り合つた最初である。

『Sophie』始めはおづ〳〵と、やがて次第に大膽に彼はかう切り出した。『若しあなたがあゝした立派な、ためになる配偶者を拒絶する積りだとすれば・・・實際あの男は美しい高尚な人物ですよ・・・あの男は僕の親友で・・・』

ソーニャは彼を遮つた・・・

『わたしもうお斷りしました。』と彼女は急いで言つた。

『若しあなたが僕の爲めに拒絶したのなら、僕は・・・』

ソーニャは再び彼を遮つた。そして祈るやうな、慴えたやうな目附で對手を眺めた。

『ニコラス、そんな事言はないで下さいな。』と彼女は言つた。

『いや、僕は義務として言はなくちやならない。こんな事は僕として suffisance（餘計な事）かも知れないが、兎に角言つた方がいゝ。若しあなたが僕の爲めに拒絶したのなら、僕は本當の事を打ち明けて言はなくちやならない。僕あなたを愛してゐる。恐らく誰よりも一番强く・・・』

『わたしそれで滿足ですわ。』と眞赤になつてソーニャは言つた。

『いゝやさうでない、僕はこれ迄幾人の女に戀したか知れない。そして今後も戀するだらう。併しあなたに對して感じてゐるやうな、友情と信賴と愛の感情は、他の誰に對しても抱いた事がありません。所が僕は未だ若い、それにお母さんも望んでゐらつしやらない事だし・・・まあ一口に言へば、僕何事も約束しません。だから、どうかドーロホフの申込をよく考へて見て下さい。』やつとの思ひで友達の名を發音し乍ら、彼はかう言つた。

『そんな事言はないで下さい。わたし何にも要らないんですもの。わたしあなたを兄さんとして愛してゐるのですから、其の他には何も要りませんわ。』

『あなたは天使だ。僕はあなたの愛を受ける價値がない。併し僕は唯あなたを欺さなければいいが、とそれが心配でなりませんよ。』

ニコライは今一度彼女の手を接吻した。

一二

ヨゲールの舞踏會は莫斯科中で最も愉快な夜會であつた。これは母親達がやつと習ひ覺えたばかりの踊(パー)を試みる、自分の娘達(アドルサント)を見乍ら言ふ事であつた。そして又倒れる迄踊り拔く娘達(アドルサント)や青年(ルサン)達自身の言ふ所でもあつた。そして又「馬鹿げては居るが、一つお慈悲で行つてやらう」といふ腹で出掛けて見て、其處で意外に優れた快樂を發見する、年頃になつた令孃や若い男達の言ふ所でもあつた。今年此の舞踏會で二組の結婚が成立した。ゴルチャコフ公爵家の美しい令孃が、二人とも婿金(なこがね)を見出して嫁入したのである。それでなほ此の舞踏會の評判が高まつた。此の舞踏會の特殊な點は、主人公も女主人公も居ないと云ふ事であつた。只人の好いヨゲールが藝術の法則に從つて、羽の飛ぶやうに輕々と足を擦つて駈け廻り乍ら、來客一同から授業切符を受け取つてゐるのみであつた。今一つ變つてゐるのは、此の會へやつて來る人は、始めて裾の長い着物をつけて、踊つたり騒いだりし度いが一心の、十三四の娘に限られてゐる事であつた。ごく僅かな例外を除いて、一同揃つて美しかつたし、或ひは少くとも美しく見えた。それ程皆のものは有頂天になつてほゝ笑み乍ら、可愛い瞳を輝かすのであつた。時とすると、質(たち)のいゝ生徒達が面紗舞(パードシャー)踏(ル)を踊る事もあつた。中でもナターシャは一段質のいい方で、其の優美な姿勢は群を拔いてゐた。

併し今度の會では蘇國曲(エコサーズ)と英國曲(アングレーズ)と、そして此の頃やつと流行り始めた波蘭曲(マズルカ)ばかり踊つた。

會場はヨゲールの手でベズーホフ家の廣間が借りられた。そして此の會は非常な成功だとの噂であつた。美しい女の子が大勢居たが、中でもロストフ家の令孃は優れて美しい方であつた。彼女等は二人とも特に仕合せらしく快活であつた。此の晩ソーニャはドーロホフの申込み、それに對する拒絶、ニコライとの打明け話などに呼び醒された誇が一杯に溢れて、未だ家にゐる時分からそこいら中跳ね廻つて、小間使に頭を梳(す)かせなかつたが、今でも波のやうに打ち寄せる悦びが、胸の底から浸み出て輝くのであつた。

ナターシャは始めて長い着物を着て、本式の舞踏會へ出席したといふのが劣らず自慢で、なほ一倍幸福を感じて居た。二人共ばら色のリボンの付いた、白いレースの着物を着てゐた。

ナターシャは廣間へ入つた瞬間から、直ぐ戀する人となつて了つた。それも特に誰を戀するといふ譯でなく、只矢鱈にみんな戀しい。刹那々々目に入る人に、すぐ戀して了ふのであつた。

『あゝ、本當にいゝわねえ！』しよつちうソーニャの傍へ駈けて來て、ナターシャはかう言ひ續けた。

ニコライとヂェニーソフは保護者めいた優しい目付で、踊り狂ふ人々を見廻し乍ら、廣間から廣間へ歩いて居た。

『何て可愛いんだらう、美人になるね。』とヂェニーソフは言つた。

『誰が？』

『伯爵令嬢ナターシャさ。』ヂェニーソフは答へた。

『實に巧く踊る、何といふ優美な姿勢だらう！』暫らく無言の後、再び彼はかう言つた。

『一體君は誰の事を言つてゐるんだね？』

『君の妹さんの事さ。』腹立たしげにヂェニーソフはかう怒鳴つた。

ロストフは薄笑ひした。

『Mon cher comte, vous êtes l' un de mes meilleurs écolier, il faut que vous dansiez（伯爵、あなたは私の秘藏弟子の一人ですから、是非踊つて頂かなくちやなりません）』小柄なヨゲールはニコライに近附きつゝかう言つた。『御覽なさい、隨分可愛い娘さんが大勢集つたでせう！』彼はまた同樣に、曾て自分の弟子であつたヂェニーソフに向つて、同じ事を賴んだ。

『いゝえ、先生、僕は壁の傍に坐つてゐませうよ。』とヂェニーソフは答へた。『實際僕がどんなに怠(なま)けものだつたか、覺えてゐらつしやるでせう？……』

『おゝ、中々どうして！』ヨゲールはあはてゝ彼を慰めるやうに言つた。『あなたは唯少し不注意だつただけですよ。あなたは才能(タラント)を持つてゐらつしやいました、えゝ才能(タラント)を持つてゐらつしや

いました。』

やがて樂隊は此の頃流行り始めた波蘭曲(マズールカ)を奏し出した。ニコライはヨゲールの乞をもだし兼ねて、ソーニャに對手を申し込んだ。ヂェニーソフは老婦人連の傍に腰を下し、佩刀に頰杖ついて足拍子を取り乍ら、何やら愉快さうに話してゐた。そして時々踊り廻る青年少女を見遣り乍ら、しきりに老婦人連を笑はせるのであつた。

ヨゲールは最初自分の誇りなる、祕藏弟子のナターシャと一緒に踊つた。短靴を穿いた少さな足を柔く優しく操り乍ら、臆した氣味ではあるが、一生懸命に舞歩(バー)を調へようとするナターシャと共に、ヨゲールは第一番に廣間を飛び廻り始めた。ヂェニーソフはナターシャから目を放さなかつた。そして自分が踊らないのは出來ないばかりでなく、氣が進まないからだと言ひたげな樣子をして、軍刀で拍子を取つて居た。舞踏の半ば頃、彼は傍を通りかゝつた。ロストフを呼び寄せた。

『これはまる切り違ふ。一體これが波蘭のマズールカかい？ 併し兎に角ナターシャさんの踊はうまい。』

ロストフはヂェニーソフが波蘭で、純粹のマズールカの妙技を以て鳴らした事を知つてゐるので、ナターシャの傍へ駈け寄つて、

『おい、行つてヂェニーソフに申し込めよ。踊れるんだ！素敵だよ！』と言つた。

再び自分の番が來た時、ナターシャは立ち上つた。そして結びリボンのついた女靴をせか〳〵と踏み交しつゝ、ヂェニーソフの坐つてゐる片隅を指して、只一人おづ〳〵廣間を横切つて駈け出した。彼女は一同が自分の方を眺めて、待ち構へてゐる事を知つた。ニコライはヂェニーソフとナターシャがほゝ笑みつゝ、爭つてゐるのを見た、ヂェニーソフは辭退し乍らも、嬉しさうに微笑してゐた。彼は二人の傍へ駈け寄つた。

『ね何うぞ、ヂェニーソフさん。』とナターシャは言つて居た、『出ませうよ、後生ですから。』

『一體どうしたのです、許して下さい、お嬢さん。』とヂェニーソフは言つた。

『おいヴーシャ、いゝぢやないか。』とニコライが口を添へた。

『まるで小猫のヴシカがねだられてゐるやうだ。』冗談交りにヂェニーソフがかう言つた。

『わたし一晩中でもねだりますわ。』

『此の妖姫には僕も思ふ存分にされるよ!』と言つてヂェニーソフは軍刀を外した。

彼は椅子の間を縫つて前へ出ると、ナターシャの手を固く握つて頭を反らし、合圖を待ち乍ら片足後ろへ引いた。ヂェニーソフは、たゞ馬に乘つた時とマズールカの時だけ、脊の低いのが目立たなかつた。そして彼自身で自負してゐるやうな、すつきりした男前に見えた。合圖の拍子を聞くと同時に、彼はふざけたやうな、勝ち誇つたやうな目付で斜めに對手の顔をちらと眺めた。と、

思ひ掛けなく片足とんと踏んで、まるで毬のやうな彈力を以て床から跳ね上り、自分の後ろに對手を曳き廻し乍ら、圈に沿うて駈け出した。

彼は片足で音も無く廣間の半ばを駈け拔けた。まるで目の前にある椅子が見えないで、眞直に其の上へ乘り掛らうとしてゐるやうに思はれた。併し不意に拍車をかちりと鳴らし、足を割つて踵で立ち止つた。かうして一瞬の間立つてゐたが、忽ち凄じい拍車の響と共に、とんと一つ兩足で床を踏んで、電光の如く廻轉した。そして左足と右足をかち〳〵と鳴らし乍ら、再び圈に沿うて飛び始めるのであつた。ナターシャは彼の爲さんと欲する所を悟つて、自分でも何をしてゐるのやら分らずに、彼のするが儘に引かれて行つた。彼は或ひは右の手で、或ひは左の手で彼女をくるくる廻したり、或ひは跪いてゐてナターシャに自分の周圍を回らせたり、或ひは又飛び上つてまるで息もつかずに、家中の部屋を駈け拔けようと思つてゞもゐるやうな、凄じい勢で前の方へ突進したりした。と思ふと、不意に又立ち止つて、新しい奇拔な段落を付けるのであつた。元の場所へ戻ると、烈しく對手をきり〳〵と廻して置いて、彼はナターシャに會釋し乍ら、かちりと拍車を鳴らした。ナターシャは彼に跪く事すらしなかつた。彼女は對手が誰か分らないと云つたやうな風で、けゞんさうに彼を見つめるのであつた。

『一體これは何ですの?』彼女はやつとかう言つた。

ヨゲールは此のマズルーカを正則のものと認めなかつたけれど、一同はヂェニーソフの妙技に醉はされて、絶えず彼に對手を申し込むのであつた。老人連は微笑し乍ら波蘭の事、古い懐しい時代の事などを話し出した。ヂェニーソフは舞踏の爲めに眞赤になつた顔を手巾で拭き乍ら、ナターシャの傍へ腰を下して、一晩中彼女の傍を離れなかつた。

一三

それから二日の間、ロストフは自分の家にドーロホフを見なかつたし、訪ねて行つても留守であつた。三日目に彼はドーロホフから手紙を受け取つた。

『僕は御承知の原因によつて、今後君の家へ出入しない決心だ。そして軍隊へ行かうと思つてゐる。そこで今夜は親友を招いて送別の宴を張らうと思ふから、英吉利ホテルへ來て呉れ給へ。』

ロストフは其の晩九時過ぎに芝居を出て(それは家族の者やヂェニーソフと共に見物に出掛けたのである)、英吉利ホテルへやつて來た。彼は直ぐ此の晩ドーロホフの借りた、ホテルの一番上等な間へ案内された。二十人ばかりの同勢が卓の周りに集つてゐて、ドーロホフは二本の蠟燭の間に座を占めてゐた。卓の上には金貨や紙幣が轉がつてゐる。ドーロホフが銀行をやつてゐるのであつた。ソーニャに對する結婚申込とその拒絶後、ニコライは未だドーロホフと會はなかつたの

で、二人が顔を合せる時の事を想像する度に、彼は一種の心苦しさを感ずるのであつた。

明るく冷たいドーロホフの目は、未だ戸口に立つてゐるロストフを迎へた、恰も先程から待ち兼ねてゞもゐたやうに。

『暫くだつたね、』と彼は言つた。『有難う。よく來て呉れた。一寸待つて呉れ給へ、僕ついでに終ひ迄やつてしまふからね。其の中にイリューシュカ(イリヤア)が合唱隊を連れて來る筈だ。』

『僕一寸のつもりで寄つて見たんだ。』とロストフは赤い顔をし乍ら言つた。

ドーロホフはそれには答へないで、

『君も賭けていいぜ。』と言つた。

此の瞬間ロストフは曾てドーロホフと交(かわ)した事のある、奇怪な會話を想ひ出した。『僥倖を望んで勝負するのは馬鹿な奴に限る。』と其の時ドーロホフが言つた。

『それとも君は僕と闘ふのがおつかないのかい?』今度は對手の心中を見抜いたやうに、ドーロホフはかう言つて薄笑ひをした。

ロストフは此の薄笑ひの陰から、ドーロホフが倶樂部に於ける宴會の時と、同じやうな氣分になつてゐるのを見抜いた。それは全體に彼が日常茶飯事に飽き〳〵して、何かしら奇抜な(主として慘忍な)行爲を以て、其の中から脱け出す必要を感じた時、抱くやうな種類のものであつた。

ロストフはばつが悪かつた。何かドーロホフの言葉に應じ得るやうな、適當な冗談を心の中で探したが、容易に目付からなかつた。ロストフが答へない先に、ドーロホフはひたと對手の顔を見据ゑつゝ、ゆつくりと間を切つて、一同の耳に聞えるやうにかう言つた。

『君覺えてゐるかい、いつか二人で勝負の話をした事があつたらう……僥倖を恃んで歌留多をする奴は馬鹿だ、屹度勝つといふ決心で掛らなくちやあ駄目だつてね。今僕それをやつて見ようと思ふんだ。』

「僥倖を恃んでやつて見るか、それとも眞劍にやるか?」とロストフは考へた。

『まあま、やらないで置く方がいゝさ。』とドーロホフは言つて、新しい歌留多の封をびり〳〵と引き裂き乍ら附け足した。『諸君、銀行!』

金を前へ押しやると、ドーロホフは切りに掛つた。ロストフは其の傍に腰かけて、初めの中は仲間に入らない積りでゐた。ドーロホフは彼を尻目にかけて、

『何うしてやらないんだね?』と言つた。

不思議なるかな、ロストフは何となく自分も札を取つて、僅かの金を賭け、勝負を始めなくてはならぬやうな氣がした。

『僕、金が無いんだよ。』とロストフは言つた。

『信用するさ!』

ロストフは五留賭けて敗けた。又賭けて又敗けた。ドーロホフは續け樣にロストフの札を十枚「殺した」—即ち負かしたのである。

『諸君、』暫く勝負をした後に彼は言つた。『どうか金を札の上に置いて呉れ給へ、でないと僕勘定を間違ふかも知れないから。』

すると仲間の一人が、自分も信用して呉れていゝ、筈だと言つた。

『信用はしても構はないけれど、只間違ふのが心配なんだ。どうか札の上に金を載せて呉れ給へ。』とドーロホフは答へて、『君心配する事はいらないぜ。君とは後で勘定するから。』とロストフに向つて附け足した。

勝負は續いた。給仕は絶間なく三鞭酒を配つて歩いた。

ロストフの札は悉く討死した。彼の負けは既に八百留と記された。彼は又一枚の札の上に、八百留と書きかけた。が、給仕が三鞭酒を差し出した時、ふと考へ直して普通の高——二十留に書き換へた。

『止し給へ。』ロストフの方を見て居ないやうな風であつたのに、ドーロホフは急にかう言つた。

『其の方が取り戻すのに早いぜ。それとも僕が他の人のは生かすけれど、君のは殺してしまふも

んだから、それで君は僕を恐れてるのかね？』と又同じ事を言つた。

ロストフは其の言に從つて、一旦書いた八百留をその儘にして、片隅の千切れたハートを床から拾ひ上げ、その札に賭けた。彼はそれを後になる迄よく覺えてゐた。ハートの七に折れた白墨を以て、丸い眞直な數字で800と書いた。差し出される儘に暖い三鞭酒の杯を呑み乾して、ドーロホフの言葉に微笑を見せ乍ら、心臓の鼓動の止るやうな思ひで『七』の當りを待ち兼ねつゝ、彼は歌留多の束を持つてゐるドーロホフの手を見詰め始めた。此のハートの七の生き死には、ロストフに取つて非常な大事件であつた。

先週の日曜に父イリヤー伯爵は息子に二千留與へた。金錢上の苦しい問題を口にする事の嫌ひな彼は、たゞ單にこれは五月迄に與へらるべき最後の金だから、今後はも少し經濟的にやつて呉れと賴んだだけであつた。ニコライはこれでも多過ぎる位だ、誓つて春まで金を請求しないと答へた。然るに今此の金の中殘りは僅か千二百留しかない。從つて此のハートの七の敗北は、單に千六百留の負けを意味するのみならず、誓の言葉に背く必要さへ生むのである。彼は心臓の凍るやうな思ひで、ドーロホフの手を見詰め乍ら考へた。「さあ早く俺に此の札を呉れ。俺は帽子を取つてさつさと家へ歸つて、ヂェニーソフやナターシャやソーニャと夜食をする。そして今後俺はもう決して歌留多を手にしない。」此の時彼の家庭生活――ペーチャを對手のいたづら、ソーニャとの會話、

ナターシャとの二部合唱、父を對手のピケート（一種のカルタ遊び）、ボーヴル街の家の安靜な寢床、これ等の物が疾うに過ぎ去つた、失はれた尊い寶か何ぞのやうに、非常な力と美しさとを以つてまざ〳〵と彼の腦裏に浮んで來た。馬鹿々々しい偶然が、七の札を先に左へ置かないで、右へ置くと云ふ事のために、新たに味得され、美しく照らし出された彼の幸福を、すつかり奪ひ取つて、未だ經驗したこともない、氣味の惡い不幸の淵へ彼を突き落す――などといふ事は到底考へる事が出來なかつた。そんな事はあらう筈がない、とは言へ彼は心臓の凍るやうな思ひで、ドーロホフの手の運動を待ち設けてゐた。襯衣の陰から毛のちら〳〵する骨太の赤い二つの手は、歌留多の束を下へ措いて、差し出されたコップとパイプを取り上げた。

『では君、僕と勝負するのを恐れないんだね？』とドーロホフはもう一度繰り返した。そしてこれから面白い話を始めるぞと云ふやうな風付で、歌留多を摺いて椅子の脊に反り返り乍ら、微笑を帶びてゆつたりと話し出した。

『ねえ、諸君、これは人から聞いた話なんだが、僕はいかさま師だつて評判が、莫斯科に擴まつてるさうだぜ。だから僕に對して、も少し愼重の態度を取るやうに忠告するよ。』

『さあ、切り給へつたら！』とロストフが言つた。

『いやはや、莫斯科の伯母さん連にやとてもやり切れないよ！』とドーロホフは微笑を含みな

がら、歌留多に手を掛けた。

『やあッ！』と、ロストフは兩手で頭を抱へつゝ、殆ど叫ばないばかりにかう言つた。彼に必要な『七』は、もう束の中の一番上に載つてゐたのである。彼は自分に拂へるより以上敗けて了つた。

『だが君、あんまり向う見ずな事をしない方がいゝぜ。』ちらとロストフを尻目にかけてかう言ひ乍ら、ドーロホフは切り續けるのであつた。

一四

三十分の後仲間の多數は、もう冗談半分に自分の勝負に對してゐた。

勝負は一切ロストフ一人に集中されたのである。もう千六百留どころか、彼の負として長い數字の列が書き附けられてあつた。彼はそれを一萬まで勘定したが、今もう一萬五千留を超えてゐるといふ事は、彼も漠然と想像してゐた。所が實際に於て、此の數字は既に二萬留を超過してゐるのであつた。ドーロホフはもう世間話を聞きもしなければ、自分でもしようとしないで、只ロストフの手の動きを一心に見詰め乍ら、時々ちら〳〵と書附けの方を覗いて見た。彼はこの書附けの數字が四萬三千留になるまで勝負を止めまいと決心した。何故彼が此の數を選んだかといふに、彼の年とソーニャの年を合計したものが、四十三になつたからである。

ロストフは兩手で頭を支へつゝ、樂書をしたり、酒をこぼしたり、歌留多の散らばつたりした卓に向つて坐つてゐた。たゞ一つの惱ましい想念が彼の心を去らなかつた。それは例の襯衣(シャツ)の下から毛の覗いてゐる、骨太の赤い手が——彼の愛してもゐれば憎んでもゐる此の二つの手が、自分の生殺與奪の權を握つてゐるといふ事であつた。

「六百留(ルーブリ)、ポイント、四分の一賭け、九……駄目だ、到底取り返す事は出來ない！あゝ家にゐたらどんなに愉快だつたらうなあ……や、兵隊(ジャヅク)だ……こんな馬鹿な事があるものか！何だつてドーロホフは俺をこんな目に合すんだらう？」ロストフはこんな事を考へたり、又急に想ひ出したりした。時々彼は大きく賭けて見たが、ドーロホフはそれを敗かすのを遠慮して、自分で賭金の高を指定するのであつた。ニコライは彼の意に從つた。時に彼は曾てアムシュテーテンの橋上でしたやうに神を祈つたり、時には卓の下にある折れくたになつた歌留多の束の中から、第一番に自分の手に入る札が、自分を救つて呉れるのだと自ら慰めたり、時には上衣の飾紐の數を勘定して、それと同じ星數の札に、今まで負けただけの金を賭けようかとあせつたり、時に助けを求めるやうに他の仲間を見廻したり、時に冷やかなドーロホフの顔に見入つて、彼の心中を洞察しようと努めたりした。

「此の敗北が俺に取つて何を意味するかつてことは、此の男だつて知てゐる筈なんだ。此の男が俺の破滅を望む譯がないぢやないか？此の男は俺の親友だつたのだ。俺は此の男を愛してゐたぢやないか・・・併し何も此の男が悪いのぢやない。此の男の運がいゝんだから仕方がない。併し俺も決して悪くない。」と彼は考へた。「俺は何一つ悪い事をした覺えはない。一體俺が誰か人を殺したり、人に恥を搔かしたり、人の不幸を望んだりした事でもあるか？何の爲めにこんな恐しい不幸が降つて來たのだらう？そして此の不幸はいつ始つたんだらう？つい先程俺は百留(ルーブリ)だけ勝つて、お母さんの命名日のお祝ひに手箱を買つて、そして家へ歸る積りで此の卓の傍へよつたのだ。其の時俺は非常に幸福で、自由で、愉快だつた！而も俺は其の時自分がどれ程幸福だか知らなかつたのだ！あの幸福はいつ終つて、そして此の新しい恐しい狀態はいつ始つたのだらう？此の變り目の兆(しるし)は何だつたらう？俺はずつとこの卓の前の此の席に坐つてゐて、今と同じやうに歌留多を擇(よ)り出しては前へ出して、此の骨太いすばしつこい手を眺めて居たんだ。一體いつの間にこんな事に成つて了つたのだ？併し一體何うなつたと云ふんだ？俺は健康で、元氣旺盛で、さつきと一向變りのない人間だ、そしてさつきから一つ處に坐つてゐるではないか。いや、そんな事のあらう筈がない！確かにこんな事は只の冗談で終るに違ひない。」

部屋の内はさして暑くもないのに、彼は赤い顔をして、體中汗ぐつしよりであつた。其の顔は

物凄く、而も惘れであつた。殊に落着きを裝はうと空しく努力してゐるだけに、なほ悲慘であつた。

書附けは愈々四萬三千といふ運命的(フェータル)の數に達した。ロストフがたつた今勝つた三千留の、四分の一賭けで次の歌留多を準備した時、ドーロホフは歌留多の束でとんと卓を叩いて、其の束を傍へ退(の)けた。そして白墨を取り上げると、持前の嚴格なごつ〳〵した筆蹟で、白墨を折り乍らロストフの書附けのしめに掛つた。

『夜食だ、もう夜食の時刻だ。あゝジプシィ連もやつて來た！』

實際ジプシィ訛のある髪の黑い男や女の一群が、寒い外から入つて來て何やら喋つてゐる。ニコライは何もかもお了ひだと悟つた。併しさりげない聲で、

『どうだ、もう一番やらないか？僕は面白い歌留多を用意してゐるんだが。』さも〳〵勝負その物の樂しさが、自分に取つて何より興味があるやうな調子でかう言つた。

「もう駄目だ、俺の身は破滅だ。」と彼は考へた。「かうなつたらどんと一發額を射ち拔く——それより外に仕方がない。」それと同時に彼は愉快さうな聲でかう言つた。

『さあ、もう一勝負。』

『よし、』とドーロホフは勘定を終つてから答へた。『よし、二十一留(ルーブリ)の賭けだよ。』かつきり四

萬三千といふ數の邪魔をする、二十一のはしたを指さし乍ら、彼はかう言つて歌留多を取つて切りに掛つた。ロストフは素直に歌留多の角を曲げて、用意してあつた六千の代りに、二十一といふ數字を一生懸命に書いた。

『僕アどちらでも同じ事なんだよ。』と彼は言つた。『只君が此の十を僕に寄越すか、それとも殺して了ふか、それが知り度いんだからね。』

ドーロホフは眞面目に札を切り始めた。あゝ、此の瞬間ロストフは、あの指の短い、襯衣の下から毛の覗いてゐる、赤みがゝつた手――自分に對して生殺與奪の權を握つてゐる此の手を、どんなに憎惡の眼を以つて眺めた事であらう…『十』の札は彼に與へられた。

『伯爵、君の勘定は四萬三千留になりましたよ。』と言つてドーロホフは伸びをし乍ら、卓の傍から立ち上つた。『だが、こんなに長く坐り通してるとくたびれるね。』

『さう、僕も疲れちやつた。』とロストフは言つた。

ドーロホフはこんな時冗談を言ふのは不作法だ、といふ事を彼に悟らせようとするかの如く、急に彼を遮つた。

『伯爵、金は何時頂けるでせうか？』

ロストフはかつと赤くなつて、ドーロホフを次の間へ呼び出した。

『僕は今急に全額を支拂ふ譯に行かないから、兎に角手形を取つといて呉れないか。』と彼は言つた。

『ねえ、ロストフ君、』晴れ〴〵とほゝ笑んでロストフの目を見詰め乍ら、ドーロホフはかう言つた。『戀に幸福なものは、歌留多で不幸だ、といふ諺を知つてるだらう。君の從妹は君に惚れ込んでるね。僕知つてるよ。』

「おゝ！こんな男に自分の生殺與奪の權を握られてるのを自覺するとは、何といふ恐しい事だ。」とロストフは考へた。此の敗北の報知が父母にどんな打擊を與へるかといふ事は、ロストフもよく承知してゐた。此の出來事から免れる事が出來たら、どんなに幸福かといふことも分つてゐた。又ドーロホフは此の恥辱と悲しみから自分を救つて呉れるものが、何であるかといふ事も心得てゐる癖に、まるで猫が鼠を玩ぶやうに自分を玩んでゐる――といふ事も彼はよく承知してゐた。

『君の從妹は…』とドーロホフは言ひ掛けた。が、ニコライはそれを遮つた。

『僕の從妹なんか何の關係もありやしない、そんな事は少しも言ふ必要がない。』と彼は憤怒の餘りかう叫んだ。

『では、いつ受け取れますがね？』とドーロホフが訊ねた。

『明日！』と言つてロストフは部屋を出た。

一五

作法を亂さずに『明日』といふのはさして困難でなかつた。併し一人で家へ歸つて、妹や弟や父母の顔を見、一切を自白して金を請求するのは恐しい事であつた。而も其の金はあの立派に誓つた言葉に對しても、請求する權利を持つてゐないのだ。

家では未だ寢てゐなかつた。ロストフ家の若い人達は、芝居から歸つて一寸夜食を濟すと、ピアノの傍に腰を落ち着けた。ニコライが廣間へ入るや否や、此の冬彼の家を支配してゐる、かの愛に充ちた詩的な雰圍氣が彼を摑んだ。今この雰圍氣は、ドーロホフの結婚申込とヨゲールの舞踏會の後、夕立の前の空氣のやうに、なほ一層ソーニャとナターシャの頭上に、濃くなりまさつたやうに思はれた。二人が芝居見物に着て行つた水色の着物は、實に可愛く見えた。二人共自分でそれを知つて居るので、さも幸福さうにほゝ笑み乍ら、ピアノの傍に立つてゐた。ゼーラはシンシンを對手に客間で將棋をさしてゐた。老伯爵夫人は息子と良人の歸りを待ちかねて、自分の家にかゝつてゐる貴族出の老女と共に、パシャンス（カルタの一人遊戯）をやつてゐた。ヂェニーソフは髪を振り亂し目を輝かし乍ら、片々の足を後ろへ引いてピアノに向ひ、短い指で鍵板を打ち乍ら何やら彈いてゐた。そして眼を剝き乍ら、持前の小さな、しは嗄れた、けれども正確な聲で、自作の詩『妖

姫』を唱つてゐた。彼はそれに適當な譜を發見しようと苦心してゐるのであつた。

聞かまほし　わが妖姫　何の力か
捨てられし　絃の邊に　我を牽くなる
なにの火か　わが胸に　汝は落せし
ゆび〳〵に　漲るは　何のよろこび

彼はぴつくりした、而も幸福げなナターシャの上に、瑪瑙のやうな目を輝かせつゝ、熱情の溢れる聲で唱つた。

『いゝ事ね！お上手だわねえ！』とナターシャは叫んだ。『も一つ何か二部合唱でね。』ニコライに氣も附かないで彼女はかう言つた。

「此の人達はいつも同じだ。」ゼーラと母と老女の姿が見える客間を覗き乍ら、ニコライはかう思つた。

『おや！ニコーレンカ、やつとの事で！』

ナターシャは彼の傍へ駈け寄つた。

『お父さんは家かい？』と彼は訊いた。

『兄さんが歸つて來なすつて、わたし本當に嬉しくつてよ！』兄の問に答へもせずに、ナター

シャはかう言つた。『わたし達全く面白くて堪らないのよ。ヂェニーソフさんがわたしの爲めに、もう一ン日出發を延して下すつたんですもの、兄さん知つてゝ？』

『いゝえ、お父さんは未だお歸りになりません。』とソーニャが言つた。

『コーコー、歸つてお出でだね、わたしの所へおいでなさい、さあ。』といふ伯爵夫人の聲が客間から聞えた。

ニコライは母に近寄つて其の手を接吻し、無言の儘卓に向つて座を占め乍ら、歌留多を彼方此方と並べる母の手を眺め始めた。廣間からは絶間なき笑聲と、ナターシャを說き伏せようとする、人々の樂しげな聲が響いて來た。

『ね、いゝでせう、いゝでせう。』とヂェニーソフは叫んだ。『もう言ひ拔けは出來ません、あなたの唱ひ物はバルカローラ（ゴンドラの船夫の唄に似たる唱歌の一種）ですよ、後生だから、ね。』

伯爵夫人は無口な息子を返り見た。

『お前はどうしたの？』と母はニコライに訊いた。

『いゝえ、何うもしません。』まるで此の千遍一律な問には飽き〳〵した、といふやうに彼は答へた。『お父さんは直ぐ歸つていらつしやるか知らん？』

『とわたしは思ひますがね。』

「みんな矢張りいつもと同じだ。みんな何にも知らないで居るのだ！あゝ俺は身の置き處がない！」とニコライは考へて、再びピアノの置いてある廣間へ出て行つた。

ソーニャはピアノに向つて、特にヂェニーソフの氣に入つたバルカローラの序曲（プレリユード）を、これから彈かうといふ所であつた。ナターシャは唱ふ身構へをしてゐた。ヂェニーソフは有頂天になつたやうな目附で彼女を眺めてゐた。

ニコライは部屋の中をあちこちと歩み始めた。

「ナターシャを唱はせるなんて、ふん、いゝ好奇（すき）だ！何うしてあれが唱へるものか？　面白い事なんかちつとも有りやしないぢやないか！」とニコライは考へた。

ソーニャは序曲の第一音を立てた。

「あゝ、俺は破滅した人間だ、俺は陋劣な男だ。此の額を拳銃（ピストル）で射ち拔く——もうそれより外仕方がない。歌なんか唱ふどころの話か。」と彼は考へた。「出て行かうか？併しどこへ？いや、どつちだつて同じ事だ、勝手に唱はして置くさ！」

ニコライは沈んだ樣子で部屋を歩き續け乍ら、對手の視線を避けるやうにして、ヂェニーソフと二人の少女を偸み見るのであつた。

「ニコーレンカ、あなたどうなすつたの？」一心に彼の方へ注がれて居るソーニャの視線は、か

う訊くやうに見えた。彼女は直ぐ彼の身の上に何事か起つたのを見て取つたのである。ニコライは顔を反けた。

ナターシャも持前の敏感から、同じく一瞬にして兄の心持を悟つた。悟りはしたけれど、此の時彼女自身の氣分が恐しく浮き〳〵して、悲哀、憂愁、譴責といつた風の物からすつかり離れてゐたので、(若い人にはよくある事だが)彼女はことさら自分で自分を欺いた。

「いや、わたしは今他人の悲みに對する同情で、自分の樂しさを傷けるには、あまり愉快すぎる。」と直感して、彼女は心の中でかう言つた。「さうだわ、屹度わたしの考へ違ひだわ、兄さんもわたしと同じやうに愉快な筈だ。」

『さあ、ソーニャ』と言つて彼女は廣間の眞中へ出た。彼女の意見によると、其處が一番反響(レゾナンス)のいゝ處であつた。

踊子などのするやうに心持首を反らし、死んだものゝやうにだらりと手を垂らして、ナターシャは力の充ち溢れた足取りで、踵と爪先を交る〳〵地に附けながら、部屋の眞中を一廻りして立ち止つた。

「ほら、これがわたしよ!」と言ひたさうな風附であつた。そしてこれは彼女を一心に見守つてゐる、ヂェニーソフの夢中になつた目附に對する返事のやうでもあつた。

「あいつ何が嬉しいんだらう?」妹を見てニコライはかう思つた。「よくまあ退屈でそしてきまりの惡くない事だ!」

ナターシャは唱ひ出した。咽喉は擴り、胸は張り、目は眞面目な表情を帶びて來た。此の瞬間彼女は何事も、誰の事も考へなかつた。そして微笑を浮べてゐるやうな口からは、音(おん)の波が流れ出るのであつた。其の音はどんな人でも同じ間を置いて、同じ時間に發し得るものであつたが、併しそれは幾度となく人を冷りとさせたり、又慄へ附きたい程感動させたり、涙さへ催させるやうな種類の音であつた。

ナターシャは今年の冬始めて眞面目に唱ふやうになつた。それはヂェニーソフが彼女の歌に隨喜の涙を流したのが、重なる動機であつた。彼女の唱はもう子供らしくなかつた。以前のやうに滑稽な、子供じみた、一生懸命な所が彼女の唱歌に無くなつた。とは言へ、造詣の深い人達が彼女の唱歌を聞いて、口を揃へて批評する如く、彼女は未だ上手といふ程の唱ひ手でなかつた。

『未だ洗練されてないが、併しい、聲だ。大いに洗練しなくちやならん。』とすべての人が言つた。けれど皆の者がかう言ふのは、普通彼女の歌聲が消えて了つてから、ずつと後の事であつた。此の息繼ぎの不正確な、音から音へ移る時に無理のある「未だ洗練されてない」聲が響いてゐる間は、造詣の深い人々さへ何とも批評しないで、唯この洗練されてない聲を樂しみ、今一度この聲

を聞く事を望むばかりであつた。彼女の聲の中には如何にも處女らしいうぶな情緒と、自分の力量に關する無自覺と、未だ洗練されてない天鵞絨のやうな滑らかさがあつた。それ等のものが藝の未熟と渾然融合して、此の聲を傷けぬやうに匡正するのは不可能だ、と思はれる位であつた。

「これは一體どうした事だ？」妹の聲をふと耳にして目を大きく見開きつゝ、ロストフは考へた。「彼女はまアどうしたんだらう？今夜のあの上手な唱ひ方はどうだ！」と、突然彼に取つて此の全世界が次の節、次の句に對する期待の情に凝集した。そして世界のすべてが三拍子に分割されたやうになつて了つた。「Oh, mio crudele affetto（おゝわがつれなき戀よ）……一、二、三……一、二……三……一……Oh, mio crudele affetto……一、二、三……一……え、糞ッ、我々の生活なんて馬鹿げ切つたもんだ！」とニコライは考へた。「不幸も、金も、ドーロホフも、憎惡も、名譽も、何もかも下らないことだ……ほら、あれが本當の事なんだ……おゝナターシャ、おゝ豪いぞ！感心だ！……待てよ、あの si をどんなにこなすかな？巧くやつたぞ！有難い！」此の si を強調する爲めに、彼は自分でも氣附かないで、高半音で第二聲を巧く唱ひこなした。「しめたぞ！實にいゝ！一體今のは俺が唱つたのかしら？何て氣持のいゝ事だらう！」と彼は考へた。

あゝ！此の半音の如何に顫々と響いた事よ、そしてロストフの體内に在る美しい或る物が、如何にそれに共鳴した事よ！而も此の或る物は全世界の一切から獨立し、全世界の一切を超越して

ゐた。「歌留多の負けが何だ、ドーロホフが何だ、誓ひが何だ！何もかも無意味ぢやないか！人を殺しても盜みをしても、矢張り幸福であり得るぢやないか……」

一六

此の晩のやうにロストフが音樂の快感を身にしみて經驗したのは、もうずつと久しい前から無い事である。けれどナターシャが『バルカローラ』を唱ひ終るや、現實は再び彼の心に甦つた。彼は何も言はないで廣間を出て、階下にある自分の部屋へ赴いた。十五分ばかり經つて、老伯爵は愉快な滿ち足りた樣子で倶樂部から歸つて來た。ニコライは父の歸邸を聞き附けると、直ぐ其の方へ出掛けて行つた。

『うん、どうだ、面白かつたかね？』イリヤー伯爵は悅ばしげに誇らしく、息子にほゝ笑み掛け乍らかう言つた。

ニコライは『えゝ』と言はうとしたが、出來なかつた。彼は殆ど慟哭しないばかりであつた、伯爵は息子の樣子には氣も付かないで、煙草をふかしてゐた。

「くそッ、どうせ免れぬ所だ！」とニコライは最初にして最終の決心をした。そして自分でも卑劣に感じられる程思ひ切つて白々しい調子で、まるで町へ出掛けるのに馬車か何かを頼むやう

に、彼はいきなり父に向つてかう言つた。

『お父さん、僕一寸用事があつて來ました。危く忘れる處でしたよ。實は金が入るんです。』

『おや〳〵、』今殊に機嫌のよい父はかう言つた。『だから俺がとても足りやしないと言つたんだよ。澤山かな?』

『非常に澤山なんです。』ニコライは愚かな白々しい薄笑ひを浮べつゝ、赤い顔をしてかう言つた。彼は此の笑を後々までも自ら許す事が出來なかつた。『僕歌留多で少しばかり負けました、いや、澤山なのです、つまり非常に澤山といつてい、位です、四萬三千留(ルーブリ)。』

『何だつて?誰に?……冗談言ふな!』と伯爵は叫んだ。よく老人に見受けられる癖として、頸から後頭部へかけて卒中の發作みたいに赤くなつた。

『僕明日支拂ふ約束をしました。』

『ふん!』老伯爵は兩手を擴げ乍らかう言つて、力無く長椅子にへた〳〵と腰を下した。

『仕方がありません!誰だつてある事なんですもの!』心の中では自分の事を、生涯罪を贖ふ事の出來ぬ卑劣漢、やくざ者と罵つてゐる癖に、彼はざつくばらんな思ひ切つた調子でかう言つた。彼は父の手に接吻し、跪いて赦しを乞ひたいと思つてゐるにも拘らず、かうした白々しい、否、寧ろ粗雑な調子で、そんな事は誰でもあると言ひ放つたのだ。

イリヤー伯爵は、我子の此の言葉を聞くと伏目になつて、何か探し出さうとするやうに、せかせかし始めた。

『さうだ、さうだ、』と彼は言つた。『併しむづかしいな、どうも、容易に出來さうもないと思ふが……ふん、誰でもある事だつて!さうだ、誰でもある事だよ……』

伯爵はちらと我子の顔を見遣つて、其の儘ぷいと部屋を出て了つた。ニコライは何か强意見でもある事と覺悟してゐたけれど、こんな事は少しも思ひ設けなかつた。

『お父さん!お父……さん!』と彼はすゝり泣きつゝ父の後から叫んだ。『勘忍して下さい!』彼は父の手を取つて、脣をひしと押し當て乍ら泣き出した。

父と子の間にかうした對話が交されてゐた時、母と娘との間にも、それに劣らぬ重大な事件が語られたのである。ナターシャは昂奮した樣で母の居間へ駈け込んだ。

『お母さま!……お母さま!あの方がわたしに……』

『何うなすつたのだえ?』

『あのわたしに、わたしに結婚の申込をなすつたのよ。お母さま!お母さま!』と彼女は叫んだ。

伯爵夫人は自分の耳を信じる事が出來なかつた。ヂェニーソフが結婚を申し込んだ……而も其の對手は誰だらう？つい此の間まで人形を玩んでゐて、今でも未だ家庭教師の厄介になつてゐる、此の小つぽけな娘のナターシャではないか！

『ナターシャ、澤山ですよ、そんな馬鹿々々しい事！』冗談であつて呉れ、ばいゝがと、未だ一縷の希望をつなぎながら彼女はかう言つた。

『まあ、あんな事を！馬鹿々々しいなんて！わたし本當の事を言つてゐるんだわ。』と腹立たしげにナターシャは言つた。『わたしどうしたらいゝか訊きに來たのに、お母さまつたら「馬鹿々々しい」なんて仰しやるんですもの……』

伯爵夫人は肩を竦めた。

『若しモッシウ（と此の言葉へ妙に力を入れて）ヂェニーソフがお前に申込をなすつたのが本當なら、あの人は馬鹿です、それつ切りですよ。』

『いゝえ、あの方は馬鹿ぢやなくつてよ。』とナターシャは侮辱を感じたやうに眞面目で言つた。

『ではお前どうしようとお言ひなんだえ？此の頃お前さん達は、みんな戀してばかり居るんだね。まあいゝよ、戀したといふのなら、勝手にあの人の所へお嫁に行くがいゝ！』と伯爵夫人は腹立たしげに笑ひ乍ら、『何うとも御勝手に！』

『嘘よ、お母さま、わたしあの方に戀なんかしてないわよ。吃度戀なんかしてない事よ。』

『ぢや、そんならさうとお言ひなさい。』

『お母さま怒つてらつしやるの？ねえ、怒らないで頂戴よう、お母様、一體わたし何處が悪いんでせう？』

『なんの〳〵、そんな譯が無いぢやありませんか、ナターシャ。何ならわたしが行つて斷つて上げようかね？』とほゝ笑みながら伯爵夫人は言つた。

『いやよ、わたし自分で言ふわ、たゞ何と言ふのか教へて頂戴な。お母さまなら何でも譯ない事なんですもの。』母の微笑に答へて彼女はかう言ひ足した。『あの方がどんな樣子をしてわたしに仰しやつたか、それをお母さまが御自分で御覽になつたらばねえ！わたしちやんと分つてゐるわ、あの方はそんな事言ふ積りぢやなかつたのに、ふいと口が辷つて了つたのよ。』

『さう、それにしても矢張りお斷りしなくつちやね。』

『いやよ、いけないわ。わたしあの方が可哀さうでならないのよ！あの方ほんとに可愛い人なんですもの。』

『それぢや申込みをお受けするがいゝ。お前ももういゝ加減お嫁入していゝ年頃だからね。』と母夫人はおひやらかすやうな、腹立たしさうな調子でかう言つた。

『さうぢやないのよ、お母様、わたしあの方が可哀さうなの。わたし何と言つてい、か分らないんですもの。』

『だからさ、お前何にも言ふ事は要りません。わたしが自分で言つて上げます。』と伯爵夫人は言つた。こんな小さい幼いナターシャを大人扱ひされたのに、憤懣を感じたのである。

『いやよ、どうしてもいやよ、わたし自分で言ふから、お母さまは戸の傍で聞いて、頂戴。』とナターシャはいきなり駈け出した。そして客間を抜けて廣間へ入ると、其處ではヂェニーソフが以前の通り、ピアノの傍なる椅子に腰掛けて、兩手で顔を蔽つてゐた。

ナターシャの輕い足音に彼はいきなり立ち上つた。

『ナターリイ、』急ぎ足に近寄つて彼はかう切り出した。『僕の運命を決して下さい。僕の運命はあなたの掌中にあるのです。』

『ヂェニーソフさん、わたしあなたがお可哀さうですわ！……駄目なのよ……けれど、あなたは本當にい、方なのよ、けれど……あれは……いけませんわ……わたし何時迄もかうしてあなたを愛しますわ。』

ヂェニーソフは彼女の手の上に屈み込んだ。と、彼女は奇妙な合點の行かぬ響を聞いた。ナターシャはくしやくしやになつて渦卷いてゐる、彼の黑い髮の毛に接吻した。此の時伯爵夫人の忙しけ

な衣摺れの音が聞えた。彼女は二人の傍へ近附いた。

『ヂェニーソフさん、お志はまことに有難うございますけれど、』伯爵夫人はもぢ〳〵したやうな聲でかう言つた。併し其の聲もヂェニーソフには恐しく、嚴つく聞えたのである。『家の娘は何分未だ年若でございますのでねえ。それにあなたは宅の伴のお友達でもございますから、先づわたくしに相談して下さる事と存じてゐました。それですと、わたくしもかうして餘儀なくお斷りしなければならないやうな、苦しいはめに落ちないで濟んだでせうにねえ。』

『奥樣、』とヂェニーソフは伏目になつて、愧ぢ入つた樣子をし乍ら、未だ何か言はうとしたが、そのまゝ口籠つて了つた。

ナターシャはヂェニーソフのかうした慘めな姿を、平氣で見てゐる事が出來なかつた。彼女は聲高にすゝり泣きし始めた。

『奥樣、僕はあなたに對して申譯がありません。』ヂェニーソフは途切れ勝ちの聲で語を次いだ。『併しこれだけはご承知下さい、僕はお孃樣を始め御家族一同を、神樣のやうに崇拜してゐますので、あなた方の爲めには命の一つや二つ惜しくない位に思つて……』彼はふと夫人の方を見た、と其の嚴つい顏が目に入つたので、『いや、御免下さい、奥樣。』夫人の手に接吻し乍らかう言つて、ナターシャの方は見向きもせずに、急ぎ足で決然と部屋を出て了つた。

次の日ロストフはヂェニーソフの見送りに行つた。彼はもう一日も莫斯科にとゞまる事を肯じなかつたのである。莫斯科の友人一同はジプシィの許で彼の送別會をした。で彼は、何うして橇へ乘せられたか、始め三つばかりの驛をどうして曳かれて行つたか、少しも覺えてゐなかつた。

ヂェニーソフの出發後ロストフは、老伯爵が容易に集め得ない金を待ち乍ら、一歩もわが家を踏み出さないで、重に令孃達の部屋に籠りながら、莫斯科に二週間を過した。

ソーニャは以前より一層優しく、心身を捧げて彼に仕へた。それは丁度彼の敗北が非常な手柄であつて、其の爲めに一層好きになつたのだ、といふ事を彼に知らせようとするかのやうであつた。併しニコライは、もう自分は彼女の愛に價しない人間だと思つた。

彼は令孃達のアルバムを、詩だの曲譜だので一杯書き潰して了つた。そして遂に四萬三千ルーブリ耳を揃へて送つて、ドーロホフから請取りを買ふと、知人の誰にも別れを告げずに、十一月の下旬もう波蘭にゐる聯隊を追うて出發した。

第五編

一

妻とすつかり話を付けて了つた後、ピエールは彼得堡へ向けて出發した。トルシュクの驛で換へ馬が無かつた、といふより、驛長が出さうとしなかつたらしい。で、ピエールは暫く待たなければならなかつた。彼は外套も脱がずに、圓い卓の前なる革張の長椅子に横になつた。そして此の卓の上に、暖い長靴を穿いた大きな足を戴せて、物思ひに沈んだ。

『鞄を入れて置きませうか？ お床は？ お茶は如何でございます？』と侍僕が訊ねた。

ピエールは答へなかつた。彼はなんにも聞かず、なんにも見なかつたのである。彼は一つ前の驛からふと物思ひに沈み始めて、それ以來ずつと只一つの事ばかり思ひ續けてゐた——それは彼が周圍に起るものに、少しも注意を向けようとしなかつた程、非常に重大な問題なのであつた。彼得堡へ着くのが早からうと遲からうと、此の驛で休息の場所があらうと無からうと、そんな事は何等の興味もないばかりか、此の驛に幾時間待つてゐようと、乃至は一生涯過さうと、そんな問

題は今彼の全幅を領してゐる思想に較べれば、どちらだつて同じ事なのであつた。

驛長、其の妻、トルシュク名産の刺繍を携へた女房などが室の中へ入つて來て、各々彼に何かと忠義立てをする。ピエールは卓へ載せた足の位置を變へないで、眼鏡越しにこれ等の人々を眺めてゐたが、彼等が自分から何を要求するのか合點が行かなかつた。そして今自分を惱してゐる疑問を解決もしないで、どうして彼等は安閑と暮して行けるのだらう、と不思議に思つた。それは決鬪後ソコーリニキイから歸つて、惱ましい不眠の第一夜を明かして以來、絶えず彼の心を領してゐる疑問であつた。が、かうして旅へ出て孤獨の境にあるが爲めに、これ等の疑問は尙數倍の力を以て彼に迫つて來た。何を考へ始めても、直ぐ同じ疑問に歸つて來た。而もそれは解決する事も出來なければ、又自分で自分に提出しないでもゐられないのであつた。言はゞ彼の全生命を支へてゐる、大切な頭の螺旋釘が弛んだやうな工合であつた。奥へ入りもしなければ飛び出しもせず、少しも緣へ食ひ込まうとしないで、唯おなじ穴の中をくる〳〵空廻りしてゐる。其の癖それを廻さずにゐられないのである。

驛長は入つて來ると御前に向つて、どうぞほんの二時間ばかりお待ち下さい。さすれば御前の爲めに早打の馬を差し上げます、その後の事は成行きに任せませう！と追從たらゞ〳〵と賴み始めた。明らかに驛長の言ふことは眞赤な嘘で、たゞ旅客から餘計な金が取りたいに相違ない。

「これはいゝ事か惡い事か？」とピエールは自問自答した「俺に取つてはいゝ事だが、他の旅客に取つては惡い事なんだ。所が驛長自身に取つては避くべからざる事だ、かうしなければ食つて行けないからだ。此の男は會てかういふ事の爲めに、或る將校から打たれた事があると、自分でさう言つて居る。所が、其の將校は早く先へ行きたいから打つたのだ。又俺は自分が侮辱せられたと考へた爲めに、ドーロホフを射つた。路易十六世は罪人だと見做された爲めに處刑せられた。所が一年經つと路易王を殺した人達が、矢張り何とかいふ理由で殺されたではないか？一體惡とは何だ？善とは何だ？一體何を愛し何を憎むべきだらう？そして何の爲めに生きるのだらう、又俺は全體何者だらう？生とは何だ、死とは何だ？どういふ力が萬物を支配してゐるのだらう？」と彼は自分で自分に問ひ掛けた。

これ等の疑問に對して只一つの答さへ得られなかつた。たつた一つ答らしいものはあつたが、それとて論理的なものでもなければ、これ等の疑問に應ずるものでもなかつた。外ではない、『死んだら何もかもけりが附いて了ふ、死んだら一切の事が知れるか、それでなければ、こんな疑問を發する事をやめるだらう。』といふのであつた。併し死ぬのは恐しかつた。

トルシュクの物賣女は黄色い聲で雜貨——殊に山羊皮の上靴を薦めるのであつた。

「俺は自分で置き處の分らぬ何百留といふ金を持つて居る。然るに此の女はぼろ〳〵の外套を

着て、おづおづと俺の顔色を讀んでゐる。」とピエールは考へた。「そしてなぜ此の女にこの金が必要なのだらう？果してこれだけの金が髪の毛一筋ほどでも、此の女の幸福なり心の平穏なりを增すだらうか？一體この世の中に俺や此の女を惡と死の手から、少しでも遠ざけて呉れる物が何かあるだらうか？死、一切の物に終りを宣告する死、今日明日にも――どつちにしたつて永遠に比べればほんの一瞬間だ――我々を攫む死！」彼は何物にも食ひ込まうとしない旋螺釘を空に締めつけた。けれども釘は依然として同じ所を空まはりするのみであつた。

侍僕は半分頁を切つてあるスザ夫人の書簡體の小說本を渡した。彼はアメリー・ド・マンスフェルドとかいふ女の、貞操に關する爭鬪と苦悶を讀み進んだ。

「なぜ此の女は實際愛してゐる癖に、自分の誘惑者に反抗して鬪つたのだらう？」とピエールは考へた。「神は自分の意に背いた慾望を、此の女の心に播く筈がないぢやないか。俺の元の妻は鬪はうとしなかつた。而もそれが正當なのかも知れない。」「駄目だ、何一つ發見する事が出來ない。」再びピエールはかう獨言ちた。「何一つ考へ付く事が出來ない。我々の知り得る事は、たゞ何にも知らないといふ事だけだ。これが人間の叡智の行き止りなのだ。」

彼には自分の內部や周圍にあるものが、ごたゞ〳〵した無意味な忌々しいものに思はれた。併し周圍に對するかうした嫌惡の中に、ピエールは一種の苛立たしい快感を覺えたのである。

『申し兼ねますが、御前樣、どうか此の人達の爲めにほんの少しばかり、お詰め下さいませんでせうか。』驛長が入つて來てかう言つた。彼は今一人馬の不足の爲めに留められた旅客を、自分の後ろに案內して來た。

旅客は骨組の大きな、がつしりした顏の黃色い皺の多い老人で、半白の眉が何色とも付かない灰色がゝつた、ぎら〳〵する目の上に蔽ひかぶさつて居た。

ピエールは卓から足を下して立ち上り、自分の爲めに用意された寢臺に橫たはつて、時々新來の客を見遣つた。客は疲れた氣むづかしい顏附をして、ピエールの方を見向きもせずに、下男の手を借りて、苦しさうに外套を脫ぎに掛つた。大分くたびれた毛皮裏の南京木綿の上衣を着け、フェルト織の長靴を瘠せた骨つぽい足に履いた儘、客は長椅子に腰を下した。そして蟀谷の邊の圖拔けて大きく廣い、五分刈の頭を椅子の背に凭せ乍ら、ベズーホフの方をちらと眺めた。嚴つい、賢さうな、刺し通すやうな此の目の表情はピエールをどきりとさした。彼は此の旅客と話が始めたくなつた。けれど彼が旅の事で問を持ち掛けようとした時、旅客はもう目を閉ぢて、皺だらけの老人らしい手を組んで、(其の指の一本にはアダムの首を彫つた、大きな鐵の指環が嵌めてあつた)、身動ぎもせずに坐つてゐた。其の樣子から見ると疲れを休めてゐるのか、何か深い靜かな瞑想に耽つてゐるのか、何方かのやうに思はれた。

旅客の下男は矢張り皺深い黄色な老人であつた。鼻髭も頤髯もなかつたが、それは剃つたのでなくて、始めから生へてゐないらしい。此のこまめな老僕は、旅行用の道具箱を交ぜ返して茶の用意をしてゐたが、やがて煮立つた湯沸(サモワール)を運んで來た。すつかり用意が整つた時、旅客は目を開いて卓にすり寄り、自分で自分に茶を一杯つぐと、今一杯鬚のない下男にも注いですゝめた。ピエールは此の老人と會話を始める必要――と云ふよりも、さうせずには濟まされないやうな不安を覺え始めた。

下男は自分の空の杯(コップ)を伏せたのと、嚙り殘した砂糖の塊りを下げてから、何か要るものは無いかと訊ねた。

『何にも要らん。本を出して呉れ。』と旅客は言つた。

下男は書物を渡した。それは宗教に關するものらしくピエールの目に映つた。旅客は一心に耽讀し始めた。ピエールは其の樣子を見詰めてゐた。突然旅客は書物を片寄せ、一寸栞りを挿んでばたりと閉めた。そして再び目を開いて椅子の脊に肘を凭せつゝ、もと通りの姿勢を取つた。じつと其の樣子を見てゐたピエールが目を外らす暇もなく、老人は目を開いて、しつかりした巖(おごそ)かな視線をひたとピエールの顏に注いだ。

ピエールは何だかきまりの惡いやうな感じがしたので、その視線を避けようとした。けれどぎ

らゝ〳〵光る老人の目は、容赦なく彼を引き寄せるのであつた。

二

『突然こんな事を申して失禮かも知れませんが、あなたはベズーホフ伯爵ではありませんか――若しわたしの思ひ違ひでないとすれば……』と旅客はゆつくり大きな聲で言つた。

ピエールは不審げに無言のまゝ眼鏡越しに對手を眺めた。

『わたしはあなたの事を――あなたの身に降り掛つた不幸を噂に聞いてゐます。』旅客は「不幸」といふ言葉を殊更强く發音したやうに思はれた。それは丁度「さうです、あなたが何と仰しやらうと、確かにあれは不幸です。莫斯科であなたの身に起つた事は間違なく不幸です、ちやんとわしは知つて居ります。」と言ふかのやうであつた。『わたしはあの事件を非常に殘念に思うて居ります。』

ピエールは赤くなつて寢臺から足を下し、不自然な臆病らしい微笑を浮べ乍ら、老人の方へ屈み込んだ。

『わたしは單なる好奇心からこんな事を云ふのではない、今少し重大な理由があるのです。』

彼は自分の視線からピエールを遁(のが)すまいとするやうに、暫く無言でゐた。やがて少し片寄つて

長椅子の座を讓り乍ら、これで以てピエールに自分の傍へ坐れといふ意を知らせた。ピエールは此の老人と會話を交へるのが不快であつたが、我ともなく對手の意に從つて、席を立つて其の傍に坐つた。

『あなたは不幸な方です、伯爵。』と彼は語り續けた。『あなたはお若いし、わたしは老人ぢやによつて、わたしは自分の力の及ぶ限り、あなたをお助けしたいと思うて居ります。』

『えゝ、さう、』ピエールは不自然な微笑を浮べつゝかう言つた。『全く感謝致します……が、あなたはどちらからお出でになりましたか?』

旅客の顏は無愛想といふよりは、寧ろ冷やかで嚴つかつた。併しそれにも拘らず、此の新知己の言葉にしろ顏付にしろ、否應なしに引き付けるやうな力を以て、ピエールに働き掛けるのであつた。

『併し何かの原因で、わたしと話すのがご不快でしたら、どうか遠慮なく言つて頂きたいですな。』と老人は言つた。

そして不意に彼はにつこり笑つたが、それは父親らしい優しさの溢れた微笑であつた。

『いや〳〵、何ういたしまして、それ所ぢやありません、僕はあなたとお近付になつたのを、非常に悅んでゐるのです。』とピエールは言つた。そして今一度此の新知己の手を覗いて、近々と

指環を透かして見た。彼は其の上にアダムの首、卽ち共濟組合のしるしを認めたのである。

『失禮ですが、』と彼は言つた。『あなたはマソンでゐらつしやいますか?』

『さやう、わたしは「自由石工」の組合に屬してゐるものです。』次第〳〵に深くピエールの目に見入りつゝ、旅客はかう言つた。『で、箇人として且つ組合の代表者として、わたしはあなたに救ひの手を差し伸べてをるのであります。』

『僕の恐れるのは、』とピエールは微笑し乍ら言つた。彼は箇人として此の人に呼び醒された信賴の情と、共濟組合の信仰に對する冷笑の習慣と、二つの間に迷つてゐたのである。『僕の恐れるのは、僕が非常にかけ離れた人間で……いや何と言つたらいゝでせうか、その僕の心配なのは、全宇宙に關する僕の考へ方が、あなたのそれとすつかり反對してゐて、其の爲めお互ひに理解し合ふ事が出來なかあないか——といふ事なんです。』

『あなたの考へ方はわたしにもよく分つて居ります。』とマソンは言つた。『あなたの仰しやる考へ方は——あなた自身の智的努力によつて生れたものだ、と自信して居られる其の考へ方は、衆愚の考へ方に外ならんのです。傲慢と怠惰と無智から生れた、似たり寄つたりな結果です。失禮ですが伯爵、若しわたしがあなたの考へを知らなかつたら、かうしてあなたに話し掛けたりなぞしなかつたでせう。あなたの考へ方は悲しむ可き迷妄ですぞ。』

『僕もそれと同じやうに、あなたも矢張り迷妄に陷つてゐらつしやる、とかう想像する事が出來る譯ですね。』弱々しく微笑し乍らピエールはかう言つた。

『わたしは決して自分が眞理を知つてをるなどと、大膽な事は申しません。』其の言葉の明晰と堅實さを以て愈々ピエールを驚かしつゝ、共濟組合員はかう言つた。『何人と雖も獨力で眞理に到達し得るものではない。只萬人協力して、一つ〳〵と礎を築きつゝ、人祖アダムから現代に至る迄、幾百萬世紀を重ねて、偉大なる神のお住居として恥しからぬみ寺が、建立されて行くのですぞ。』かう言つてマソンは目を閉ぢた。

『僕は忌憚なく申し上げねばなりません、僕は信じないのです、その……神を信じ……ないのです。』事實ありのまゝ打ち明ける必要を感じて、ピエールは氣の毒さうに、やつとの事でかう言つた。

マソンは注意深くピエールを打ち眺めて微笑した。それは丁度幾百萬の富を握つてゐる長者が「わたしには五留の金もありません、それがあれば幸福になれるんですが」と訴へる貧民に、微笑して見せるやうな鹽梅であつた。

『さやう、あなたは神を御存じないでせう。』とマソンは言つた。『あなたが御存じの筈はない。あなたは神を知りなさらん、それだからあなたは不幸なのです。』

『さうです、さうです、僕は不幸です。』ピエールは對手の言葉を確かめた。『併し一體どうしたらいゝんですか?』

『あなたは神を御存じない、それだからあなたは不幸なのです。あなたは神を知らぬと言はれるが、神は此處に居られる、神はわたしの中に居られる、神はわたしの言葉の中に居られる、神はお前さんの中にも、今お前さんの言つた冒瀆な言葉の中にも居られるのだ!』嚴めしい慄へ聲でマソンはかう言つた。

彼は一寸言葉を休めた。そして明らかに興奮を靜めようとするもの、如く吐息をついた。

『若し神が無いものなら、』と彼は低い聲で言ひ出した。『わたし達は神の事など言ひ出しはしなかつた筈だ。一體我々は何の事を、誰の事を話したのか? お前さんの否定したのは誰の事か?』不意に歡喜に充ちた威嚴と力を聲に響かせつゝ、彼はかう言つた。『若し神が無いものなら、誰がそれを考へついたのか? 何か譯の分らぬ存在物があるといふ想像は、どうしてお前さんの心中に生じたのか? なぜお前さん始め全世界の者が、そんな得體の知れぬ或る物の存在を想像するのか? あらゆる點に於て全智全能、永遠無窮な或る物の存在を?……』

彼は語を休めて長い間沈默してゐた。ピエールは此の沈默を破る事も出來なかつたし、又破りたくもなかつた。

『此の或る物は存在してをる、併しそれを理解するのはむづかしい。』ピエールの顔でなしに自分の前方を見詰め乍ら、再びマソンが言ひ出した。其の老人らしい手は内部の興奮にじつとしてゐられないで、本の頁をめくりめくりしてゐた。『お前さんが存在を疑つてをる或る物が、若し人間であつたなら、わしは其の男を引つ張つて來て、其の手を取つてお前さんに突きつけて見せるのだが、併しわしは果ない人間だ。目盲ひてゐるものや、神を見神を理解する事を厭ひ、自分の醜悪亂倫を見且つ理解しまいが爲めに、わざと目を塞いでをる者に、神の全能と永遠と恩惠を示すなどといふ事が、どうして〳〵出來るものか？』と彼は暫く言葉を休めた。『お前さんは一體誰か？何者か？お前さんはあゝした冒瀆の言を吐き得るが故に、自分を賢人だと空想してをるのであらう。』彼は暗い嘲るやうな薄笑ひを浮べつゝかう言つた。『よく子供は精巧に作られた時計の小さな部分々々を玩んで、「わたしは此の時計の目的を知らないから、これを作つた職工をも信じない」などと平氣で言ふものだが、お前さんは其の小さな子供よりもつと愚かでたはけてゐる。神を認識するのはむづかしい……我々は人祖アダムから現代に至る迄、此の認識の爲めに働いてゐるが、而もいつ迄たつても此の目的の到達は遼遠だ。併し神を理解しないといふ事は、單に我々の弱少と神の偉大を示すに過ぎぬ。』

ピエールは心臓の凍るやうな思ひをして、目を輝かしつゝマソンの顔を見詰め乍ら、對手を遮

らうとも、質問を持ち掛けようともしないで、じつと聞き入るのであつた。そして此の見も知らぬ他人の言ふ事を、心底から信じて了つた。彼が信じたのは、マソンの言葉の端々に現れる理のつんだ論法なのか、それとも時々殆どマソンの言葉を途切らして了ふ程の烈しい聲の慄へや、言葉の抑揚や、自信に充ちた眞摯な調子や、終始一貫した信念の中に老い果てたやうな、烱々たる年寄りらしい目付や、その全存在から放射する沈着と堅固と、自己の使命の自覺などに對する子供らしい信用なのか——何かは知らぬがピエールは、心の底から信じたいといふ希望を感じ、且つ本當に信じたのである。そして安心と更新と、再び生に歸つたやうな悦ばしい感情を覺えた。彼の沮喪した絶望的な狀態に比べて、マソンの態度表情は殊に力強く胸に響いたのである。

『神は理智に依つて理解出來るものでない、生活によつて始めて理解されるのだ。』とマソンは言つた。

『僕はどうも合點が行きません。』心の底に頭を擡げる疑念に感付いて恐れを抱きつゝ、ピエールはかう言つた。彼は對手の論法の不明瞭で薄弱なのを恐れた。彼は若し對手を信ずる事が出來なかつたらと、それが恐しかつたのである。『どういふ譯で人間の智性は、今あなたの仰しやる大知識に到達出來ないのですか？』

マソンは例のつゝましい父親のやうな微笑を浮べた。

『最高の智慧と眞理とは、我々が自分の心に取り入れようと望んでゐる、清淨な液體のやうなものだ。』と彼は言つた。『所で、此の清淨な液體を汚れた器に容れて、其の淨不淨を論ずる事が出來ようか、人間は只々自己の内的淨化に依つてのみ、内容たる液體をある程度まで淨化する事が出來るのだ。』

『さうです、さうです、それは全くです！』とピエールは嬉しさうに叫んだ。

『最高の智慧は單なる理智や、人間の知識を分裂させる科學――物理とか歴史とか化學とかいふ、世間的な科學に根據を置いてゐない。最高の智慧は唯一無二だ。最高の智慧は唯一の科學を包藏してゐる。それは萬物の科學、卽ち全宇宙、及び其の中で人間に與へられてゐる場所を闡明する科學なのだ。此の科學を自分の心へ納め入れるには、自己の内部の「人」を淨化し更新しなくてはならん。だから認識する前に信仰し、自己を完成するの必要がある。これ等の目的を貫徹する爲めに、我々の靈魂の中へ良心と名付けられる神の光が播かれてあるのだ。』

『さうです、さうです。』とピエールは對手の言葉を引き取つた。

『靈の目を以て自己の内部の「人」を見詰めて、お前は自分で自分に滿足してをるか、とかう問ひ掛けて見なさい。たゞ理性のみに賴つて、お前さんは一體何を獲たか？　お前さんは一體何者か？　あなたは若い、金がある、悧口だ、教育がある、なあ。所で、あなたは自分に賦與された

これ等の幸福を以て、何をし出來しました？　あなたは自分自身及び自分の生活に滿足してをりますかな？』

『いや、僕は自分の生活を憎んでるのです。』ピエールは顏を顰め乍らかう言つた。

『憎んでをる？ぢや其の生活を變へて、自分を淨化しなさい。そして其の淨化の度に從つて、お前さんは睿智を認識するやうになる。自分の生活をよく見なさるがいゝ。あなたはこれ迄どんな生活を送つて來ましたか？　亂暴な酒宴と淫蕩の間です。社會から受けるのみで、何一つ社會に寄與する事なしに、あなたは莫大な富を受け取りました。所で、あなたはそれをどんな風に使ひましたか？　自分の同胞の爲めに何をしましたか？　幾萬といふ自分の奴隷の事を考へた事がありますか？又彼等に肉體的精神的の扶助を與へた事がありますか？　悉く否です。あなたは彼等の努力を利用して、亂倫な生活を送つた。これがあなたの仕事です。又あなたは同胞に利益を齎す爲め、勤めを選んだ事がありますか？　これもない。あなたは無爲に時を過した。その後あなたは結婚した、つまり若い婦人の指導上の責任を負つたのです。然るにあなたは一體何を仕出來したか？妻が正しい道を發見するやうに助力を與へないで、却つて虛僞と不幸の淵に陷れて了つた。人が自分を侮辱したといつて其の人を殺して置いて、わたしは神を知らないの、わたしは自分の生活を憎むのと言つて居られる。それは當り前で何も不思議な事はありませんぞ！』

これ等の言葉の後、マソンは長い對話に疲れたやうに、再び長椅子の脊に肘をついて目を閉ぢた。ピエールは此の嚴めしい、老人らしい、殆ど死んだやうに動かない顏を眺めてゐた。そして聲もなく脣を動かすのであつた。彼は「さうです。厭ふべき、無爲な、淫蕩の生活です！」と言ひたかつた。けれど此の沈默を破る氣力がなかつたのである。

マソンはしや嗄れた老人らしい咳をして下男を呼んだ。

『馬はどうしたかな？』ピエールの方を見ないで老人はかう訊いた。

『補充の馬を連れて參りました。』と下男は答へた。『もうお休みになりませんか？』

『もうよい、橇へ駕けるやうに吩咐けて呉れ。』

「一體此の人は言ふべき事を殘らず言つて了はないで、助力の約束もしない中に、俺を一人打つちやつて行く積りなんだらうか？」ピエールは立ち上つて頭をたれ、ちよい〳〵マソンの方を偸み見しつゝ、部屋中を歩き廻りながらかう考へた。「さうだ、さうだ、今まで考へても見なかつたが、俺は卑しむべき淫蕩な生活を送つて來たのだ。併し俺はそれを好みもしなければ、望みもしなかつた、ところが此の人は眞理を知つてゐるのだから、其の氣にさへなつたら、俺に啓示を與へて呉れることも出來るのだ。」

ピエールはこの事をマソンに言ひたかつたが、切り出すだけの氣力が無かつた。旅客は老人ら

しい馴れた手付で手廻りの品を片付けると、上衣の釦をかけ始めた。これ等の事を終つてから、彼はピエールの方へ向いて、何げない慇懃な調子で言つた。

『あなたはこれからどちらへお出掛けですな？』

『僕ですか……僕は彼得堡へ。』ピエールは子供らしい思切りの惡い聲で答へた。「僕は實際あなたに感謝致します。僕はすべての點に於てあなたと同意です。併し僕を手の附けられない程のやくざ者と思はないで下さい。あなたの望まれるやうな人間になりたいとは、僕も心から希望してゐるのです。たゞ僕は今迄誰からも助力を得なかつたものですから……尤も萬事につけて第一番に惡いのは僕です。助けて下さい。そしたら僕も或ひは……』

ピエールはそれから先を言ふ事が出來なかつた。彼は鼻を啜つて顏を反けた。

マソンは何やら思ひ廻らしてゐるらしく、長い事默つてゐた。

『助力は只神から授かるのみです。』と彼は言つた。『併し組合の力にかなふ程度の助力でしたらあなたも受ける事が出來ませう。彼得堡へお出でになつたら、これをギルラルスキイ伯爵に渡して下さい（彼は紙入れを取り出して、四つに折つた大判の紙に何やら認めた）。唯一つ忠言を呈する事を許して下さい。彼得堡へ着いたら、始めの數日を孤獨と自己省察とに捧げて、決して以前の道へ踏み込まないやうになさい。ではあなたの御無事な旅と、』下男が部屋へ入つたのを見て彼

はかう言つた。『御成功を祈ります……』

ピエールが驛長の帳簿で知つた所に依ると、旅客はバズヂェーフ（ィシップ・アレクセーギッチ）であつた。バズヂェーフは未だノーギコフ（一七四四――一八一八年、文明批評家、中年にしてマソンの群に投じ、露國文化の爲めに貢獻する所多し）時代から知れ渡つてゐる人で、マソンでもあり又同時にマルチニスト（佛のマルチン・パスカルの稱へた神秘的宗教の一派に屬する人）でもあつた。彼の出發後ピエールは長い間眠りに就かうとも、馬を催促しようともしないで、驛遞の一室を歩き廻りながら、放恣な過去を回想したり、幸福な、一點の曇りもない、德行に充ちた未來を想像したり、其の未來も容易く實現され得る事を思つたりして、更新の歡喜を覺えたのである。自分があんなに敗德無殘であつたのも、唯何かの拍子で、一時德行の美しさを忘れたからに過ぎぬ、と、こんな心持さへするのであつた。以前の懷疑は影すらも彼の心に殘つてゐなかつた。彼は人間が德行を以て互に扶助し合ふ爲めに結合するといふ、四海同胞主義の可能を固く信じた。そして共濟組合こそ最も其の主義に適ふ團體のやうに感じられた。

三

彼得堡へ着いてから、ピエールは自分の到着を誰にも知らせず、又自分もどこへも出ないで、毎日々々『フォマー・ケムピイスキイ』――誰かから借りたとも、貰つたとも知れぬ書物の耽讀に時を

過した。此の書物を讀み乍らも、ピエールは――一つの事を――只一つの事のみを頭へ入れた。即ち自己完成に到達の可能と、かのバズヂェーフに啓示された人間相互の同胞的、實行的愛の可能を信ずるといふ、ピエールの未だ會て味つた事のない快感を識得したのである。彼の首都到着後一週間經つたある夕方、彼得堡の社交界でピエールと表面上知り合つて居る、若い波蘭の伯爵ギルラルスキイが彼の部屋へ入つて來た。その樣子は丁度ドーロホフの介添人がやつて來た時のやうに、眞面目くさつて鹿爪らしかつた。彼は後ろ手で戸を締めると、室内にはピエールの他誰もゐない事を確めてから、彼に向つてかう言つた。

『伯爵、わたしは今日あなたに勸告の任を帶びて參りました。』彼は坐らうともしないでピエールにかう言つた。『わたし共の仲間で非常な尊敬を受けてゐる或る人が、所定の期日を待たないであなたを組合へ入れるやうに運動されて、わたしにあなたの保證人になれと勸められたのです。で、わたしは此の方の希望を充すのを自分の義務と考へました。如何です、あなたはわたしの保證の下に、「自由なる石工」の組合へ入る事を御希望ですか？』

いつも方々の夜會で華やかな婦人達に取り卷かれ乍ら、愛想のいゝ、微笑を浮べてゐる所を見馴れた此の紳士の、冷たい嚴かな調子はピエールを驚かしたのである。

『えゝ、希望してゐます。』とピエールは言つた。

ギルラルスキイは一寸頭を下げた。

『伯爵、今一つあなたに質問があります。』と彼は言つた。『此の疑問に對して、あなたが未來の組合員としてでなく、galant homme（潔白なる一箇の人）として誠心誠意お答へ下さる事を望みます。あなたはこれ迄の信念を放棄なさいましたか？あなたは神をお信じですか？』

ピエールは一寸考へ込んだが、

『えゝ……わたしは神を信じます。』と言つた。

『それでは……』とギルラルスキイが言ひ出した時、ピエールはそれを遮つた。

『えゝ、わたしは神を信じます。』と今一度言つた。

『それでは、わたし共はもう出掛けて宜しいです。』とギルラルスキイが言つた。『わたしの馬車に御同乘下さい。』

途中ギルラルスキイは默り通しであつた。どうしたらいゝか、何と答へたらいゝかと云ふピエールの問に對して、彼は唯自分より一段修養を積んだ組合員が試驗するから、ピエールは正直に有りの儘を言つたらいゝ、それ以上何にも必要がないと答へたばかりである。

集會處の置かれてある大きな家の門を潛り、暗い階段を上つて、二人は灯りのついた小やかな玄關へ入つた。此處で彼等は下男の手を借りずに外套を脱いだ。玄關から又別な部屋へ入つた。

誰かしら奇妙な着物をきた人が戸口に現れた。ギルラルスキイは其の方へ進んで、何やら佛蘭西語で低聲に話した。そしてピエールの見た事も無い着物の入つてゐる、餘り大きくない戸棚に近寄つた。

此の戸棚の中からギルラルスキイは一枚の手巾を取り出し、それをピエールの目に當てゝぐつと後ろで結んだ。結び目に髪が食ひ込んで痛かつた。それから彼はピエールを自分の方へ引き寄せて接吻すると、手を取つて何處かへ連れて行くのであつた。ピエールは締め付けられた髪の痛みに顔を顰め、何かしら或る物に對する羞恥の爲めに薄笑ひをしてゐた。兩手をだらりと下げ、顔を顰め乍らにこ〳〵と笑つてゐるピエールの巨大な姿は、不規則な臆病らしい足取りで、ギルラルスキイの後から動いて行つた。

十歩ばかり彼を導いた時、ギルラルスキイは立ち止つた。

『どんな事があなたの身に起りましても、わたし共の組合へ加入しようと固く決心なすつた以上、男らしくすべてを忍んで下さい（ピエールは點頭いて承知の返事をした）。戸を叩く音がしたら、其の目かくしをお取りになつて宜しうございます。』とギルラルスキイは附け足した。『くれぐれもあなたの勇氣と成功を祈ります。』かう言つてピエールの手を握りしめると、ギルラルスキイは出て行つた。

一人切りになつても、ピエールは依然として微笑し續けてゐた。二度ばかり肩を竦めて、丁度邪魔物を取り除けて了ひたいと云ふやうな風付で、手を手巾の方へ持つて行つて又下した。彼が目を縛られたまゝ過した五分は、一時間位の長さに思はれた。手は萎え足はふら付き始めた。彼は疲れたやうな氣がし出した。そして非常に複雜な、非常に多樣な感情を經驗した。今自分の身の上に起らうとしてゐる事も恐しかつたが、萬一この恐怖の色を氣取られはせぬかといふ事も、それ以上恐しかつたのである。一體どんな事が生ずるか、どんな事が啓示されるか、それを知るのが待遠しかつた。併しバズヂェーフとの邂逅以來彼の夢みてゐた、自己の更新と實際的德行生活の道に入るべき時が、遂に到來したと思ふと何より嬉しかつた。烈しく戸を打つ音が聞えた。ピエールは目隱しを外して邊りを見廻した。室の中は漆のやうに暗かつた。たゞ一所で燈明の火が何か白い物の中に燃えてゐた。ピエールは近寄つて見た。燈明は本の擴げてある卓の上に載せられてあつた。其の本は福音書である。燈明の入れてある白い物は齒のついた、穴だらけの髑髏である。『初めに言葉あり、言葉は神と偕にあり。』といふ福音書の最初の數語を讀んで、ピエールは卓を一廻りした。すると何か一杯塡めた蓋のない箱が目に入つた。それは骨の入つた棺であつた。ピエールは少しも驚かなかつた。以前と全く違つた、新しい生活に入らうといふ希望を抱いた彼は、すべて異常な物——今見た物よりもつと〳〵異常な物を期待してゐた。髑髏、棺、福音書——

彼はたゞかういふ風な物、否、これより以上の物を期待してゐたやうな氣がした。隨喜の情を心中に呼び起さうと努め乍ら、彼は邊りを見廻した。『神、死、愛、人類の結合。』彼はこれ等の言葉を混沌としてはゐるけれど、悅ばしい或る想像に結び乍らかう言つて見た。その途端戸が開いて誰か入つて來た。

漸く視線を馴らす事の出來た弱々しい光の中で、餘り脊の高くない人が入つて來たのを、ピエールは見分けた。明るい處から暗い處へ入つた爲めであらう、此の人は一寸の間立ち止つた。やがて、用心深い足取りで卓へ進み寄り、革手袋で包まれた小さな手を其の上に載せた。

此の脊の低い人は白い革の前掛を着けて、胸と足の一部を蔽うてゐた。首には頸飾のやうなものを掛けて居たが、下から光線を受けた長みがかつた顏を、ぐるりと緣取る白い大きな立襟が、此の頸飾りの陰から突き出してゐた。

『何の爲めにあなたは此處へ來たのですか？』ピエールの立てた衣摺れの音に依つて、其の方へ向き乍ら新來の人は訊ねた。『光明の眞理を信ぜず、又光明を見ようともしないあなたが、何用あつて此處へお出でになりました！何をあなたは我々から求めて居るのです？叡智ですか、德行ですか、光明ですか？』

戸が開いて見知らぬ人が入つて來た時、ピエールは子供の時分教會の懺悔式で經驗したやうな、

恐怖と敬虔の念を覺えた。そして生活の條件から言へばまるで緣のない、併し人類の結合といふ點から見れば極めて近しい人に、面と面を突き合せてゐる事を感じた。ピエールは息も止りさうな程烈しい心臟の鼓動を覺え乍ら、リートル(求むる人、卽ち新たに加入を希望する人を試す組合員を、組合でかう呼ぶのである)の方へ近寄つた。ずつと傍へ寄つた時、ピエールは此のリートルが知合のスモリヤニーノフだと氣が付いた。けれど此の人が自分の知り合だなどと考へるのは、寧ろ無禮な位に思はれた。此の人は單に自分の同胞で、德の高い敎訓者に過ぎない。ピエールは長いこと一語も發することが出來なかつた。で、リートルは再び同じ質問を繰り返さねばならなかつた。

『えゝ、わたしは……わたしは……更新を望んでゐるのです。』やつとピエールはかう言つた。

『宜しい、』とスモリヤニーノフは言つて、直ぐ語を次いだ。『あなたは我が神聖なる組合が、あなたの目的貫徹を助力する爲め用ゐる方法に關して、何か理解を持つておゐでゝすか?』リートルは落ち着いて早口にかう言つた。

『僕の……望むものは……更新についての……指導と……助力です……』とピエールは聲を慄はせ乍ら、言ひ憎さうにかう言つた。それは興奮してゐるからでもあるが、又露西亞語でかうした抽象的な事柄を談ずる習慣がなかつた爲めでもある。

『あなたは共濟組合に就いてどんな觀念を持つてお出でゝすか?』

『わたしの解する所では、共濟組合は德行を目的とする人々の fraternité (結合)と平等を意味するものと思ひます。』ピエールは語り進むに從つて、自分の言葉が此の瞬間の莊重な趣に相當しないのを恥ぢながら、『わたしの解する所では……』

『宜しい。』見受ける所、此の答へですつかり滿足したらしいリートルは、急いでかう言つた。

『あなたは自分の目的を達する方法を、宗敎の中に求めた事がありますか?』

『いゝえ、わたしは宗敎を不正なものと思ひますから、それに追從した事がありません。』かう言つたピエールの聲が非常に小さかつたので、リートルはよく聞き取れない位であつた。彼はピエールに何と言つたのか問ひ返した。『わたしは無神論者だつたのです。』ピエールは答へた。

『あなたが眞理を求めるのは、つまり生活に於て其の法則を遵守したいからでせう。して見ると、あなたは叡智と德行を求めてゐるのです、さうぢやありませんか?』束の間の沈默の後、リートルはかう言つた。

『さうです、』とピエールは確かめるやうに言つた。

リートルは一つ咳拂ひをして、手袋をはめた手を胸の上に重ね、さておもむろに言ひ出した。

『ではわたしもあなたに、我が組合の主たる目的を明示せねばなりません。もし此の目的があ

なたの目的と一致したら、あなたは自由に我が組合へ入つて宜しいのです。此の組合の最も重要なる目的であり、同時に存在の基礎であるものは、一種の重大なる神祕を保存し、且つそれを子孫に傳へる事であります。それは如何なる人間の力も顚覆させる事は出來ません。此の神祕は極めて古い時代から——否、或ひは人祖アダムから今日まで傳はつたもので、人類全體の運命も、これ一つに繫つてゐるかも知れないのであります。然るに此の神祕の特質たるや、長年撓まず倦まず自己の淨化を計つて、準備に力を盡さなくては、何人と雖もそれを知り、且つ利用する事が出來ない底の物ですから、誰でも彼でも直ぐに其の獲得を望む事は出來ません。そこで我々は第二の目的を抱いて居ります。外でもない、出來得る限り我が組合員の爲人を鍛練し、其の心情を匡正し、智性を淨化し且つ向上せしめる事であります。これにはかの大神祕の發見に努力した、勇士達に啓示された多くの遺績を適用して、大神祕の獲得に堪へ得るやうな人物を、組合員から作り上げるのであります。我が組合員を淨化し匡正すると同時に、我々は第三の目的として、我が組合員に依つて敬虔と德行の模範を世に示し、全人類をも匡正する事に努めねばなりません。それに依つて世界を支配しつゝある惡と戰ふべく、全力を盡して努力してゐるのであります。此の事をよく考へて置いて下さい。わたしは又後刻參ります。』

かう言つて彼は部屋を出た。

『世界を支配しつゝある惡と戰ふ……』とピエールは繰り返した。と、此の方面に向つて奮鬪する自分自身の未來が彼の心に浮んだ。そして二週間前の彼と同じやうな人々の事も思ひ起された。彼はこれ等の人々に向つて教誨師めいた演說をする、自分の姿を心の中に描いて見た。彼が自分の言行を以て救ふべき不仕合せな淫蕩の人々、自分の救助によつて餌食を奪はれる暴虐者、こんなものも彼の頭腦に浮んで來た。リートルの數へ上げた三つの目的の中で最後の物——卽ち全人類の匡正といふ事が、一番彼に取つて親しみがあつた。リートルの仄めかした何かしら重大な神祕とかいふのは、ピエールの好奇心を唆つたけれど、本當の中核のやうに思はれなかつた。また第二の目的——自己の淨化と匡正も、餘り彼の興味を牽かなかつた。何故といふに此の時彼は、自分が全然今迄の惡行を匡正されて、唯もう善を行ふばかりに準備が出來てゐるやうに感じたからである。

三十分を經てリートルは、ソロモンの神殿の七つの階段に相當する七つの德——各組合員が自己の心內に養成すべき七つの德を『求める人』に傳へるために歸つて來た。それは次の如くである。(一)謙讓、組合祕密の遵守。(二)組合の上長に對する服從。(三)溫厚。(四)人類に對する愛情。(五)剛氣。(六)寬大。(七)死に對する愛慕。

『第七に關しては、』とリートルは言つた。『死といふものに就いて度々思索をめぐらし、遂に死

は決して恐しい敵でなく、親しむべき友であると感じられる迄、自己の訓練に努力して下さい：：つまり死は徳行の努力に疲れた靈魂を、此の悲しみ多い現世から救ひ出して、報酬と慰安の場所へ導いて呉れる友人であると云ふやうに……』

「さうだ、それはさうあるべきだ。」リートルが以上の事を述べた後、再びピエールを孤獨な瞑想裏に取り殘して去つた時、ピエールはかう考へた。「それはさうに違ひない。併し俺は未だ弱い人間だから、自分の生活が愛しい。だつて今やつと生活の意義が、少しづゝ分り掛けたばかりなんだもの。」

併し彼が指折り數へて憶ひ出した殘りの五つの徳は、悉く自分の心の中にあるやうに思はれた——剛氣も、寛大も、溫厚も、人類に對する愛も、服從も——特に服從は彼に取つて徳とは思はれないで、寧ろ幸福だとさへ感じられた。(それは今かうして自分の我意を逃れて、確固不動の眞理を知つてゐる人々に、すつかり心を委して了ふのが、彼には嬉しくつて堪らなかつたからである)。たゞ最後の一徳はすつかり忘れて了つて、どうしても思ひ出す事が出來なかつた。

間も無く三度目にリートルが引つ返して來て、ピエールの意向が依然として强固であるか、そして一切の要求に從ふ決心であるかどうかと訊ねた。

『わたしは何事をも決行する覺悟です。』とピエールは言つた。

『未だ一つあなたに申して置く事があります。』とリートルは言つた。『我が組合はその教義を單に言葉のみでなく、亦ある種の方法を以て傳へてゐます。其の方法は眞の叡智と徳操の探求者に對して、單なる言語上の説明よりも、强い效果を及ぼすものであります。現に御覽の此の部屋の飾りも言語以上に、何物かをあなたの心に説明した筈だと思ひます（但しあなたの心が誠實であるならばです）。多分これから先もあなたの入會式の進行につれて、かうした形體的の説明を御覽になる事でありませう。つまり組合は己れの教義を象形文字で示した、古代の會合を模したのであります。象形文字とは五官を絶し、且つ繪畫のやうな性質を有する事物の謂であります。』

ピエールは象形文字の何たるやをよく承知してゐたが、それを言ひ出す勇氣がなかつた。彼はすべての事から推して、今にも直ぐ試練が始まるのだなと感じつゝ、無言にリートルの言ふことを聞いて居た。

『もしあなたの決心が堅固でありますなら、わたくしはこれからあなたの試練に取り掛らなければなりません。』尙一層ピエールに近附き乍らリートルはかう言つた。『寛大の兆として、すべての貴重品をわたしにお渡し下さるやうに願ひます。』

『併し、わたしは今何も持つてゐませんが。』自分の持つてゐるものを、全部引き渡すやうに請求されたのだと思つて、ピエールはかう言つた。

『あなたの體に着いてゐるものだけです。時計とか、金とか、指環とか……』

ピエールは急いで金入と時計を取り出した。そして肥つた指から婚約指環(エンゲージリング)を抜き取るのに長いこと手間取つた。これ等の事が終つた時、リートルはかう言つた。

『服從の兆(しるし)として脱衣をお願ひします。』

ピエールはリートルの指圖によつて燕尾服、胴衣(チョッキ)、左の靴などを脱いだ。リートルは彼の襯衣の左胸を開け、屈み込んで左の窄袴下(ソボン)を膝の上迄たくし上げた。ピエールは馴染もない此の人に、こんな勞を掛けまいと、急いで左の靴を脱ぎ、窄袴下もたくし上げようとした。併しリートルはさうする事は要らぬと言つて、彼の左足に上靴(スリッパ)を穿かした。自分自身に對する嘲りと、疑ひと、羞恥の入り交つた子供らしい微笑を浮べつゝ、(それは彼の意志に反して、ひとりでに顔に浮んで來るのであつた)、ピエールは兩手を垂れ足を擴げた儘、新しい命令を待つて同胞たるリートルの前に立つてゐた。

『最後に誠實の兆として、あなたの重なる慾望を告白して頂きたいです。』

『わたしの慾望ですか！それは澤山ありました。』ピエールは答へた。

『德行の路に於て最も多くあなたを迷はした慾望であります。』とリートルは言つた。

ピエールはあれかこれかと考へ乍ら、暫く默つてゐた。

「酒？飽食？惰懶？無爲？癇癖？憎惡？女？」と彼は自分の惡行を數へ上げて、心の衡(はかり)にかけて見たが、其の中の何れを最も重しとす可きか分らなかつた。

『女です。』とピエールは低い、聞えるか聞えないかの聲で言つた。

リートルは此の答への後長いこと身動きもしなければ、口も利かなかつた。遂に彼はピエールの方へ進み寄り、卓の上に載つてゐる手巾を取つて、再び彼の目を縛つた。

『最後に今一度言つて置きますが、あなたの注意力を全部自分自身に集中して、自分の感情に鎖をかけ、慾望の中でなく自分の心中に幸福をお求めなさい、幸福の泉は外でなく内にあるのです……』

ピエールは心を爽かにするやうな此の幸福の泉を、既に自己の内部に感じてゐた。此の泉は今彼の魂を喜悅と感激とで充したのである。

四

それから間もなく、ピエールを迎へに暗い部屋へ來たのは、最早以前のリートルでなく、保證人のギルラルスキイであつた。彼は聲でそれと悟つた。彼の志向の堅固如何に關する新しい問に對して、ピエールは『え、え、承知です。』とのみ答へた。そして幸福に輝く子供らしい微笑を

浮べ、肥えた胸を曝し、片々の足に靴をつけ片々は素足の儘、おづ〳〵と不規則な足取りで歩んだ。彼の露はな胸先にはギルラルスキイが劍を突きつけてゐた。部屋を出ると彼は前後左右にくる〳〵と廻り乍ら、廊下傳ひに引かれて行つた。そして遂に集會處の戸口へ辿りついた。ギルラルスキイが一つ咳拂すると、マソン獨特の槌の音がこれに答へて、戸は二人の前に開かれた。誰かの太い聲が（ピエールの目は矢張り縛られた儘であつた）、ピエールが何者であるか、どこでいつ生れたか、などといふ質問を發した。それからまた目かくしを取らないで、どこかへ導いて行つた。さうして歩いてゐる間ぢう、樣々な譬喩が語られた。それは彼の行路の艱難や、神聖なる友情や、世界の永遠なる創造主や、すべての艱難危險を忍ぶに必要な剛氣などと云ふ事であつた。此の『旅』の間ぢう傍の人が自分の事を、或る時は求神者、或る時は苦悶者、或る時は探求者と呼んだ事や、それから其の際槌や劍で色々な音をさせた事に、ピエールは氣が附いた。彼が何かしらある物の傍へ導かれた時、ピエールは指導者の間に躊躇と動搖の生じた事を悟つた。彼は自分を圍む人々が、小聲で互に爭ひ始めるのを耳にした。一人の者は何か毛氈の上を連れて通らねばならぬと主張してゐた。それが收まつてから、誰かピエールの右手を取つて何かの上に載せ、左手で兩脚器を左の胸へ當てるやうに命じた。そして今一人の讀み上げる言葉を繰り返して、組合の清規に忠實たるべしといふ誓を立てさせた。終つて人々は蠟燭を消して酒精に點火し、（ピエール

は匂でそれと知つた）、彼に向つて、今小さな光を見る事が出來るであらうと言つた。やがて彼の目隱しは取り去られた。ピエールは弱々しい酒精の火の中に、リートルと同じ前掛を着けた幾人かの人が面前に立つて、自分の方へ劍を突きつけてゐるのを、夢か何ぞのやうに見分ける事が出來た。彼等の中には血に染つた襯衣を着た男が立つてゐた。これを見るとピエールは胸をつき出して、ぐさとばかり我身を貫けよと望みつゝ、劍の方へ進み寄つた。が、劍はさつと退かれて、彼は直ぐに目隱しをせられた。

『今お前は小さな光を見たのだ。』と誰かの聲が言つた。それから再び蠟燭が點火された。人々は今度全き光を見る必要があると言つて、又もや目隱しを取つた。と、不意に十人以上の聲が一時に "Sic transit gloria mundi"（かくの如くして地上の光榮は移る—ラテン語）と稱へた。

ピエールは段々と我れに返つて、自分の立つてゐる部屋と、其の中にゐる人々を見廻し始めた。黑い布で蔽はれた卓の周りには、以前彼が見た人達と同じ服裝をした人が、十二人ばかり竝んで居た。其の中の誰彼は、彼得堡の社交界に於けるピエールの知己であつた。總裁席には一種特別な十字架を首にかけた、見覺えのない若い人が腰掛けてゐた。其の右手には、嘗て二年前ピエールが女官アンナの許で見た事のある、伊太利の僧正が坐つてゐる。尙そこには以前クラーギン（ワシリイー公爵）家にゐた事のある瑞西生れの家庭教師や、非常に勢力のある政治家も一人交つてゐる

た。一同は手に槌を持つた總裁の言に耳を傾け乍ら、物々しげに沈默を守つてゐた。壁の中には燃え輝く星の形が欽めてあつた。卓の一方の側には樣々な模樣のついた毛氈、今一方の側には福音書と髑髏とを載せた、祭壇やうのものが置いてあつた。卓の周りには敎會風の燭臺が七本立て竝べてあつた。二人の組合員がピエールを祭壇の傍へ連れて行つて、彼の足を直角に開かせ、今お前は神殿の門前に倒れるのだと言つて、其處へ臥るやうに命じた。

『その前に鋤を授けるのが順序ぢやありませんか。』と一人の組合員が小聲で言つた。

『えゝ！もう澤山ですよ、默つてゝ下さい！』と今一人が言つた。

ピエールは命令に從はうともしないで、力拔けのしたやうな近視の眼で邊りを見廻した。と突然、彼の心に疑惑の雲が垂れ掛つた。「俺はどこに居るんだらう？そして何をしてゐるんだらう？此の人達は俺を愚弄してゐるのぢやないかしらん？後でこんな事を想ひ出したら、恥しくなりはしないだらうか？」併し此の疑問が續いたのはほんの一瞬間であつた。ピエールは自分を取り卷く人人の眞面目な顏を見、先刻からして來た一切の事を想ひ出して、中途で止める事は不可能だと悟つた。彼は自分で自分の疑惑に慄然として、以前の感激の情を呼び起さうと努め乍ら、神殿の門前に身を投げた。すると實際以前に增して强烈な感激の情が、彼の心を襲つたのである。暫くの間じつと倒れた儘で居ると、やがて起き上るやうに命じられた。彼は皆と同じ白い革の前掛をきせ

られ、一挺の鋤と三組の手袋を授けられた。此の時總裁がピエールに向つて、この前掛は堅固と貞操とを表するものであるから、決して此の純白を汚さぬやうに努力せねばならぬと言つた。それから意味の分らぬ鋤に關しては、これを以て自分の心から惡業を除き、且つこれを以つて遜つた態度で、同胞の心を和げるやうに苦心せよと述べた。次に第一の男物の手袋については、此の手袋の意味を知らせる譯に行かないが、大切に保存しなければならぬ。また第二の男物の手袋は集會に着けて出席するやうにと敎へた。最後に婦人用の手袋に關して總裁はかう言つた。

『此の婦人用の手袋もあなたの物と決めて置きます。これをあなたの最も尊敬する婦人にお與へなさい。その贈物に依つてあなたの純潔を、將來自分の伴侶として選まれる婦人——卽ち自由の石工たる資格のある婦人に證明なさい。』暫く言葉を途切らした後、彼は又かう附け足した。『併し、此の手袋が汚れたる手を飾らぬやうに、氣をつけなくてはなりませんぞ。』

此の最後の言葉を發した時、總裁は妙にへどもどしたやうにピエールは感じた。で、彼は尙一層へどもどし乍ら、子供のやうに涙の滲み出る程顏を赤くして、不安げに邊りを見廻すのであつた。ばつの惡い沈默が生じた。

此の沈默は一人の組合員に依つて破られた。彼はピエールを毛氈の方へ伴つて、其の上に描かれてある物象の說明を、手帳を取り出して讀んで聞かせた、それは太陽、月、槌、垂直線、鋤、

正方形の野の石、柱、三つの窓などであつた。その後で人々はピエールに定めの席を指定し、組合の徽章を示し、合言葉を敎へて、やつと腰かけることを許した。總裁は會規を讀み始めた。其の會規が恐しく長いので、ピエールは喜悅と興奮と羞恥の爲め、少しも腹に入らなかつた。只終ひの方だけはじつと耳を濟して聞いてゐたから、後まで彼の心に留つた。

『此の神殿の中に於て我等は、』と總裁は讀み上げるのであつた。『德行と惡行との間に存する階段の外、如何なる階級をも認めず。我等の平等を破るが如き、何等かの差異を設くる事を愼む可し。何人にもあれ同胞の救助の爲めには、ためらふ事なく突進し、迷へる者を誡め、倒るゝものを抱き起せ。而して如何なる時と雖も、同胞に對して憎惡敵意の念を抱くべからず。すべて優しく愛想よかるべし。萬人の胸に德行の火を搔き起せ。又幸福は須(すべから)く汝の隣人に頒て。而して羨望の念に依りて此の淸き愉樂を濁す可からず。汝の敵を許し、酬ゆるに唯善行を以てせよ。かくの如くして最高の法則を遵守せば、汝は嘗て自ら失ひたる過去の壯大の跡を見出す可きなり。』

朗讀が終つた時、總裁はピエールを抱き寄せて接吻した。ピエールは歡喜の涙を浮べて周りを見廻してゐた。人々が四方から投げ掛ける祝辭や、舊交更新の挨拶などに對して、何と答へていゝか分らなかつた。彼の眼中には舊交も何も無かつた。彼はこれ等の人々の中に、只組合の同胞を見るのみであつた。そしてこれ等の人々と共に早く仕事に取り掛りたいといふ、堪へ難い欲求に

燃え立つのであつた。

總裁が槌をとんと鳴らしたので、一同はそれ〴〵席に着いた。そして其の中の一人が、恭順の必要に關する敎訓を朗讀した。

總裁はやがて最後の義務を果すやうに提言した。で、喜捨金を集める役目を帶びた有名な政治家が、組合員の間を廻り始めた。ピエールは自分の持つてゐる金額を、すつかり書き込んで了ひたかつたが、高慢なやうに思はれるのも厭だつたので、他の人と同じだけの金高を書き込んで置いた。

集會は終りを告げた。歸宅後ピエールは、まるで何十年振りかに、遠い旅から歸つて來たやうな氣がした。そして以前の生活狀態や習慣などから離れて了つて、全く別な人間になつたやうに感ぜられた。

五

共濟組合(マソン)へ入會の翌日、ピエールは自宅に籠つて書物を讀み乍ら、一生懸命に四邊形の意味を體得しようと努めてゐた。それは第一の邊によつて神を、第二の邊によつて精神を、第三の邊によつて肉體を、第四の邊によつてその混合を示したものである。時々彼は本や方形から目を離し

て、心の中で新生活の計畫を組み立てゝ見た。昨夜集會所で聞いた處に據ると、例の決鬪の風說が皇帝の耳に達したので、今ピエールとしては、暫く彼得堡を遠ざかつた方が得策だらうとの事であつた。ピエールは南方の領地を旅行して、其處で百姓達の面倒でも見てやらうと考へた。彼が悅ばしい心持で新しい生活の事を、樣々に思ひめぐらしてゐるところへ、思ひ掛けなくヴシーリィ公爵が部屋へ入つて來た。

『え、ピエール、お前は一體莫斯科で、何といふ事を仕出來して呉れたんだね？何の爲めにエレンと諍ひなんかしたのだ？お前は飛んでもない思ひ違ひをしてゐるよ。』ヴシーリィ公爵は室へ入り乍らかう言つた。『わたしは何もかも承知してゐる。わたしが受け合つて置くが、エレンは丁度ユダヤ人に對する基督樣みたいに、お前に對して清淨潔白なものだよ。』

ピエールが何か答へようとすると、彼は急いでそれを遮つた。

『それにどうしてお前は眞實なる友達として、わたしに直接ざつくばらんに相談して呉れなかつたのだ？わたしはすつかり承知してゐる、わたしはすつかり呑み込んでゐる。お前は自分の名譽を重んずる紳士として、申分の無い立派な振舞をしたのだ。尤も幾分早まり過ぎた嫌ひはあるがね。併しそんな事はお互に穿鑿しない事にしよう。だが、たゞ一つ覺えてゐて貰ひたいのは、社交界のみならず宮中の目から見ても、お前はわたし達親子の者を、面目ない位置に立たして了

つたんだよ。』彼は聲を低めてかう言ひ足した。『エレンは莫斯科にゐるし、お前は此處に暮してゐるのだからね。分つたかね、』と彼はピエールの手を取つて、一寸下の方へ引つ張つた。『これは唯の誤解に過ぎないんだよ。それはお前も自分で悟つてる事と思ふ。だから、今直ぐわたしと一緒に手紙を書いて呉れないか。するとあれが此處へやつて來て、一切合切綺麗に話が附かうといふものだ。でないとお前、恐しい苦しみを嘗めるに決つてるよ、わたしが請け合つて置く、ピエール。』

ヴシーリィ公爵は諭すやうな目附でピエールを見詰めた。

『わたしはある確かな筋から聞いたが、皇太后陛下が此の事件について、大變氣をもんでおるでなさるといふ事だ。お前も知つての通り、皇太后樣は非常にエレンを御寵愛なのだからね。』

ピエールは幾度か口を利かうとした。併し一方からはヴシーリィ公爵がさうさせなかつたし、今一方から見ると、彼自身も舅に向つて、かねて固く決心した斷乎たる拒絕と、異存の返答をするのが恐しかつたのである。それに「優しく愛想よかるべし」といふマソンの言葉も思ひ起された。對手が誰であるにもせよ、他人に面と向つて、其の人の思ひも寄らぬ不快な事を口にするのは、ピエールに取つて難中の難事であつた。彼は自分で自身を鞭韃し乍ら、顏に皺を寄せたり、赤くなつたり、椅子を立つたり、また坐つたりしてゐた。彼は今迄このヴシーリィ公爵の空惚けたや

うな、自信に充ちた調子に巻き込まれるのが、すつかり癖になつて了つたので、今もそれに抵抗する氣力がないやうに感じられた。けれども彼はかう直覺した——今自分の發する一言で、自分の將來の運命が左右されるのだ、卽ち以前の古い道を辿るか、或ひはマソンに依つて啓示された。魅力ある新しい道程に上るかゞ決しられるのだ。此の新しい道について、始めて新生に向ふ復活を發見する事が出來る、と彼は信じてゐるのであつた。

『ねえピエールさん、』ヴシーリイ公爵はふざけた調子でかう言つた。『わたしに一口「はい」と言つてお呉れ。そしたらわたしからエレンに手紙をやる。それで我々はあのぶく〳〵肥つた牛(嫉妬の意)の畜生を殺して了へるのだ。』

けれども、ヴシーリイ公爵が此の洒落を言ひ終らない中に、ピエールは亡父の俤をしのばせるやうな、狂的な表情を顏に浮べつゝ、對手の目を見ないでかう囁いた。

『公爵、わたしはあなたをお呼びしなかつた筈です。お歸り下さい、どうぞお歸り下さい！』彼は跳り上つて公爵の爲めに戸を開いた。『出て行つて下さい。』自分で自分の言葉を信じ兼ねつつ、彼はかう言つた——ヴシーリイ公爵の顏に浮んだ當惑と恐怖の表情に、內心痛快を感じながら。

『お前どうしたのだ？病氣ででもあるのかね？』

『出て行つて下さい。』ピエールは今一度慄へ聲で繰り返した。で、ヴシーリイ公爵は何の話も付けずに、立ち去らなければならなかつた。

一週間の後、ピエールは新しい親友たるマソン達に別れを告げ、莫大な金を組合に寄附して、南方の領地へ向けて出發した。彼の新しい友達は、キーエフやオデッサのマソンに宛てた紹介狀を書き、今後も通信を怠らぬ事や、新しい事業に關して指導を與へる事など、ピエールに約束したのである。

六

ピエールとドーロホフの事件は有耶無耶に揉み消されて了つた。そして決鬪に對しては當時皇帝が非常に嚴格であつたにも拘らず、双方の當事者も介添人も事なく差し置かれたのである。併しピエール夫妻の別居に依つて裏書された決鬪のいきさつは、交際社會に隈なく知れ渡つて了つた。ピエールが未だ單なる私生兒であつた時には、人々は寛大な庇ふやうな態度を取つてゐたし、又彼が露西亞帝國に於ける有數な花婿の候補者であつた時には、ちやほやして舁ぎ廻つたものであるが、彼が結婚して了つて、娘や母親達に取つて、期待することが少しも無くなつて了ふと、彼は一時に社交界の評判を失墜した。その上彼は交際社會の好感を求める事が下手で、而もそれ

を望まうとしなかつた。

それ故この事件に關しても、人々は彼一人のみを責めた。彼は譯の分らないやきもちやで、亡父と同じ殘忍狂暴な發作の擒となつたのだ、など、噂し合つた。で、エレンがピエールの出發後彼得堡へ歸つて來た時、單に好意といふ位でなく、今度の不幸に關聯する尊敬の氣味合を以て、すべての知人に迎へられたのである。會話が良人の上へ移る毎に、エレンは自分でもその意味をはつきり知らないのだが、生來の社交術に依つて修得した、氣品の高い表情を浮べるのが常であつた。此の表情は丁度、「わたしは愚痴をこぼさないで、この不幸を忍ばうと決心しました。良人は神樣から送られたわたしの十字架です。」と言ふやうであつた。

ヴシーリィ公爵は一層露骨に自分の意見を口にした。彼は話頭がピエールの事に轉ずる度に、肩をすくめて額を指さし乍らかう言つた。

『Un cerveau fêlé（半氣違ひです）――平常から言はないこつちやありませんよ。』

『わたし始めからさう申してゐました。』とアンナ・シェーレルはピエールの事をかう言つた。『わたしあの時直ぐ、誰よりも眞先に（と彼女は自分の優先權を主張した）、さう申したのです、あの人は時代の放縱な思想に毒された向う見ずな青年ですつて。わたし皆があの人に夢中になつてる時分から、もうこんな風な事を豫言しました。丁度あの人が外國から歸つて來た當座の事でした、

ねえ、そら、何時か宅の夜會でまるでマラー（一七四四――一八九三、佛國大革命の主動者の一人）か何ぞのやうな役廻りをしたではありませんか。果してこの通りの結果ですわ。わたしあの當時からこの結婚を望みませんでしたから、これ〳〵の事が起るだらうつて、すつかり豫言致しました。』

アンナは例に依つて暇な時に、以前のやうな夜會を自宅で催してゐた。其の夜會は彼女の才能を以て始めてなし得る底のものであつた。それは此の夜會にいつも女主人の所謂、la crême de la véritable bonne société la fine fleur de l'essence intellectuelle de Pétersbourg（眞に優れた社會のクリーム彼得堡の知識階級のエッセンス）が集るからであつた。かうして巧緻に精選された一座の顏觸れの他、今一つアンナの夜會の特色といふべきは、いつも夜會の度毎に女主人が誰かしら目新しい、興味ある人物を一座に提供する事と、正統王家派的（レジチミスチック）な、宮廷に近い社會氣分を指示する、政治的寒暖計の度合が、他所（よそ）で見られないほど明瞭正確に現れる事であつた。

千八百六年の末、普魯西亞軍がナポレオンの爲めに、イェーナ及びアウエルシテートの二個所で微塵に粉碎され、普魯西亞の要塞の大部分が白旗を揭げたと云ふ詳報が達し、露西亞軍が既に普魯西亞へ進出して、露西亞對ナポレオンの第二次戰が開かれた頃である。アンナ・シェーレルは自宅で例の夜會を催した。當夜の「眞に優れたる社會のクリーム」は、良人に捨てられた不幸なる美しきエレン、モルテマール子爵、つひ近頃維納から歸つて來たばかりの愛すべきイッポリート公爵、二

人の外交官、伯母様（マダム）、社交界で單に d'un homme de beaucoup de mérite（非常にオのある人）といふ通り名を頂戴してゐる一人の青年、新たに任命された女官母子、その他に少し品（しな）の下つた人達が幾人かであつた。

女主人が新顔として當夜の來客をもてなす材料に使つたのは、最近普魯西亞の軍隊から急使としてこの地へ到着した、ボリース・ドルベッコーイであつた。彼は或る高官の副官を勤めてゐた。

此の夜會に現れた政治寒暖計の度は次のやうなものであつた。卽ち歐羅巴の帝王や元帥達が悉く心を合せて、我々露西亞人に不快や悲しみを感じさせる爲め、ボナパルトの勝手氣隨を見て見ぬ振りをしても、ボナパルトに關する我々の意見は決して變更する譯に行かない。我々は此の點について、僞らざる思想を絕えず發表するに憚らない。そして普魯西亞王その他の人々に向つては、そんな事をすれば却つてお前さん方の不利益だよ、と言つてやるだけの事だ。Tu l'as voulu George Dandin（これはお前さんの自ら求めた事なのだ、ねえジョールジ・ダンデン――モリエールの戲曲）とより他に言ひやうがない――かういふ風な氣持が、アンナの夜會の政治寒暖計に示されてゐた。この夜客の膳に薦められるべきボリースが客間へ入つて來た時は、もう來客一同揃つてゐて、アンナに指導されてゐる會話は露西亞と墺太利との外交關係、及び兩者の同盟に對する希望などについて交換されて居た。

ボリースははいからな副官の軍服を着けて、活き〳〵した紅顔の美丈夫になつてゐた。餘裕綽

々たる態度で客間へ入ると、先づ規則として伯母（マダム）様の所へ挨拶に連れて行かれた後、再び人々のグループをなしてゐる方へ導かれた。

アンナは自分の乾からびた手を接吻させて、彼に取つて未知の人々を紹介し、小聲でその一人々々に定義を下すのであつた。

『公爵イッポリート・クラーギン――愛すべき青年です。クルークさん――コペンハーゲンの代理公使で、實に聰明なお方です。シートフさん――Un homme de beaucoup de mérite（非常にオ能のある方です）。』

此の通り名を頂戴してゐる青年を摑まへて、彼女はかう言つた。

ボリースは其の後ずつと勤務を續けてゐる間、母アンナ・ドルベッカーヤ夫人の心遣ひと、自分自身の趣味と控目な性質のお蔭で、勤務上最も有利な地位に立つ事が出來た。彼は非常な權勢家の副官となり、甚だ重大な任務を帶びて魯魯西亞へ赴き、最近同地から急使として歸京したばかりである。彼はオルミュッに於て眇たる一少尉補も、堂々たる將官より比較にならぬ程高い位置に立てるといふ不文律を悟つて、それが非常に氣に入つたので、それ以來すつかり其のこつを呑み込んで了つた。この不文律に依ると、成功の必要條件は勤務の勉勵でもなければ、努力でも勇敢でも持久力でもない。只々行賞拔擢の權を有してゐる人々に巧く應對すればいゝのである。彼はよく自分で自分の急速な成功に驚き、且つ他の人がこの理を悟らないのに呆れる程であつた。

この發見の結果彼の生活狀態も、以前の知己に對する態度も、未來の計畫も悉く一變して了つた。彼は金持ではなかつたけれど、他の人より立派な服裝をする爲めに、なけなしの金をはたく事を惜まなかつた。見すぼらしい馬車を乘り廻したり、古い軍服を着て彼得堡の街を歩いたりするよりも、其の他の滿足を犧牲にした方がましだと思つてゐた。彼は自分より上位の人、つまり自分に取つて有利な人にのみ接近し知遇を求めた。そして彼得堡を愛し莫斯科を侮蔑した。ロストフ家の記憶や、ナターシャに對する子供らしい戀の記憶は、彼に取つて不愉快な位であつた。それ故彼は軍隊に投じてより此のかた、一度もロストフ家へ足踏みしなかつた。彼はアンナ・シェーレルの夜會に出席する事を、異常な勤務上の昇進と心得てゐたので、此の席に於ける自分の役廻りを直ぐに了解して、自分といふものゝ中に含まれてゐるすべての興味を、アンナ・シェーレルの利用に委ねた。そして注意深く各個の人々を觀察し、それ等の人々に接近する利益と可能を心の衡にかけてゐた。彼は美しいエレンの傍へ指定された場所に坐つて、人々の會話に耳をすましてゐた。

『墺太利は露西亞の提供した條約の根抵を、全然不可能な事だと信じてゐるのです。たとへ露西亞が實戰上華々しい成果を收めたとしても、そんな事は實現する譯に行かないと思つてゐます。又露西亞をしてさう言ふ華々しい成果を收めしめるやうな方法が、果してあるかどうか疑つてゐます。これは維納内閣の言葉その儘なのですよ。』と丁抹の代理公使がかう言つた。

『C'est le dout qui est flatteur（それは中々有難い疑惑ですね）』と「聰明な」紳士が皮肉な微笑を浮べつゝかう言つた。

『併し維納内閣と墺太利皇帝とを、區別する必要がありますよ。墺太利皇帝は決してそんな事を考へやしないです。それは單に内閣の言に過ぎません。』とモルテマール子爵がかう言つた。

『Eh, mon cher vicomte（けれども子爵ね）』とアンナ・シェーレルが割つて入つた。『L'Urope（歐羅巴は）』彼女は佛蘭西人を對手に話す時、佛蘭西語の洒落た特異例として、なぜか L'Urope（リユーロープ）と發音するのであつた。『l'Urope ne sera jamais notre alliée sincère（歐羅巴は決して我國の眞からの味方にはなりませんよ）。』

かう言つて置いて直ぐ其の後から、アンナは普魯西亞王の男々しさ剛氣さに話頭を轉じた、それはボリースをそろ〳〵役立たせようといふ心算なので。

ボリースは自分の番を待ち受け乍ら、一心に人の話を聽いてゐたが、又それと同時に隣席の婦人――美しいエレンを幾度か振り返つて見るだけの餘裕もあつた。エレンは微笑を含みつゝ、何遍も若く美しい副官の視線を迎へた。

普魯西亞の狀態を物語つてゐる中に、アンナはガウ旅行の事や普魯西亞軍の狀況などを、ありの儘物語るやうに頼んだ。ボリースは純粹正確な

佛蘭西語で急がずあわてず、軍隊や宮廷に關する興味ある多くの事實を、こまゞゝと物語つた。その物語の間何事に關しても、自分の意見を洩らすのを避けるやうにした。暫くの間ボリースは一同の注意を牽き寄せる事が出來た。アンナは此の新顔の御馳走が、すべての客人に快く受け取られた事を感じた。誰よりも一番餘計ボリースの話に注意を拂つたのはエレンで、幾度となく彼の旅行の詳細を訊ねた。彼女は普魯西亞軍の狀況に異常な興味を抱いてゐるらしかつた。ボリースが語り終るや否や、彼女は持前の微笑を浮べつゝ、彼に向つて、

『Il faut absolument que vous veniez me voir（あなた是非私のところへいらして下さいまし、必ずね）』と言つたエレンの調子は、丁度何かボリースに知る事の出來ない譯があつて、是非共さうしなくてはならないかのやうであつた。

『火曜日の八時と九時の間にね。若しお出でを願へれば、大變嬉しうございますわ。』

ボリースは彼女の希望を容れる事を約して、何か話をし向けようとして居る所へ、アンナ・シェーレルは伯母様（マヂャント）が何か聞きたがつてゐるから、といふ口實の下に彼を呼び出した。

『あなたは多分、あの方のご主人を御存知でせう。』アンナは目を閉ぢて、愁はしげな手振りでエレンを指し乍らかう言つた。『あゝ、あの方は本當に薄命な美人ですねえ！どうぞあの方の前でご主人の事を言はないで下さい、後生ですから仰しやらないでね。あの方を此の上に苦めるやう

なものですから。』

七

ボリースとアンナが一同の席へ歸つて來たとき、イッポリート公爵が會話の中心になつてゐた。彼は肘椅子に身を乗り出して、『Le roi de Prusse（普魯西亞王）』と言つて急に笑ひ出した。人々は彼の方へ振り向いた。

『Le roi de Prusse？』とイッポリートは問ひ掛けるやうに言つて、又もや仰山に笑ひ出した。そして再び落ち着き拂つて、物々しい風附で肘椅子に深く腰を据ゑた。アンナは暫くイッポリートの次の言葉を待つてゐたが、一向口を開きさうな樣子もないので、彼女は暴虐無道のボナパルトがボーツダムで、フリドリッヒ大王の佩劍を盜んだ顚末を語り始めた。

『C'est l'épél de Frédric le Grand que je....（そのフリドリッヒ大王の劍でございますね、わたしは）』と彼女が切り出さうとした時、イッポリートは急にそれを遮つた。

『Le roi de Prusse』と言つたが、人々が自分の方へ向き直るや否や、彼は又しても詫びを言つて口を噤んだ。

アンナは一寸顔をしかめた。イッポリートの親友たるモルテマール子爵は、開き直つて彼に向ひ

ながら、

『え、君、一體その普魯西亞の王樣がどうしたと言ふのだね？』

イッポリートは笑ひ出した。それは丁度自分で自分の笑ひが極り悪いやうな工合であつた。

『いや、何でもないのさ、僕が言ひたかつたのは只その（彼は嘗て維納で聞いた地口を繰り返したくて、此の晩絶えず、折もあらばそれを持ち出さうと構へてゐたのである）、僕が言ひたかつたのは、我々は徒らに Pour le roi de Prusse（プロシヤ王の爲めの意にして、又同時に詰らぬ事の爲めとも解せらる）に戰爭をしてゐるつて事なんだ。』

ボリースは用心深い微笑を洩した。それは一座の人々の態度の如何によつて、此の洒落に對する冷笑とも、また同意とも取れるやうな笑ひ方であつた。一同は笑ひ出した。

『あなたの地口は質が悪うございますが、大變氣が利いてゐますこと。けれど當つてゐるとは申されませんね。露西亞は決してに Pour le roi de Prusse（即ち無意味に）に戰爭してゐるのぢやありません、立派な主義の爲めですわ。まあ本當に此の人は何といふ意地悪でせう、このイッポリート公爵は！』アンナはしなびた指を立てて、脅かす眞似をし乍らかう言つた。

會話は重に政治上の新しい出來事に集中されて、一晩ぢう靜まるをりがなかつた。夜會の終りに、話題が皇帝の下賜品に觸れたとき、一座は殊に活氣づいた。

『だつて、昨年Nは御肖像入りの煙草入を拜領したぢやありませんか。』と「聰明な」紳士が言つた。『それになぜSは同じ賞與を頂く事が出來ないのでせう？』

『失禮ですが、御肖像入りの煙草入は單なる下賜品で、別に論功の意味ぢやないと思ひます。』と外交官が言つた。『寧ろ贈り物とでも言ふべきでせう。』

『先例もありました——シュワルツェンベルクは何うです。』

『そんな事はありません。』と又一人が辯駁する。

『賭けをしませう。Le grand cordon, c'est différent（大綬章なら別問題ですが）』

人々が辭し去るべく立ち上つたとき、一晩ぢうあまり口數を利かなかつたエレンは、再びボリースに向つて、火曜日に自分のところへ來るやうにと、優しい意味ありげな、命令のやうな願ひを持ち出した。

『わたし是非さうして頂かなくちやなりませんの。』アンナの方を振り返り乍ら、エレンは微笑を含んでかう言つた。アンナは自分の高貴な保護者——皇太后陛下の事を口にする度に浮べる、かの物思はしげなほゝ笑みを以て、エレンの希望を是認した。

それは丁度、普魯西亞軍隊に關して今夜ボリースの述べた或る言葉に依つて、突然エレンが彼と面會の必要を發見したやうな工合であつた。そしてボリースが火曜日にやつて來た時、この必

要の何たるかを證明すると、約束したやうな鹽梅であつた。

火曜日の晩エレンの華美な客間へ入つた時、ボリースは自分の來訪の必要が那邊にあるか、はつきりした說明を得る事が出來なかつた。他に客もあつたので、エレンは餘り彼と話をしなかつた。併し彼が暇を告げて女主人の手に接吻した時、彼女は微笑の陰もない不思議な顏附をし乍ら、思ひ掛けなく囁いた。

『Venez demain diner… le soir. Il faut que vous veniez…Venez（明日御飯をたべにいらつしやい…晩にね。是非いらつしやらなくちやいけませんよ……）

今度の彼得堡滯在中、ボリースはベズーホワ伯爵夫人の家に於て、最も近しい人となつたのである。

八

戰爭は酣になつて、舞臺は段々露西亞の國境へ近附いて來た。到る處人類の敵ボナパルトに對する呪詛の聲が聞えた。地方々々で國民兵や新兵が召集された。戰場からは種々雜多な報告が齎された。が、皆例に依つて僞りが多いので、それが爲め多種多樣の解釋が生じるのであつた。

ボルコンスキイ老公爵、アンドレイ公爵、マリヤ令孃の生活は、千八百五年以來多くの點に於

て變化を示した。

一千八百六年老公爵は、當時露西亞全國に置かれた、八名の民兵募集委員長の一人に任ぜられた。我子が殺されたものと信じ切つてゐた時分から、殊に老衰の樣子が目立ち始めたにも拘はらず、老公爵は皇帝自ら任命された職務を、辭退する權利がないと考へた。新に始つたこの事務生活は、彼の元氣を皷舞したのである。彼は絕え間なく、自分の受持になつてゐる三つの縣を巡囘してゐた。而も衒學臭に陷るほど職務に忠實で、慘酷なほど部下に對して嚴格で、事務の細々しい所まで自ら立ち入るのであつた。マリヤは父から數學の敎授をうける事をやめた。たゞ父が在宅の際は每朝乳母を隨へ、ニコライ小公爵（祖父は常にかう呼んでゐた）を連れて父の居間へ入る事になつてゐた。乳呑兒のニコライ公爵は、乳母と老婢サーギシナと共に、亡き母夫人に宛てられた邸の一部に暮した。マリヤは每日殆ど子供部屋に入り浸つて、幼い甥の爲めに出來るだけ母の役目を勤めようとした。ブリエンヌも矢張り幼いものを愛してゐるらしかつたので、マリヤは屢々苦痛を忍んで、小さな天使（彼女は甥をかう呼んでゐた）をあやしたり玩弄にしたりする樂しみを、ブリエンヌに讓つてやつた。

禿山の敎會の祭壇に近い、小柄な公爵夫人の土饅頭の上に、一つの禮拜堂が立つて居た。此の禮拜堂の中へ、伊太利から持つて來た大理石の記念碑が安置された。それには兩の翼を擴げて

今にも天へ昇らうと身構へてゐる、天使(エンゼル)の姿が刻まれてあつた。天使の上唇は今にも笑み綻びさうに、少しばかり持ち上つてゐた。ある時アンドレイ公爵とマリヤとが禮拜堂から出た時、此の天使の顔が不思議にも、亡き人の顔を憶ひ起させるといふ事を、互に白狀し合つたのである。併しそれよりももう一層不思議で、アンドレイ公爵が妹にも打ち明けなかつた事がある。それは彫刻家が偶然この天使の顔に刻み附けた表情の中に、アンドレイ公爵は嘗て妻の死顔に認めた、優しい譴責の言葉を讀んだのである。

『あゝ、なぜあなた方はわたしをこんな目に合したのです？……』

アンドレイ公爵の生還後間も無く、老公爵は我子にボグチャーロヴといふ、禿山から四十露里隔てた大きな領地を分けてやつた。一つには禿山と結びつけられた苦しい記憶を忘れる爲めと、二つには時々父の性質を我慢し切れない事がある爲めと、又最後に孤獨の必要を感じた爲めに、アンドレイ公爵はボグチャーロヴを利用して其の地に居を定め、大部分そこに引き籠つて時を過した。

アンドレイ公爵はアウステルリッツの會戰以來、決して軍務に服すまいと同く決心したので、今度戰爭が始つて、國民一同必ず軍務に服さなければならなくなつた時、彼は現役の任務を避ける爲め、父の部下について民兵募集の職に當つた。千八百五年の戰役後、ボルコンスキイ父子は、まるで互の役廻りを交換したやうな工合になつた。老公爵は自分の活動に刺戟されて、今度の戰

爭からあらゆる好結果を豫想してゐたが、アンドレイ公爵はそれと反對に實戰に參加しないで、而も心の奥ではそれを殘念に思ひ乍ら、只忌はしい事のみ見出すのであつた。

千八百七年二月二十六日、老公爵は軍管區内の巡囘に出掛けた。アンドレイ公爵は父の不在中、大抵禿山(ルイシエゴールイ)で留守をするのが習慣のやうになつてゐた。小公爵のニコールシカは、もう四日ばかり前から加減がわるかつた。老公爵を乘せて行つた馭者が町から歸つて來て、アンドレイ公爵にあてた書類と手紙を齎した。

侍僕は手紙を持つて、アンドレイ公爵を探しに行つたが、書齋にゐないので、マリヤの部屋へ赴いた。が、其處にも矢張り若主人は居なかつた。侍僕は公爵が子供部屋へ行つた事を教へられた。

『御前樣、一寸お出でを願ひます。ペトルーシャがお手紙を持つて參じました。』と乳母の手傳をしてゐる小間使の一人が、アンドレイ公爵に向つてかう言つた。公爵は小さな子供椅子に坐つて、眉をひそめ乍ら慄へる手で、半分位水の入つた杯へ罎から藥を滴(たら)してゐた。

『何だ？』と彼は言つたが、うつかり手を慄はせたので、罎から杯の中へ幾滴か餘計に藥をたらし込んで了つた。彼は藥をぱつと床へうつして、再び水を呼んだ。小間使が直ぐ持つて來た。

部屋の中には子供の寢臺と、二つの箱と、二脚の安樂椅子と、大卓と、子供用の卓と椅子——

例のアンドレイ公爵の坐つてゐる椅子――とがあつた。窓はみな帷(カーテン)を引かれてゐた。卓の上には一本の蠟燭が燃えてゐたが、寢臺へ光が射さないやうに、製本した樂譜で屏風をしてあつた。

『兄さん、』寢臺の傍に立つてゐたマリヤが、其處から兄に聲を掛けた。『少し待つた方がいゝわ……後で又……』

『ちよつ、後生だから止してお呉れ、お前は馬鹿ばかり言つてる、お前があんまり待て待てと言ふものだから、到頭こんな事になつて了つたんだよ。』明らかに妹に厭味をいふ積りらしく、憤々しい聲でアンドレイ公爵は囁いた。

『だつて兄さん、本當に今起さない方がいいわ、折角寢入つたんですもの。』マリヤは哀訴するやうな聲でかう言つた。

アンドレイ公爵は立ち上り、杯を持つて爪先立ちで寢臺に近寄つた。

『それとも本當に起さない方がいゝかな？』と彼は決し兼ねた體(てい)で言つた。

『どうともお考へ通りに……全く……わたしさう思ひますけど……でもまあお考へ通りに……』マリヤは自分の意見が徹つたのを極(きま)り惡がるやうに、おづ〳〵とかう言つた。そして小聲で若主人を呼んでゐる小間使を、兄に指さして見せた。

二人が熱に惱む幼兒を看護(みとり)乍ら目も合さずにゐるのは、もうこれで二晩目である。此の二晝

夜といふもの、抱へ醫師を信頼する事が出來ないで、わざ〳〵迎へにやつた町醫の到着を待ち焦れ乍ら、彼等はあれかこれかと樣々な藥を使つて見た。心配と不眠とに惱まされた兄妹は、自分の悲しみを對手に浴びせ掛けようとして、互に責め合つては言ひ爭ふのであつた。

『ペトルーシャが大殿樣のお手紙を持つて參りました。』と小間使が囁いた。

アンドレイ公爵は部屋を出た。

『畜生、下らないものを持つて來やがつて！』と彼は呟いた。そして父の言づけを聞き終ると、郵書と父の手紙を受け取つて子供部屋へ歸つた。

『どうだね？』と彼は訊いた。

『矢張り同じですわ、お待ちなさいな――お願ですから、カルル・イヴーヌイチ(抱へ醫師)も睡眠が一番何より大切だつて、何時も言つてますもの。』と溜息まじりにマリヤが囁いた。

アンドレイ公爵は幼兒に近附いて一寸觸つてみた。幼兒は熱に燃えてゐた。

『お前はカルル・イヴーヌイチと一緒に、何處へでも勝手に行くがいゝ！』彼は藥をたらし込んだ杯を持つて、再び寢臺に近寄つた。

『兄さん、お止しない！』とマリヤは言つた。

併し彼は憎々しげな、と同時に苦悶に充ちた目附で、妹に眉をひそめて見せた。そして杯を持

つて幼兒の上に屈み込んだ。

『いや、僕はかうしたいんだ。さあ、お願だから、これを飲まして呉れ。』

マリヤは一寸肩を竦めたが、從順しく杯を取つて乳母を呼び、藥を與へ始めた。幼兒は咽喉をぜいぜい鳴らし乍ら泣き出した。アンドレイ公爵は顏をしかめ、兩手で頭を抱へて部屋を出ると、隣室の長椅子に腰を下した。

手紙は依然として彼の手にあつた、彼は機械的に封を切つて讀みに掛つた。老公爵は青い書簡箋に持前の大きな竪長の筆蹟で、所々尊稱を使ひ乍ら次のやうに書いてゐた。

『たつた今飛脚の手から（若し出鱈目でないとすれば）非常に喜ぶ可き報知を受け取つた。ベニグセンがアイラウでブオナパルトに對して、非常な大捷を博したらしい。彼得堡では皆有頂天になつて了つて、軍隊へ送られる賞與は後から〳〵と果しがない。ベニグセンは獨逸人だが、何しろ結構だ。カルチェヴ町長のハンドリコフとかいふ男は、何をしてゐるのか合點が行かぬ。今日迄補充兵も糧食も送つて來ない。直ぐに同市へ駈け附けて、一週間内に供給出來なければ、首を引つこ抜いてやると言つて來い。ブライシッシュ・アイラウ役の事に就いては、尙ペーチェンカからも手紙が着いた。あいつは此の役に參加した故間違ない。出しやばる可きでない奴が、出しやばつて邪魔をしなければ、獨逸ですらブオナパルトを敗る事が出來るのだ。話に依ると、滅茶々々

に潰走したさうだ。一刻も猶豫なくカルチェヴへ駈けつけて、用を濟ますのだぞ！』

アンドレイ公爵は溜息をついて、今一つの封書を開いた。それは用箋二枚に細かく書き詰めたビリビンの手紙であつた。彼はそれを讀まずに疊んで、『カルチェーヴへ駈けつけて用を濟ますのだぞ』といふ言葉で終つてゐる、父の手紙を今一度讀み返して見た。

「いや眞つ平です、子供がよくなる迄出掛けやしませんよ。」と考へて彼は戸に近寄り、子供部屋を覗いてみた。

マリヤは依然として寢臺の傍に立つたまゝ、靜かに幼兒を搖つてゐた。

「あゝさうだ、未だ何か一つ厭な事が書いてあつたつけ。」アンドレイ公爵は父の手紙の内容を想ひ出した。『さうだ。我軍がボナパルトに對して勝利を博したのは、丁度俺が勤務してゐない時なのだ。さうだ。何もかも俺を愚弄してゐるんだ……まあま、どうなと御勝手にだ……」かう考へて、彼は佛蘭西語で書いたビリビンの手紙を讀みにかゝつた。が、半分ばかりは意味も分らずに讀んでゐた。それは餘りに長く、一生懸命に苦しい程考へ續けてゐた或る一つの事を、ほんの暫くでも忘れたいが爲めに過ぎなかつた。

九

ビリビンは目下大本營附の外交官を勤めてゐた。此の手紙は佛蘭西語で書かれ、佛蘭西式の洒落た言ひ廻しに充たされて居たけれど、彼は純露西亞的な忌憚なき自己譴責と自己嘲笑を以て、全戰局を描寫してゐる。彼は自分の外交家としての discrétion (制縛)の爲めに苦しめられてゐる事や、軍中の出來事を見るにつけて、自分の心内に鬱積してゐる憤懣の情を吐露すべき、誠實なる通信者をアンドレイ公爵に發見するのを、幸福に思つてゐる事などを書き記して居た。此の手紙はブライシッシュ・アイラウ役以前の古いものであつた。

『アウステルリッツに於ける我軍の華々しい戰勝以來、君も御承知の通り、』とビリビンは書いてゐた。『僕は引續き本營を離れないでゐる。僕はすつかり戰爭趣味の中に入り込んで了つて、而もそれで非常に滿足してゐる次第さ。所が、此の三箇月の間に僕の見聞した事は、皆有り得べからざる事ばかりだ。

『僕は ab ovo(抑々の始まりから)書く事にする。御承知の人類の敵が普魯西亞を攻擊にかゝつた。三年間に僅か三度しか露西亞を騙したことのない、我が忠實なる同盟國だ。露西亞は此奴の爲めにしよつちう酷い目に遭つてばかりゐる。併し兎に角とゞの詰り、人類の敵は我國の立派な提言に少しも注意を拂はないで、持前の無遠慮な蠻的な遣り口で、普魯西亞を襲擊する事になつた。そして折角始めた觀兵式を終結する暇も與へないで、普魯西亞軍を粉微塵に打ち破り、ポーツダムの宮殿

に入り込んで了つた。

『然るに、普魯西亞王がボナパルトへ呈した親書に曰く、余は陛下が余の宮殿に於て、最も陛下の御心に適ふ歎待を受けられん事を冀望す。而して余は特に意を用ひて、事情の許す限りこれが爲めに必要なる處置を講ぜんとす。希くは余の希望を容れられん事を——だとさ。普魯西亞の將軍連は佛蘭西兵に對して慇懃を競ひ、最初の要求と共に降服してゐる有樣だ。

『十萬の兵を率ゐたグロガウの守備隊長は、若し降參しなければならなくなつたら、如何致したら宜しいでせうかと、普魯西亞王に奏聞してゐる。これはみんな徹頭徹尾本當の事なのだ。

『一言にして蔽へば、露西亞は自國の兵力の現狀を以て、敵に恐怖の念を吹き込まうと思つたのだが、豈計らんや、却つて我が國境に於て戰爭の渦中に捲き込まれたのだ。而もそれが pour le Roi de Prusse (普魯西亞王の爲め)なのだから堪らない、所で、我軍には何もかも有り餘つてゐるが、たつた一つ一寸したものが不足してゐる——それは總指揮官なのだ。アウステルリッツ役の成功も、總指揮官があんなに年若でなかつたら、今一層確實だつたらうにと氣附いたので、八十代のよぼ〳〵將軍連を物色した結果、プロゾーロフスキイとカメンスキイを比較して、遂に後者が擧ゆられた。將軍がスヴーロフ式に一頭曳馬車(キピートカ)に乘つて軍に到着すると、一同は勝ち誇つたやうな歡呼を以つて迎へたと思ひ給へ。

『四日の日に彼得堡から最初の飛脚が來た。やがて何事も自分でする事の好きな元帥の書齋へ鞄が持ち込まれた。元帥は僕を呼んで、手紙の整理をした上、我々の宛名になつた書類を持つて行くやうに手傳ひを命じた。元帥は我々に此の仕事を任せ乍ら、自分に宛てた封書を待ち兼ねてゐる。我々は一生懸命に探したが、元帥宛てのは出て來ない。元帥はいら〳〵して、自分で探しに掛つた。すると皇帝陛下からT伯爵にあてたのや、V公爵にあてたのや、いろ〳〵な書面が目に入つた。元帥は怒氣心頭に發し、我を忘れて手紙を開封した。そして陛下が他の人に宛てられた手紙を讀んで了つた。「はゝあ、俺にはかういふ仕打をなさるんだな！俺には全然御信任がないんだ！俺を監視しろといふ御命令だ、宜しい。さあ、君達は彼方へ行き給へ！」そこで元帥はベニグセン將軍にあてた有名な例日命令を書いた。曰く、

「小官は負傷の爲め騎乘不能、從つて全軍の指揮も致し難く候。貴官は擊破されたる麾下の軍團をプルトゥスクへ誘導なされ候が、軍は掩護隊もなく、燃料も糧秣も缺乏いたし居り候へば、救助の方法を講ずること必要に御座候。これにつき貴官御自身、昨日ブクスゲヴデン伯爵に御相談これ有り候に付き、本國々境へ向け退却の義御考慮なさる可く候。此の義は本日直ちに實行の必要これ有り候。」

「臣は過般來頻繁なる騎乘の爲め――と彼は更に皇帝に上奏文を認めた――鞍摺れに罹り申し

候。過般の旅行後間も無き事とて騎乘の自由を奪はれ、かくの如き大軍の指揮は到底不可能と相成り申し候。かゝる次第に付き、臣は指揮萬端一切を臣に次ぐ年長將軍ブクスゲヴデン伯爵に相讓り、一切の事務及びそれに附屬するすべての物件を同將軍に移管し、若し糧食缺乏の場合は、普魯西亞内地に近く退却方を勸告致し置き申し候。糧食の殘部は僅か一日を支ふるのみにして、甚しきに至りては全然皆無の隊もこれ有り候。此の義はオステルマン及びセドモレーツキイ兩師團長の言明に徵しても明かに御座候。又農村にては一切の食料を消耗し盡し居り候。

「臣自身に至りては、全快の節までオストロレンコの病院に殘留致す可く候。尙一つ謹んで奏上致し度き儀は、若し軍が現在の野營を今後十五日間持續致し候はゞ、立春までには一人の健康者をも殘すまじくと愚考仕り候。

「冀くば此の老爺を田園に御放ち下され度く候。臣は此の度御拔擢に相成りたる、偉大にして光榮ある任務を果し能はざる程侮辱を蒙り申し候。此の義に對する御勅命は、當地の病院にて相待ち申し上ぐ可く候。何となれば、軍に在りて指揮官ならぬ書記の職務を執らんより、遙かに勝れるがために御座候。臣が軍を離るゝ事は、盲者が軍を去りたる程の動搖をも惹起する事これ無かるべく、臣の如き輩は露西亞國に千を以て數へ申す可く候。」

『元帥は（とビリビンが續けた）、陛下に向つ腹を立てて、我々一同に當り散らすのだ。實際

論理的(ロジカル)ぢやないか、ねえ！

『これが第一幕だ。幕が進むに從つて興趣は益々加つて行く。それは申す迄もない事だ。元帥が去つた後、意外にも我軍は何時の間にやら敵と面接してゐて、どうしても砲火を交へなければならなくなつた。年長順に依つて、總指揮官はブクスゲヴデンで有るべきだが、ベニグセン將軍は全然それに同意といふ譯に行かぬ。況んや將軍の一箇軍團が敵と直面してゐるので、其の機會を利用して、獨力戰鬪を開始しようと望んでゐるに於てをやだ。で、彼は遂にそれを開始した。これが例の我軍の大捷を以て目されてゐる、プルトゥスクの戰役だ。が僕の意見では、全然捷利などと言ふべきものでない。御承知の通り我々文官は、戰爭の勝敗を批判するに際して惡い習慣を持つてゐる。卽ち戰爭の後に退いたものは敗北者に外ならない、とこんな風に我々は言ふのだ。此の論法で行くと、我軍はプルトゥスクの役で敗れた事になる。手短かに言ふと、我軍は戰後退却しつゝあるのに、彼得堡へは飛脚を以て大捷の報を齎らしたのだ。ベニグセン將軍は此の大捷に對する感謝として、總指揮官の榮職を拜命するかも知れないと期待してゐるので、全軍の指揮をブクスゲヴデンに讓らうとしない。

『かうした內訌の中に我々は奇拔な面白い演習を始めた。我軍の目的計畫は當然なすべきやうに、敵を避け若しくは攻擊する事に存せずして、年長順に依れば當然我軍の總長官たるべき、ブ

クスゲヴデン將軍を避ける事にのみ存するやうになつた。我軍は恐しい勢で此の目的を追窮してゐる。徒涉點のない河を渡つたり、敵を分離せんが爲めに橋を燒いたりする有樣だ。而もその敵は今の處ボナパルトでなく、ブグスゲヴデンなのである。我軍を度々「敵」から救つて呉れたかういふ演習の結果、ある時ブクスゲヴデン將軍は、精銳なる佛蘭西軍の爲めに攻擊され、危く捕虜となりかけた事がある。ブクスゲヴデンは我々を追跡する——我々は逃走する。彼が我々の立つてゐる岸へ着くや否や、我々は早速河を渡つて向う岸へ行つて了ふ。所が、到頭ブクスゲヴデンは我々を摑まへて、大いに攻擊した。兩將軍は互に立腹して、遂にはブクスゲヴデンが決鬪を申し込むやら、ベニグセンが癲癇の發作を起すやら、大騷ぎが持ち上つた。此の危機一髮といふ瞬間に、彼得堡へプルトゥスクの大捷を齎した飛脚が歸つて來て、ベニグセン將軍に總指揮官の榮職を授けた。そこで第一の敵ブクスゲヴデンは敗られた。今こそ第二の敵ボナパルトの事を考へ得るわけだ。

『然るに、此の時我々の前に第二の敵が出現した。それは正敎國の民である。彼等は遠慮の無い高聲を擧けて麵麭、牛肉、ビスケット、乾草、燕麥、その他樣々なものを要求してゐる！而も店舗は空しく、道路はとても通行の出來ない狀態だ。正敎國の民はやがて掠奪を始めた。その掠奪たるや、最近の戰役中全然類似の槪念を得難いやうな程度に達してゐる。各聯隊の大多數は自由

結社のやうなものを組織して地方を巡回し、一切を棄げて悉く劒と焔とに委ねて了つてゐる。住民はすべて荒し盡され、病院は患者に充たされ、饑餓は至る處に暴威を逞しうしてゐる。二度ばかり本營へ掠奪者の群が押し掛けて來た事さへある。で、元帥は彼等を追ひ拂ふ爲めに、止むなく一大隊の兵を召集した。かうした襲擊の際、僕は一度空鞄と寬衣を持つて行かれた。陛下は各師團長に、これ等の掠奪者を射殺する權利を與へようしてゐられる。併し僕は、この命令が我軍の一半をして、他の一半を射ち殺させる事になりはせぬかと、內々心配してゐる。』

アンドレイ公爵は始めの中たゞ目だけで讀んでゐたが、やがて何時とはなしに手紙の內容が、段々彼の心を占めて行つた（彼はどれ位までビリビンに信を措き得るか、十分承知しては居たけれど……）こゝ迄讀んで來た時、彼は手紙を丸めて拋り出した。それは何も手紙の文句が彼を憤らしたのではない。たゞ何の緣も無い遠隔な土地の生活が、自分を動搖さしたのが忌々しかつたのである。丁度今讀んだ事件に對する一切の同情を追ひのけるかのやうに、目を閉ぢて片手で額を拭ひ、子供部屋の樣子に耳を澄した。不意に戶の向うで妙な物音がしたやうに思はれた。恐怖が彼を襲つた――自分が手紙を讀んでゐる中に、何か子供に變があつたのではないか、かう思つて彼は爪先立ちで子供部屋に近寄り、そつと戶を開けて見た。

入つて見ると、乳母は慴えたやうな顏をして何やらつゝと隱した。そしてマリヤは寢臺の傍にゐ

なかつた。

『兄さん。』といふマリヤのびつくりしたやうな（と彼には思はれた）、囁きが後ろから聞えた。

長い不眠と興奮の後によくある事だが、彼はいはれ無き恐怖の擒となつた。子供が死んだのではないか、といふ考へがふと彼の心に浮んだ。彼の見た事聞いた事のすべてが、此の恐怖を裏書するやうに思はれた。

「もう何もかもお終ひだ。」と彼は考へた。すると冷い汗が額に滲み出た。彼は寢臺の方へ近寄つた、多分寢臺は空になつてゐるだらう、先刻乳母の隱したのは赤ン坊の死骸に相違ない、とかう信じ乍ら彼は垂れ布をおし開いた。併し慴えてうろ〳〵した目は、暫く幼兒を發見する事が出來なかつた。遂にやうやく目附かつた。幼兒は血色のい、顏付をして手足を踏み伸し、枕より低い邊りに頭を落し、寢臺の上で橫向きになつて寢てゐた。そして夢の中で脣をもぐ〳〵させ乍ら舌打して、なだらかに呼吸をしてゐるのであつた。

アンドレイ公爵は幼兒を見付けると、まるで本當に失つたものを取り戻したやうに嬉しかつた。彼は屈み込んで、妹から習つたやうに、幼兒に熱があるかないか唇で試して見た。柔かい額は沾みを帶びてゐる。手で頭に觸つてみると――髮の毛までじめ〳〵してゐた。幼兒は烈しく發汗したのである。幼兒は死なゝかつたばかりか、明らかに危機が過ぎて恢復したのだ。彼は此の小さ

な頼りない生き物を抱き取つて、揉みくたにして自分の胸へしめ付けたいやうな氣がした。けれどさうする勇氣はなかつた。彼は夜具の上からもそれと知られる手、足、頭を見廻しつゝ其の傍に立つてゐた。と、直ぐ傍に衣摺れの音が聞えて、寢臺の帷の下から何か影のやうなものが現れた。彼は其の方を見返らずに、じつと幼兒の顔を見詰めてゐた。影のやうなものはマリヤであつた。彼女は音のせぬやうに寢臺に近附き、帷を持ち上げて入ると又それを下した。アンドレイ公爵は振り返らないけれどそれと悟つて、彼女の方へ手を差し伸した。彼女はそれを握りしめた。

『發汗したよ。』とアンドレイ公爵は言つた。

『わたしもそれを言ひに行きましたのよ。』

幼兒は夢の中に一寸身じろぎして微笑を浮べ、額を枕にこすつて拭いた。

アンドレイ公爵は妹を見遣つた。マリヤの光に充ちた目は幸福の涙を湛へて、帷の中のぼうとした柔かい光の中で、いつもより餘計きら〳〵輝いてゐた。マリヤは兄の方へ身を伸して、寢臺の帷に觸れ乍ら接吻した。二人は互ひに脅すやうな眞似をして、ぽつとした柔かい光の中に長い事立ち續けてゐた。それはかうして三人切りで全社會から分たれてゐる、此の小さい世界と離れたくないやうな風であつた。アンドレイ公爵は帷のレースで毛を亂し乍ら、寢臺から離れた。

『さう、これが今僕の爲めに殘された、たつた一つのものだ。』彼は溜息と共にかう言つた。

一〇

共濟組合へ入會してから間も無く、ピエールは自分の領地でなすべき仕事に關して、詳しい指導の書附けを貰つて、自家所屬の百姓の大部分が集つてゐる、キーエフ縣へ出掛けたのである。

キーエフ市へ到着すると、ピエールは支配人を殘らず本部の事務所へ呼び集めて、自分の意向や希望を陳述した。卽ち農夫を奴隷制度から全然開放するやうに、早速相當の方法を講ずべき事、それまで當分農夫に過重の勞働を强ひぬこと、子持の婦人に勞働を課さぬ事、農夫には必ず扶助を與ふべき事、刑罰は單に訓諭に留めて體刑を廢する事、各領地に病院、宿泊所、學校を建設する事などであつた。

支配人の或る者は(その中には半ば文盲の家扶もゐた)、新伯爵が自分達の管理の惡い事や、金をくすねたりする事について、不滿を抱いてゐるに相違ない、といふ風にピエールの言葉を解釋して、びくびくもので聞いてゐた。あるものは最初一寸恐怖の念を感じたが、やがてピエールの吃り勝ちな話し振や、聞いた事もない新しい言葉の響きを面白がるやうになつた。あるものは主人の話を聞くのを、單に愉快に感じた。又あるものは(これは一番分別のある連中で、其の中には總支配人も入つてゐた)、自分の目的を達するには、どんな風に主人に應對すべきかを、其の言葉

の中から曉つたのである。

總支配人は先づピエールの意向に深甚なる同情を表した。併しこれ等の改革の他、目下紊亂してゐる一般事務の整理に從事する必要を陳べた。

ベズーホフ伯爵家の莫大な財產にも拘らず、ピエールがそれを讓り受けて、五十萬と云はれてゐる年收を受け取るやうになつて以來、彼は亡父から一萬留(ルーブリ)づゝ貰つてゐた頃よりも、ずつと不自由になつたやうに感じた。彼は次のやうな概略的豫算をぼんやりと知つてゐた。卽ち各領地から政府へ納める稅が約八萬留、莫斯科郊外の別莊と莫斯科市の邸宅維持費、それに親類の令孃達への支給が三萬留、年金として一萬五千留、慈善院にそれと同額、エレン夫人の生活費に十五萬留、負債の利子として約七萬留、それから建築に取り掛つた敎會堂に、此の二年間一萬留づゝ出て行く。殘りの約十萬留は何うして失くなるのか、彼自身も知らなかつた。かういふ有樣で、殆ど毎年借込みをしなければならなかつた。其のほか總支配人は或ひは火事、或ひは不作、或ひは工場改築の必要を書いて寄越すのであつた。で、先づ第一にピエールが着手しなければならぬ仕事は、彼の最も不得意で且つ嫌ひな事務整理であつた。

ピエールは毎日總支配人と仕事に從事した。併し彼は自分の努力が一歩も先へ事務を進捗させないのを感じた。自分の努力が事務その物とは、何等の關係なしに行はれて、丁度齒車の空廻り

のやうに感じられた。又一方總支配人は、領地の現狀を極めて不利な光に照らし出して、ピエールに負債の返却、農奴の力に依る新起業の必要を證明して見せた。ピエールは又そんな事に同意出來なかつた。又一方ピエールはピエールで農奴開放の實行を迫つたが、總支配人はそれに對して、先づ第一番に貴族保護局(オペクンスキイ、ソヴエート)へ未納稅納付の必要な事、從つて早急な理想實現の不可能を論證した。

支配人は全然不可能だとは言はなかつた。彼は此の目的貫徹の爲めにコストローム縣の森林と、河添ひの低地と、クリミヤの領地賣却を提言した、けれどもかうした支配人の計畫は禁止の解除とか、請願とか、許可とか、樣々な錯綜した手續を伴ふので、ピエールはすつかり煙に卷かれて了つた。『さう、さう、そんな風にして貰はう。』といふより他に仕方が無かつた。

ピエールは直接事務鞅掌の可能を人に與へる、實際的な固執性を持つてゐなかつた。それ故彼は實務といふものを好まなかつたので、只支配人の前で、如何にも事務に熱中してゐるやうな振を見せるだけであつた。所が支配人は伯爵の前で、かうした仕事は主人に取つてこそ極めて有利であるが、自分に取つてはたゞ面倒臭くて堪らないばかりだ、といふやうな振りをして見せた。

此の大市街には多くの知人があつた。それに知らない人も先を爭つて、縣一番の領主たる新來の富豪の知遇を求め、親切らしく歡迎するのであつた。ピエールが共濟組合(マソン)に入會の際自白した、

彼の最大弱點に關する誘惑も中々烈しくて、ピエールはどうしても抑制する事が出來なかつた。又もや幾日も、幾週も、幾月も、ピエールの生活は煩はしく忙しない、夜會や晩餐會や舞踏會の間に流れ去つて、彼得堡にゐた時と同じく、自省の暇もない位であつた。ピエールの望んでゐた新生涯の代りに、彼は又以前と同じ生活を送り始めた。只違つてゐるのは周圍の狀況だけであつた。

共濟組合の三つの使命の中、ピエールはかの精神生活の龜鑑たるべしといふ使命を、未だ遂行してゐない事を自覺した。それに七つの德の中二つだけは、全然彼の身に備はつてゐなかつた。即ち溫厚と死に對する愛とである。其の代り他の使命——人類の匡正を實行してゐるし、他の諸德——隣人に對する愛と、就中寬大の德を具備してゐる事を思つて、自ら慰めるのであつた。

千八百七年の春、ピエールは彼得堡へ引つ返さうと決心した。其の途すがら自分の領地を巡回して、自分の命じた事がどれ位實施されたか、又神から自分に托された人民——自分が慈愛の手をさし延べようとしてゐる人民が今どんな狀態にあるか、親しく視察しようと思ひ立つた。

總支配人は若い伯爵の計畫を悉く無謀の擧、即ち自分に取つても、主人に取つても、百姓等に取つても、等しく不利な企てと考へてゐたが、それでも若干の讓步をした。依然として開放の事業を不可能なものと論證し乍らも、彼は學校、病院、宿泊所の大きな建物を、主人の巡視の時ま

で各領地に建築するやうに差圖した。彼は華美な仰々しい歡迎が、ピエールの氣に入らない事を呑み込んでゐるので、到る處に聖像や麵麭や鹽(歡迎の古式)を持ち出すやうな、宗教的な而も感謝の意を含ました歡迎會の準備を整へた。それは彼の解釋に從へば、必ず主人にいゝ感じを與へ、其の目を眩まし得るに相違ない、と信じたからである。

南方の春、維納式の幌馬車を驅る平穩な而も快速な旅行、旅中の孤獨、これ等のものが悉くピエールに快く働きかけた。彼が未だ訪れたことのない領地は、進むにつれて愈々美しくなつて行く。到る所の人民は裕かに其の日を過し、彼の施した善行に心から感銘してゐるやうに見えた。到るところに擧げられた歡迎の式は、一寸ピエールに極りの惡い思ひをさせたが、心の底では歡喜の情を呼び醒ましたのである。ある所では、百姓が麵麭と鹽、それにペテロとパウロを祭る爲めに、又彼の施した善根に對する感謝と愛のしるしとして、自費で教會內に禮拜堂を建て添へさせて貰ひたい、と許しを乞うた。又或る處では乳呑兒を抱へた女達が出迎へて、過激な勞働を免じられた禮を述べた。又或る領地では一人の僧侶が十字架を手にし、伯爵の情に依つて讀み書きと宗教を習ふ事になつた、大勢の子供等に取り卷かれて彼を迎へた。すべての領地に同じ設計で建てられ、又建てられつゝある病院、學校、養育院などの石造家屋が、今にも開かれるばかりになつてゐるのを、ピエールは自分